鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（131）

南九州西回り自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－ⅩⅩⅦ

（市来IC～薩摩川内都IC）

しも　つき　でん　　みやこ　ばる

霜月田遺跡・都原遺跡

（薩摩川内市）

２００８年３月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

霜月田遺跡　遠景（西から）

霜月田遺跡　縄文時代早期土器

都原遺跡　縄文時代早期土器

都原遺跡　須恵器（骨蔵器）

序　　文

この報告書は，南九州西回り自動車道川内道路建設に伴って，平成12年度～15年度にかけて実施した薩摩川内市（旧川内市）に所在する霜月田遺跡及び都原遺跡の発掘調査報告書の記録です。

この遺跡は，川内平野の南側にあたる，標高約50mの台地上に位置します。近くには成枝氏が居城した都城があったと伝えられています。

霜月田遺跡は，旧石器時代から近世にかけての複合遺跡です。縄文時代では早期の中原式土器や押型文土器など，晩期の深鉢や浅鉢など多様な遺物が出土しました。さらに古代から中世の掘立柱建物跡，竪穴建物跡，落とし穴，土坑などが検出されています。

また，都原遺跡は縄文時代早期から近世にかけての複合遺跡です。縄文時代早期の山形押型文土器や変形撚糸文土器等の他，特に古代の骨蔵器と思われる須恵器壺が，埋納された状態で出土しています。また，両遺跡からは白磁，青磁，青花などの輸入磁器が出土しました。これらの遺物は，中世全般において薩摩国の海外交易を考える上で重要な資料となりました。

本報告書が，県民の皆様はじめ多くの方々に活用され，埋蔵文化財に対する関心と御理解をいただくとともに，文化財の普及・啓発の一助として大いに活用されることになれば幸いです。

最後に，調査に当たり御協力いただいた国土交通省鹿児島国道事務所，薩摩川内市（旧川内市）教育委員会，及び発掘調査・整理作業に従事された地域の方々に厚く御礼申し上げます。

平成20年３月

鹿児島県立埋蔵文化財センター
所　長　　宮　原　景　信

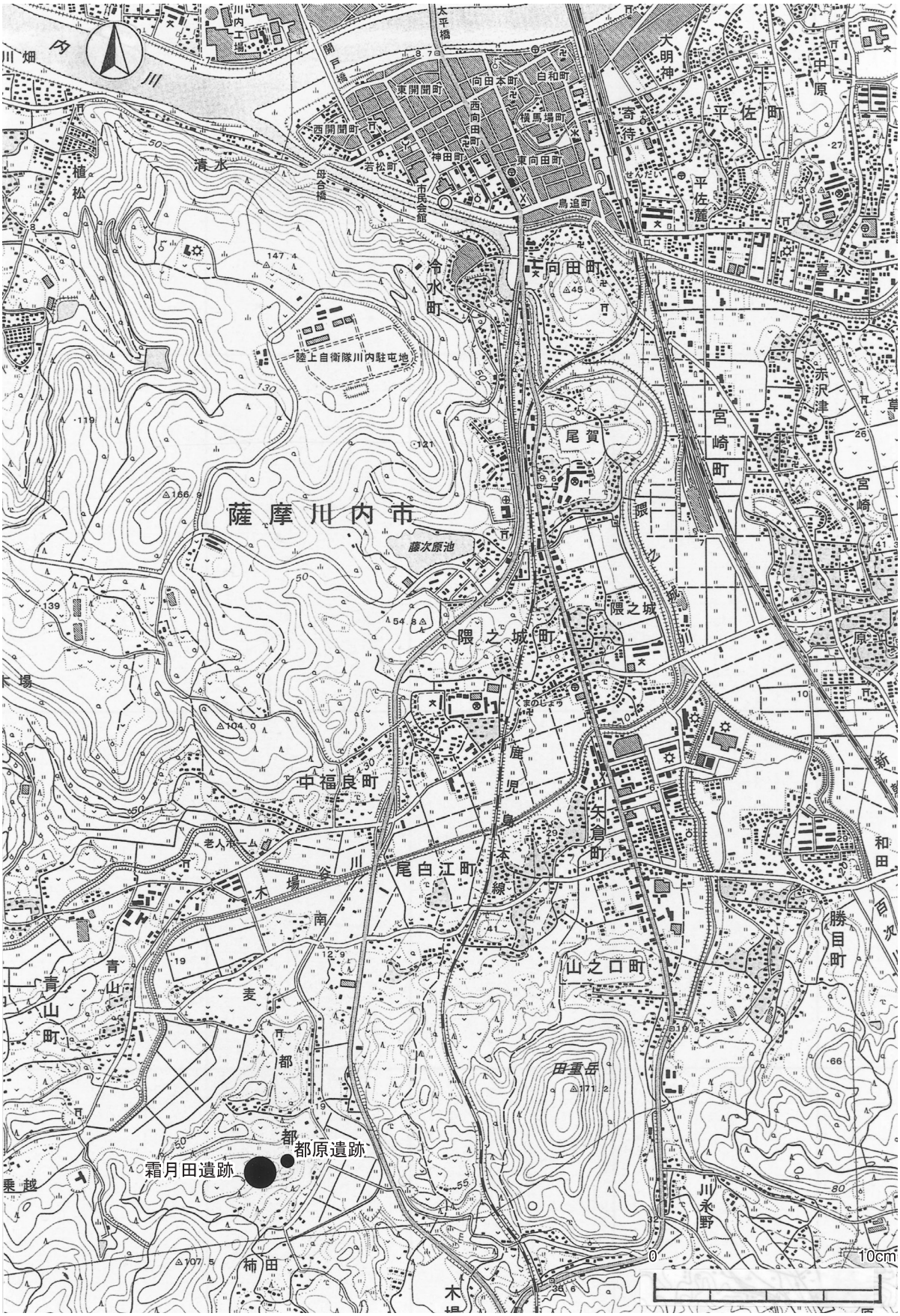
報 告 書 抄 録

ふ り が な	しもつきでんいせき・みやこばるいせき
書　　名	霜月田遺跡・都原遺跡
副 書 名	南九州西回り自動車道川内道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻　　次	ⅩⅩⅧ
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	(131)
編集者名	岩屋高広・木之下悦朗・松元佑輔・鶴田静彦
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター
所　在　地	〒899－4318　鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森２番１号　0995－48－5811
発行年月日	平成20年３月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北　緯	東　経	調査期間	調査面積	調査起因
しもつきでん 霜月田遺跡	かごしまけんさつませんだい 鹿児島県薩摩川内 しみやこちょう 市都町6701－1他	462021	6-152-0	31°46'15"	130°17'48"	確認調査 19991004～19991008 本調査 20001003～20001226 20030616～20040226	139㎡ 3,000㎡ 8,000㎡	南九州西回り自動車道川内道路建設
みやこばる 都原遺跡	かごしまけんさつませんだい 鹿児島県薩摩川内 しみやこちょう 市都町6646－4			31°46'19"	130°17'56"	確認調査 20001204～20001207 本調査 20020821～20021213	144㎡ 4,000㎡	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
霜月田遺跡	集落地	旧石器時代第Ⅰ文化層		ナイフ形石器，台形石器，スクレイパー，剥片石器，石核，磨石・敲石	
		〃　第Ⅱ文化層	礫群１基	細石刃，スクレイパー，磨石，敲石	
		縄文時代早期	集石３基	中原式，条痕文，山形押型文・楕円押型文，平栫式，塞ノ神式，石鏃，スクレイパー，使用痕剥片石器，打製石斧，礫器，磨石，敲石，石皿	
		縄文時代中期・後期	集石１基	阿高式，南福寺式土器	
		縄文時代晩期	集石２基	粗製深鉢，精製浅鉢，組織痕，石鏃，石匙，スクレイパー，楔形石器，使用痕剥片石器，石斧，礫器，磨石，敲石，石皿	
		古代～中世	掘立柱建物跡５棟 竪穴建物跡４基 落とし穴３基 土坑３基 焼土域１か所	土師器（甕，椀，皿）須恵器（擂鉢），陶器（擂鉢），陶磁器（青磁，白磁，青花）	
		近世	溝状遺構３条 古道１条	陶器（備前焼，薩摩焼）	
		近・現代		銭貨	
都原遺跡	散布地	縄文時代早期	集石１基 土坑３基	山形押型文　変形撚糸文，手向山式，石鏃，スクレイパー，石核，磨石，敲石，石皿	
		古代	埋納遺構（骨蔵器）	須恵器	
		中世	道跡　１条 溝状遺構　１条	土師器（皿），陶器（擂鉢），陶磁器（青磁，染付）	
		近世	溝状遺構　１条	陶器（肥前焼，薩摩焼）	

遺跡の概要	霜月田遺跡は，主に旧石器時代ナイフ形文化期から近世までの遺構や遺物が発見された複合遺跡である。縄文時代では早期と晩期の遺物が豊富に出土し，古代～中世においては掘立柱建物跡や竪穴建物跡・落とし穴等が確認された。都原遺跡は縄文時代早期から近世にかけての遺構・遺物が発見され，縄文時代早期の遺物は山形押型文や変形撚糸文土器等が出土した。特に古代の骨蔵器と思われる須恵器の壺が埋納された状態で検出された。



第１図　霜月田・都原遺跡位置図

例　　言

1　本書は，南九州西回り自動車道川内道路（市来ＩＣ～薩摩川内都ＩＣ間）建設に伴う霜月田遺跡及び都原遺跡の発掘調査報告書である。

2　本遺跡は，鹿児島県薩摩川内市都町（旧川内市都町）に所在する。

3　発掘調査及び報告書作成（整理作業）は，建設省九州地方局鹿児島国道工事事務所（現国土交通省九州地方整備局鹿児島国道事務所）から鹿児島県教育委員会が受託し，鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施した。

4　霜月田遺跡の発掘調査は，平成11年10月４日から10月８日まで，平成12年10月３日から12月26日まで，平成15年６月16日から平成16年２月26日までに実施した。都原遺跡の発掘調査は，平成12年12月４日から12月７日までと平成14年８月21日から12月13日までに実施した。

5　遺物番号，挿図番号，表番号は各遺跡ごとに通し番号とし，写真図版の番号は一致する。

6　挿図の縮尺は，各図面に示した。

7　本書で用いたレベル数値は，建設省九州地方建設局鹿児島国道工事事務所が提示した工事計画図面に基づく海抜絶対高である。

8　発掘調査における図面の作成及び写真撮影は，調査担当者が行った。空中写真は，有限会社スカイサーベイ九州に委託した。

9　遺構実測図の浄書及び出土遺物の実測・浄書は整理作業員の協力を得て整理作業担当者が行った。本報告書に使用した写真図版のうち，遺物の写真撮影は，吉岡康弘が行った。

10　周辺地形図・トレンチ配置図等のデジタルトレースは整理作業担当者が行った。

11　石器類の実測・トレースは，株式会社九州文化財研究所に委託した。

12　遺構内から出土した炭化物，貝殻の放射性炭素年代測定及び炭化物の樹種測定は株式会社加速器分析研究所に委託した。

13　本書の執筆・編集は，霜月田遺跡を岩屋高広と松元佑輔，都原遺跡を木之下悦朗，鶴田静彦が担当した。

14　遺物は，鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し，展示・活用する予定である。なお，霜月田遺跡の遺物注記の略号はシモツキ，都原遺跡はミヤコである。

目　　次

序文
報告書抄録
例言
目次
第Ⅰ章　はじめに …… 1
第Ⅱ章　遺跡と位置と環境 …… 5
第Ⅲ章　霜月田遺跡の発掘調査成果 …… 11
　第１節　調査の成果 …… 11
　　1　調査の経過 …… 11
　　2　調査の組織 …… 11
　　3　調査の方法及び概要 …… 13
　　4　調査の経緯（日誌抄） …… 14
　第２節　遺跡の層位 …… 19
　第３節　旧石器時代の調査 …… 23
　　1　第Ⅰ文化層の調査 …… 23
　　2　第Ⅱ文化層の調査 …… 27
　第４節　縄文時代の調査 …… 30
　　1　早期の調査 …… 30
　　2　中期・後期の調査 …… 50
　　3　晩期の調査 …… 53
　第５節　古代～中世の調査 …… 73
　第６節　近世の調査 …… 99
　第７節　近・現代の調査 …… 104
　第８節　調査のまとめ …… 105
　　放射性炭素年代測定結果報告書（ＡＭＳ測定） …… 109
第Ⅳ章　都原遺跡の発掘調査成果 …… 117
　第１節　調査の成果 …… 117
　　1　調査の経過 …… 117
　　2　調査の組織 …… 117
　　3　調査の経緯（日誌抄） …… 119
　　4　発掘調査の概要 …… 121
　第２節　縄文時代の調査 …… 126
　第３節　古代・中世の調査 …… 145
　第４節　中世～近世の調査 …… 147
　第５節　都原遺跡のまとめ …… 152
　　放射性炭素年代測定結果報告書（ＡＭＳ測定） …… 154
あとがき

挿　図　目　次

第１図　霜月田・都原遺跡位置図（１／25000）
第２図　南九州自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査位置図 …… 4
第３図　遺跡の位置及び周辺遺跡 …… 9

（霜月田遺跡）
第４図　グリッド配置及び確認トレンチ位置図 …… 17
第５図　平成12年度調査位置図 …… 18
第６図　平成15年度調査位置図 …… 18
第７図　柱状模式図 …… 19
第８図　土層断面図(1) …… 20
第９図　土層断面図(2) …… 21
第10図　土層断面図(3) …… 22
第11図　第Ⅰ文化層石器群の石材の割合 …… 23
第12図　第Ⅰ文化層のブロック主要石器出土分布 …… 24
第13図　第Ⅰ文化層の出土石器(1) …… 25
第14図　第Ⅰ文化層の出土石器(2) …… 26
第15図　第Ⅱ文化層石器群の石材の割合 …… 27
第16図　第Ⅱ文化層の礫群 …… 27
第17図　第Ⅱ文化層の遺構位置図及びブロック主要石器出土分布 …… 28
第18図　第Ⅱ文化層の出土石器 …… 29
第19図　縄文時代早期の遺構配置図及び土器出土分布 …… 31
第20図　縄文時代早期の１号集石遺構 …… 32
第21図　縄文時代早期の２号集石遺構 …… 33
第22図　縄文時代早期の３号集石遺構 …… 33
第23図　縄文時代早期のⅠ類土器出土分布 …… 34
第24図　縄文時代早期のⅠ類土器 …… 35
第25図　縄文時代早期のⅡ類土器 …… 36
第26図　縄文時代早期のⅢ類土器出土分布 …… 37
第27図　縄文時代早期のⅣ類土器出土分布 …… 37
第28図　縄文時代早期のⅢ・Ⅳ類土器 …… 38
第29図　縄文時代早期のⅤ・Ⅵ・Ⅶ類土器 …… 39
第30図　縄文時代早期の石器出土分布 …… 42
第31図　縄文時代早期の出土石器(1) …… 43
第32図　縄文時代早期の出土石器(2) …… 44
第33図　縄文時代早期の出土石器(3) …… 45
第34図　縄文時代早期の出土石器(4) …… 46
第35図　縄文時代早期の出土石器(5) …… 47
第36図　縄文時代早期の出土石器(6) …… 48
第37図　縄文時代中期・後期の遺構配置及び出土遺物分布 …… 50
第38図　縄文時代中期の集石遺構 …… 51
第39図　縄文時代中期の遺構内遺物Ⅷ類土器 …… 52
第40図　縄文時代後期のⅨ類土器 …… 52
第41図　縄文時代晩期の遺構配置図及び土器出土分布 …… 54
第42図　縄文時代晩期の１号集石遺構 …… 55
第43図　縄文時代晩期の２号集石遺構 …… 56
第44図　縄文時代晩期の土器(1) …… 57
第45図　縄文時代晩期の土器(2) …… 58
第46図　縄文時代晩期の土器(3) …… 59
第47図　縄文時代晩期の石器出土分布 …… 61
第48図　縄文時代晩期の出土石器(1) …… 62
第49図　縄文時代晩期の出土石器(2) …… 63
第50図　縄文時代晩期の出土石器(3) …… 64
第51図　縄文時代晩期の出土石器(4) …… 65
第52図　縄文時代晩期の出土石器(5) …… 66
第53図　縄文時代晩期の出土石器(6) …… 67
第54図　縄文時代晩期の出土石器(7) …… 68
第55図　縄文時代晩期の出土石器(8) …… 69
第56図　縄文時代晩期の出土石器(9) …… 70
第57図　縄文時代晩期の出土石器(10) …… 71
第58図　古代～中世の遺構配置図 …… 74

第59図　１号掘立柱建物跡 …… 75
第60図　２号掘立柱建物跡 …… 76
第61図　３号掘立柱建物跡 …… 77
第62図　４号掘立柱建物跡 …… 78
第63図　５号掘立柱建物跡 …… 79
第64図　１号竪穴建物跡 …… 80
第65図　２号竪穴建物跡 …… 81
第66図　３号竪穴建物跡出土遺物 …… 82
第67図　３号竪穴建物跡 …… 83
第68図　４号竪穴建物跡 …… 84
第69図　１号落とし穴 …… 85
第70図　２号落とし穴 …… 86
第71図　３号落とし穴 …… 86
第72図　１号土坑 …… 87
第73図　２号土坑 …… 88
第74図　３号土坑 …… 89
第75図　３号土坑内遺物 …… 90
第76図　焼土域 …… 90
第77図　古代～中世の出土遺物(1) …… 91
第78図　古代～中世の出土遺物(2) …… 93
第79図　古代～中世の出土遺物(3) …… 94
第80図　中世の磁器出土分布 …… 95
第81図　古代～中世の出土遺物(4) …… 96
第82図　古代～中世の出土遺物(5) …… 98
第83図　近世の遺構配置図 …… 100
第84図　礎石と古銭を伴うピット …… 101
第85図　近世の溝状遺構 …… 102
第86図　近世の出土遺物 …… 103
第87図　近現代の出土遺物 …… 104
第88図　縄文時代早期の土器出土点数の割合 …… 105
第89図　中国窯・港湾位置図 …… 108

（都原遺跡）

第１図　トレンチ配置図 …… 119
第２図　柱状模式図 …… 121
第３図　土層断面図(1) …… 122
第４図　土層断面図(2) …… 123
第５図　周辺地形及び発掘範囲 …… 124
第６図　全遺構配置図（縄文時代～近世） …… 125
第７図　縄文時代早期の遺構配置図 …… 126
第８図　縄文時代早期の集石，土坑検出及び土器出土状況 …… 127
第９図　縄文時代早期の土坑及び集石遺構 …… 128
第10図　縄文時代早期のⅡ－１類土器(1) …… 130
第11図　縄文時代早期のⅡ－１類土器(2) …… 131
第12図　縄文時代早期のⅡ－２類土器(1) …… 132
第13図　縄文時代早期のⅡ－２類土器(2) …… 133
第14図　縄文時代早期のⅡ－２，Ⅱ－３類土器 …… 134
第15図　縄文時代早期のⅢ・Ⅳ類土器 …… 135
第16図　縄文時代早期の出土石器(1) …… 138
第17図　縄文時代早期の出土石器(2) …… 139
第18図　縄文時代早期の出土石器(3) …… 140
第19図　縄文時代早期の出土石器(4) …… 141
第20図　縄文時代早期の出土石器(5) …… 142
第21図　縄文時代早期の出土石器(6) …… 143
第22図　埋納須恵器の出土状況 …… 145
第23図　埋納須恵器 …… 145
第24図　埋納須恵器出土位置図 …… 146
第25図　中世の遺構配置図 …… 147
第26図　中世の道跡 …… 148
第27図　中世の溝状遺構 …… 148
第28図　近世の土坑及び溝状遺構 …… 149
第29図　中・近世の出土遺物 …… 150
第30図　近世の出土遺物 …… 151

表　目　次

第１表　南九州自動車建設に伴う埋蔵文化財発掘調査遺跡一覧表……3
第２表　周辺遺跡地名表……8

（霜月田遺跡）

第３表　旧石器時代の石器観察表……30
第４表　縄文時代早期の土器観察表(1)……39
第５表　縄文時代早期の土器観察表(2)……40
第６表　縄文時代早期の石器観察表……49
第７表　縄文時代中期・後期の土器観察表……52
第８表　縄文時代晩期の土器観察表……59
第９表　縄文時代晩期の石器観察表(1)……71
第10表　縄文時代晩期の石器観察表(2)……72
第11表　１号掘立柱建物跡観察表……75
第12表　２号掘立柱建物跡観察表……76
第13表　３号掘立柱建物跡観察表……77
第14表　４号掘立柱建物跡観察表……78
第15表　５号掘立柱建物跡観察表……79
第16表　３号竪穴建物跡出土遺物観察表……82
第17表　１号土坑出土遺物観察表……87
第18表　３号土坑出土遺物観察表……89
第19表　その他の遺構内遺物観察表……91
第20表　古代～中世の出土遺物観察表(1)（土師器・須恵器）……97
第21表　古代～中世の出土遺物観察表(2)（陶磁器）……97
第22表　古代～中世の出土遺物観察表(3)（金属製品）……98
第23表　近世の出土遺物観察表（陶磁器）……104
第24表　近・現代の出土遺物観察表……104
第25表　県内竪穴建物跡検出遺跡一覧表……107

（都原遺跡）

第１表　縄文時代早期の土坑観察表……129
第２表　縄文時代早期の土器観察表……136
第３表　縄文時代早期の石器観察表……144
第４表　古代以降の土器・須恵器・陶磁器観察表……151

図　版　目　次

（霜月田遺跡）

図版１　遺構検出状況空中写真……161
図版２　土層断面図，旧石器時代のブロック検出状況，礫群検出状況……162
図版３　縄文時代早期の集石遺構，遺物出土状況
縄文時代中期の集石遺構検出状況……163
図版４　縄文時代晩期の集石遺構検出状況……164
図版５　古代～中世の落とし穴完掘状況……165
図版６　古代～中世の竪穴建物跡検出・完掘状況……166
図版７　古代～中世の掘立柱建物跡完掘状況……167
図版８　近世の溝状遺構検出・完掘状況……168
図版９　旧石器時代の石器……169
図版10　縄文時代早期の土器(1)……170
図版11　縄文時代早期の土器(2)……171
図版12　縄文時代早期の石器(1)……172
図版13　縄文時代早期の石器(2)……173
図版14　縄文時代中期・後期の土器，縄文時代晩期の土器(1)……174
図版15　縄文時代晩期の土器(2)……175
図版16　縄文時代晩期の石器(1)……176
図版17　縄文時代晩期の石器(2)……177
図版18　古代～中世の遺構内遺物　（土師器・須恵器）……178
図版19　古代～中世の出土遺物(1)(2)，古代～中世の金属製品……179
図版20　古代～中世の出土遺物(3)，中世の出土遺物（土師器皿等集合）……180

（都原遺跡）

図版21　都原遺跡の遠景，縄文時代早期の集石……181
図版22　縄文時代早期の２号土坑，土器出土状況……182
図版23　古代の骨蔵器出土状況……183
図版24　中世の道跡，中世の溝状遺構……184
図版25　近世溝状遺構検出状況，完掘状況……185
図版26　近世の土坑，都原遺跡から霜月田遺跡を臨む……186
図版27　縄文時代早期の土器(1)……187
図版28　縄文時代早期の土器(2)……188
図版29　縄文時代早期の石器……189
図版30　古代出土の須恵器（骨蔵器），中世・近世の出土土器・陶磁器……190

第Ⅰ章　はじめに

第１節　調査に至るまでの経過

建設省九州地方建設局（中央省庁再編により平成13年１月より国土交通省九州地方整備局に改称）は，市来～隈之城間に南九州西回り自動車道川内道路の建設を計画し，事業区内の埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育庁文化財課に照会した。この計画に伴い，文化財課が平成８年８月に市来ＩＣと隈之城ＩＣ間の埋蔵文化財の分布調査を実施したところ，当事業区内には，８か所の遺物散布地及び確認調査の必要な地点が所在することが判明した。

事業区間内の埋蔵文化財の取り扱いについては，建設省鹿児島国道工事事務所と文化財課の協議に基づき，鹿児島国道工事事務所と鹿児島県知事との間で委託契約が結ばれ，埋蔵文化財の確認調査・本調査が実施されることになった。

これを受けて，平成10年度から平成15年度にかけて，毎年度，計画的かつ継続的に各遺跡の確認調査及び本調査を実施し，埋蔵文化財の記録保存を図ることになった。発掘調査は鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施した。

なお，事業区間内の遺跡の概要については，以下のとおりである。

第２節　遺跡の概要

１　**市堀**……いちき串木野市港町に所在し，標高約40ｍのシラス台地上に立地する。調査面積は3,040㎡である。縄文～中世，各時代の遺物が出土したが少量であった。縄文時代早期では，集石１基・落とし穴と想定される土坑１基が検出された。遺物は，前平式・貝殻条痕文土器と磨石等が出土した。晩期では入佐式・黒川式土器が，弥生時代中期では黒髪式土器が，古墳時代では成川式土器が出土した。古代～中世にかけてのピットが多数有ったほか，溝状遺構１，焼土域２か所，土坑10基が土師器・須恵器・陶磁器と一緒に検出された。また，古墳時代～古代で双孔棒状土錘・管状土錘が出土した。

２　**安茶ヶ原**…いちき串木野市川上に所在し，標高約25ｍのシラス台地上に立地する。調査面積は16,000㎡である。縄文時代早期・後期の前平式・石坂式・押型文・深浦式・市来式土器が出土したほか，晩期の層位から佐賀県腰岳産の黒曜石10点が集中して見つかり，交流または交易によってもたらせられたものと考えられる。そのほか，古墳時代の成川式土器も出土したが，注目されるのは古代～中世にかけての遺構・遺物である。『日置厨』と墨書された須恵器の坏が土坑内に遺棄された状態で出土したほか，矩形に掘り込まれた溝と，２棟の四面庇建物跡がほぼ南北に並んで検出されたほか，その東側では，北側に庇が取り付く片庇建物跡も見つかり，２間×３間を主とする掘立柱建物跡５棟も確認され，須恵器・土師器・陶磁器・染付等多くの遺物も出土していることから本遺跡は，古代末から中世初期の在地領主層の居宅跡と推定される。

３　**菖蒲掛**……いちき串木野市上名に所在し，標高約70～75ｍの台地上に位置する。平成11年２月に地形等を考慮して２ｍ×３ｍのトレンチを４か所，２ｍ×４ｍのトレンチを設定し

て確認調査を実施した。その結果，表層下位はシラスであり，遺物包含層は残存せず，遺構も検出されなかった。

4　**栫城跡**……いちき串木野市上名に所在し，五反田川中流域沿いの標高約10mの低地部から標高約50mのシラス台地上にかけて立地する。遺跡から東へ約800mのところに坂下城跡が，西へ約500mのところに串木野城跡がある。調査面積は約50,700㎡である。遺跡は台地部・微高地部・低地部の大きく３つで構成される。台地部からは二面庇付掘立柱建物跡２棟のほか，溝状遺構・方形竪穴建物跡・竈・中世墓等が検出された。微高地部からは，石切場跡が検出された。これは鹿児島県で初の調査事例となった。低地部からは近世墓167基・良福寺住職の墓石が検出された。また中世ではカムィヤキ・東播磨系須恵器・樺万丈・青磁・白磁など中世の外来系土器が多数出土したほか，古代では墨書・刻書土器も出土した。これらのことから，遺跡は大きく城関連の遺構・石切場・寺院関連の遺構で構成され，古代以降において重要な場所であったことが推定される。

5　**今熊**……いちき串木野市上名に所在し，標高約24～26mの西傾斜面に立地する。平成11年10月に地形等を考慮して２ｍ×3mのトレンチを５か所設定して確認調査を実施した。その結果，表層下位はすぐに岩盤またはその風化した礫及び粘質化した土壌となっており，遺構・遺物は発見されなかった。

6　**霜月田**……薩摩川内市都町に所在し，標高約49ｍのシラス台地上に立地する。調査面積は11,000㎡である。旧石器時代，縄文時代，古代～中世，近世の遺構・遺物が発見された。旧石器時代ではブロックが検出され，細石刃・剥片等が出土した。縄文時代では計６基の集石が検出され，中原式・押型文・塞ノ神式等の土器や石鏃・石斧・石皿・磨石等が出土した。古代～中世が本遺跡の主となるところで，掘立柱建物跡５棟・竪穴建物跡４基・落とし穴３基・土坑３基・焼土域１か所が検出され，遺物も土師器・須恵器・陶磁器等が出土した。近世では溝跡や道跡とともに陶磁器が見つかった。

7　**都原**……薩摩川内市都町に所在し，標高約50ｍのシラス台地上に立地する。調査面積は4,000㎡である。主に縄文時代早期や古代～中世の遺構・遺物が発見された。縄文時代早期では集石１基，土坑３基が検出され，石坂式・手向山式・塞ノ神式土器や石鏃・石斧・磨石・石皿が出土した。古代では骨蔵器と考えられる９世紀の須恵器壺が埋納の状態で検出された。口径10㎝・器高20㎝を測る。中世では方形竪穴状遺構・溝状遺構が検出された。方形遺構は内部に炭化材と焼土域が見られた。溝には土師器・青磁・白磁片が出土した。これらは成枝氏居城の都城跡との関連も考えられる。

8　**玉前**……薩摩川内市都町に所在し，標高約18mの河岸段丘上に立地する。平成18年10月に工事区域センター杭を基準にして，５か所のトレンチを設定し確認調査を実施した。その結果，表土中にローリングを受けた土師器の小片が見られたが，表層下位はシラス及びシラスの二次堆積であり，遺構・遺物ともに発見されなかった。

第１表　南九州自動車建設に伴う埋蔵文化財発掘調査遺跡一覧表　（市来ＩＣ～隈之城ＩＣ）

番号	遺跡名	所在地	調査面積(㎡)	調査期間	調　査　員	時代	概　　要
1	市　　堀	市来町湊町	3,040	確 認 H13.12 全 面 H14.5～7	繁昌・宮田 石丸・相美	縄文 古墳 古代～中世	条痕文・黒色研磨土器 成川式土器 土師器・須恵器（甕）・青磁・染付 （県埋文センター117　2007刊行）
2	安茶ヶ原	市来町川上町	19,500	確 認 H11.1 全 面 H11.1～3 H11.5～10 H12.5～8 H13.5～H14.1	繁昌・栗林 繁昌・栗林 繁昌・野邉 繁昌・元田 繁昌・石丸	縄文 古墳 古代 中世	前平式・石坂式・押型文・深浦式・市来式 成川式土器 掘立柱建物跡・貝殻土坑，墨書土器・須恵器 竪穴遺構・溝状遺構，陶磁器・染付・瓦器 （県埋文センター118　2007刊行）
3	栫　城　跡	串木野市上名	50,700	確 認 H11.10 全 面 H12.11～H13.1 H13.5～H14.3 H14.5～H15.3 H15.7～H16.3	前迫・森田 繁昌・森田 平木場・三垣・石丸・西・松本 森田・抜水・吉岡・星野・平・相美 森田・星野・平	旧石器 縄文 古墳 古代 中世 近世	三稜尖頭器・剥片 落とし穴，石坂式・押型文・轟式・黒川式土器 成川式土器 須恵器・土師器・黒色土器・墨書土器・砥石 石切遺構・鍛冶炉跡・掘立柱建物跡・五輪塔礎石・墓坑，青磁・白磁・染付・瓦質土器・滑石製品・羽口・鉄滓・鑿・楔 石切遺構・石垣・一字一石経塚・墓坑，陶磁器・古銭・楔
4	霜　月　田	薩摩川内市都町	11,000	確 認 H12.6 全 面 H12.6～8 H15.6～H16.2	宮田・三垣 宮田・三垣 寺原・國師・石原田	旧石器 縄文 中世	礫群，ナイフ形石器･台形石器･細石刃･スクレイパー 集石，貝殻条痕文・押型文・撚糸文・粗製土器・石皿・石鏃・石斧・礫器・磨石・敲石・石皿 掘立柱建物跡・竪穴建物跡・落とし穴，土坑・焼土域，土師器・須恵器・陶磁器・鉄製品 本報告書
5	都　　原	薩摩川内市都町	4,000	確 認 H12.5 全 面 H12.5～6 H14.8～12	宮田・三垣 宮田・三垣 星野・菅牟田	縄文 古代～中世 近世	集石・土坑，石坂式・手向山式・貝殻条痕文・塞ノ神式・石鏃・磨石・石皿・石斧 埋納遺構（骨蔵器）・道，溝状遺構，土師器（皿）・陶器（擂鉢）・陶磁器 溝状遺構，陶器（肥前焼・薩摩焼） 本報告書

第２図　南九州自動車建設に伴う埋蔵文化財発掘調査位置図

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

第１節　遺跡の位置と地理的環境

霜月田遺跡及び都原遺跡は，薩摩川内市都町に所在する。日笠山・冠岳・火立ヶ丘・平原山等の山々に囲まれ，川内平野の南，標高約50mのシラス台地上に位置する。眼下には，川内川の支流，木場谷川が流れ，国道３号線隈之城バイパスが通っている。都町一帯を含む木場谷川流域（都以外に青山・中福良・尾白江などを含む）は，肥沃で，水害に対しても強く，格好の稲作地帯と言える。また，北東側には北薩の最高峰・紫尾山を望むことができる。また，都町の東方１kmに位置する田重岳は，隈之城平野のランドマークになっており，条里施行の際に基点となったとの指摘（藤井1965）もある。

薩摩川内市都町について，『角川日本地名大辞典』には以下の様に記述される。「市の南東部。市街地の南に位置し，東は尾白江町，南は木場茶屋町，西は青山町に接する。中央を都川が北流し，都川沿いは水田が開け，西部は高江山地に続く台地で畑が多い農業地域。神社には都八幡神社，日枝神社がある。地名は大和朝廷の直轄地として屯倉（ミヤケ）が置かれた所と伝えられる字都による。」（竹内理三編1983）

遺跡が所在する薩摩川内市（旧川内市）は薩摩半島の北西部に位置し，緯度は北緯31度46分，経度は東経130度18分である。人口は102,242人，面積は68,350㎢である（平成19年４月１日現在）。北及び北東は紫尾山に続く出水山地で，薩摩川内市東郷町が阿久根市，出水市，さつま町と境をなし，東は寺山（上床山地）を中心に標高300ｍの山々が連なり，薩摩川内市樋脇町に至っている。南は修験場として古くから有名な冠岳を主峰とする標高500ｍの山々や，高江山地によっていちき串木野市と接している。東シナ海に面し，川内川を有する薩摩川内市は，古くから陸上・水上交通の要所であり，現在でも北薩地域の政治・経済の中心地となっている。

地形は，山岳地帯，台地，沖積平野，砂丘に大別される。山地の麓には，平野を取り巻くように権現原台地や国分寺台地など低いシラス台地が発達し，宅地や畑地として利用されている。シラス台地は山地から河川によって浸食を受けるため台地の間には狭小な谷底平野が発達すると共に，台地の縁辺部はシラス台地特有の浸食谷が複雑に発達し，急崖をなし，沖積平野へと移行する。これらの台地上では，薩摩国分寺跡や計志加里遺跡など多くの重要な遺跡が発見されている。

市の中心地は三方を山に囲まれた盆地状の地形をなし，これらの山々は川内川が注ぐ東シナ海側に向かって開けている。中心地の中央を流れる川内川は本県最大の河川で，熊本県白髪岳に源を発し，広範囲に沖積平野を形成している。また，川内川は，白和町付近で大きく西に流れを変え東シナ海に注いでいる。その両岸には天辰町から高江町にかけて長さ約８㎞にわたって自然堤防が形成される。中でも，自然堤防が最も発達した大小路町，向田町周辺は現在の市街地の中心部である。近年の調査では，自然堤防上で多くの遺構・遺物が発見され，古くから人々の活動の中心地であったことをうかがわせる。下流域に広がる平野は川内平野と呼ばれ，山地が多く平野の少ない南九州において大口盆地，出水平野，肝属平野と肩を並べる穀倉地帯である。川内川は，下流で大きく川幅を広げ，河口の両岸には川内砂丘が発達し，薩摩川内市の特徴的な地形となっている。

第２節　歴史的環境と周辺遺跡

霜月田遺跡は，薩摩川内市都町字霜月田に，都原遺跡は同字都原に所在する。都原遺跡は，田重岳より西方向に位置する平坦な台地上にあり，標高は約49mである。霜月田遺跡は都原遺跡の南西約150mに位置し，北北東約2kmには成岡遺跡が所在している。

遺跡の位置する都町の西側には，慶長の役で島津義弘の帰陣に際し，朝鮮半島から伴われて渡来した人々の墓（高麗墓）が所在する。そして，東側には成枝名の領主であった成枝氏が居城したと伝えられる都城跡がある。なお，成枝氏は延元年間（1336～1340年）に永利山田に移ったとされるので，その後の都城については明らかではない。また当地は，瓊瓊杵（ににぎ）尊の宮居（都八幡）という伝承と，薩摩国府の初めの所在地という説（藤井1965・1967）がある。

都という地名は，建久８(1197）年に作成された薩摩国建久図田帳には，薩摩郡の中に「都浦十町」とあり，さらに室町時代には宮古村や都町等と呼ばれていた。なお，地名研究者からは，この地域一帯の都原・玉前・御領田・京手・二月田・霜月田などという字名によって古代屯倉の中核都市であったという指摘もあるが，明らかではない。以下各時代の流れにそって概略を説明する。

旧石器時代

旧石器時代としては馬立遺跡が挙げられる。ここでは県内で初めてこの時代の尖頭器が発見され，注目を浴びた。また成岡遺跡，西ノ平遺跡，上野城跡，大原野遺跡，前畑遺跡で剥片尖頭器，三稜尖頭器，ナイフ形石器，細石刃，細石刃核などが発見されている。

縄文時代

前期には，大原野遺跡や前畑遺跡で，轟Ｂ式土器が出土している。西海岸の交流の活発さを示す遺物が発見されており，特に前畑遺跡では，中九州系の土器である中原式土器（早期）や，北陸地方に特徴的な新崎式土器（中期）が出土した。

また後期になると，楠元遺跡や麦之浦貝塚で土坑墓や，骨角器が発見されている。これらの遺跡では市来式土器のほかに，北久根山式や鐘崎式土器が多く出土している。

弥生時代

川内川の自然堤防上に位置する大島遺跡では，前期の土器や石庖丁が出土した。若宮遺跡でも石庖丁や石鎌が採集されており，すでに前期にはこの地域で水田稲作が行われていたことを示している。また，京田遺跡や，楠元遺跡で木製農具が発見されたことから，中期後半以降にも水稲稲作が行われていたことが明らかとなった。

古墳時代

弥生時代終末から古墳時代にかけては日吉，安養寺丘，赤沢津，日暮丘などの遺跡に土器の散布がみられる。これらの中には，赤沢津遺跡のように広大な低台地上にあるものもあって，この隈之城平野に生産の基盤を置いた人々の集落が周辺の台地上に形成されたであろうことをうかがわせる。また，古墳時代の墓については横岡遺跡が著名である。ここでは５世紀から７世紀の地下式板石積石室墓（石棺墓とする説もある）が７基発見されている。それから，前方後円墳の可能性がある端陵・中陵や，船間島古墳，安養寺古墳などの円墳が知られているが，正式な調査が行われていないために詳細は不明である。そのほかに御釣場遺跡では古墳時代初頭の石蓋土坑墓が検出され，若宮遺跡では石棺が検出されている。

川内平野に在地の墓制である地下式板石積石室墓や，中央の墓制である高塚古墳が存在しているということは，注目すべきであろう。地方における古墳文化の様相を考えるうえで，川内平野は重要な地域である。

奈良時代・平安時代

奈良時代には，御陵下町・国分寺町に薩摩国府が置かれた。さらに奈良時代末には薩摩国分寺が建立され，この地は薩摩国の政治・文化の中心地となった。昭和43～45年（1968～70年）には発掘調査が行われ，国府跡においては築地塀などの遺構が，国分寺跡において伽藍配置が，鶴峯窯跡において創建時の瓦を焼いた様子が明らかになっている。

古代には，高城郡と薩摩郡が川内川を境として分かれていたとされており，これらの主要な役所・寺が置かれていた川内川以北は高城郡であった。これに対して，霜月田遺跡，都原遺跡が所在する川内川以南は薩摩郡とされている。高城郡を見てみると，計志加里遺跡では，円形周溝墓や土坑墓，古道跡が発見されている。また，自然堤防上に立地する大島遺跡からは，高城郡の中心部を構成すると考えられる竪穴建物を中心とした集落跡が発見されている。京田遺跡では，条里制に関する内容を記した告知札と呼ばれる木簡が県内で初めて出土し，川内平野においても条里が平安時代から存在したことが明らかとなった。その他に，越ノ巣遺跡・屋形原遺跡からは骨蔵器が発見されている。

一方，川内川以南の薩摩郡を見てみると，西ノ平遺跡で整然と並ぶ掘立柱建物跡群，輸入陶磁器（越州窯系青磁，荊州窯系白磁），銙帯，鉄鉢などが発見されており，薩摩郡の郡衙であった可能性が指摘されている（池畑1986）。また，鍛冶屋馬場遺跡では鍛冶炉とともに多くの鉄製品が出土した。都原遺跡では，古代の骨蔵器が１点出土している。このように，近年になって川内平野全域で調査例が増加しており，大きな成果があがっている。

中世

前期には，島津氏，渋谷氏などの下向してきた鎌倉武士と，武光氏や薩摩氏などの在地領主との間で，領地支配の争いが絶えなかった。上野氏の居館である上野城跡の発掘調査では，多くの掘立柱建物跡と，竪穴建物跡，白磁・青磁などが発見されている。成岡遺跡や西ノ平遺跡からも，この時代の建物跡や遺物が見つかっている。なお，霜月田遺跡でも同様の遺構・遺物が発見されている。

後半（南北朝時代以降）になると，争いは激しさを増し，この地域には碇山城や，二福城（隈之城），高江城など多くの山城が築かれた。霜月田遺跡，都原遺跡からもこの時期の青磁（龍泉窯），青花（景徳鎮・漳州窯）などの輸入陶磁器が出土している。

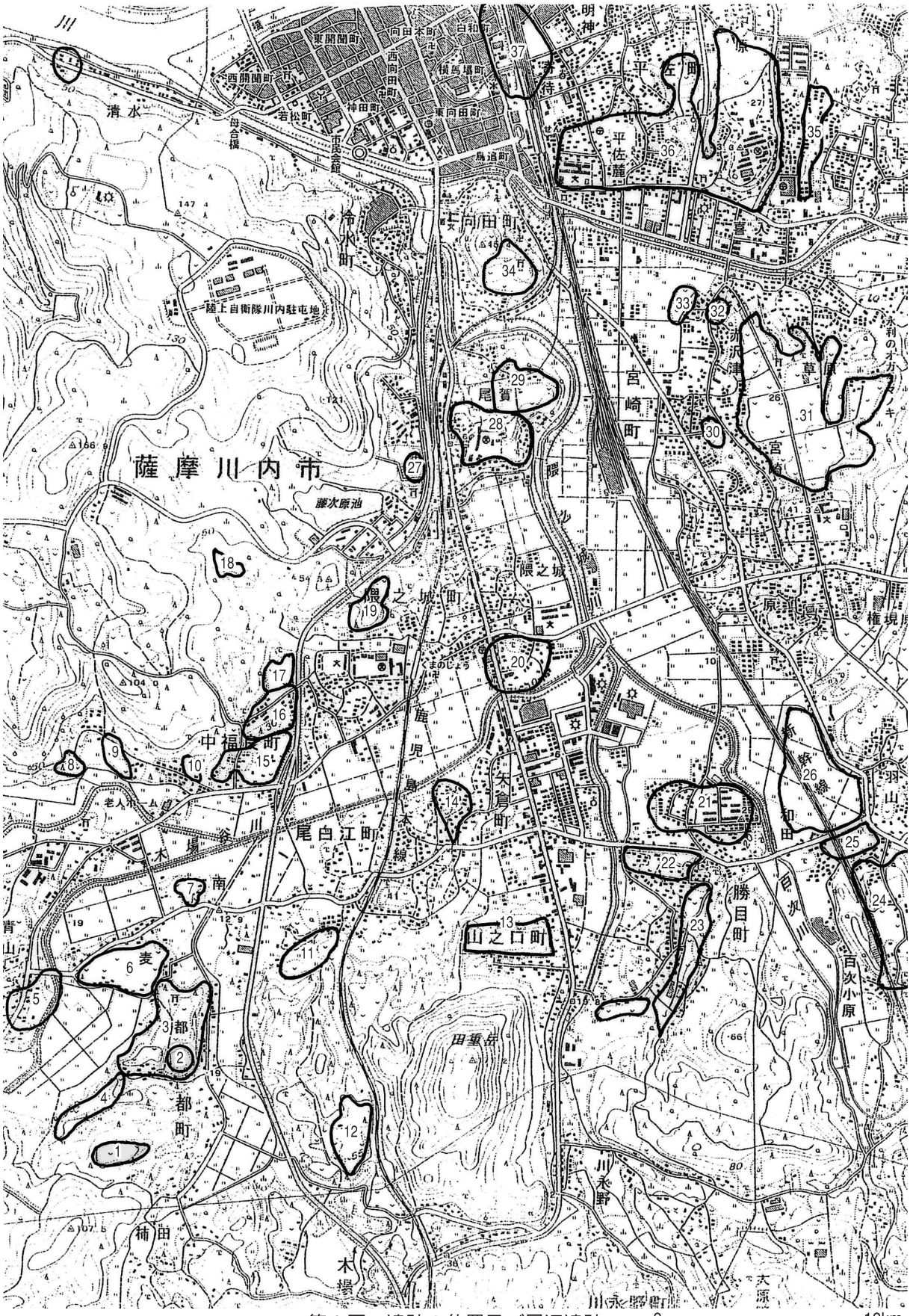
近世以降

藩政時代には商業が発達し，中心地の向田町は水陸交通の要衝として賑わった。川内川河口の久見﨑には，船手奉行所が置かれ，藩の造船所があった。当地は朝鮮の役の際，薩軍が船出した港として有名である。この役で夫を亡くした婦人によって始められたと伝えられる盆踊り「想夫恋」は，県の無形民俗文化財に指定されている。

天明年間（1781～88年）には伊地知団右衛門李甫が天辰町に磁器窯を開いている。平佐焼と呼ばれるこの磁器は，県内各地に流通し，隆盛を誇った。近年の調査で，作業小屋や石垣，窯の形態が

第２表　周辺遺跡地名表

番号	ふりがな 名　称	所在地	地　形 時　代	遺構・遺物	備　考
1	しもつきでん 霜月田	薩摩川内市都町霜月田	台地 旧石器～近世	竪穴建物跡・掘立柱建物跡 土器･土師器・陶磁器	平成12･15年度調査
2	みやこばる 都原	薩摩川内市都町都原	台地 縄文（早）～近世	骨蔵器埋納遺構・溝状遺構 土器・須恵器・陶磁器	平成12･14年度調査
3	みやこじょう 都城	薩摩川内市都町都原	丘陵 不詳	堀切跡	
4	やまぐち 山口	薩摩川内市都町山口	台地 古墳～中世		
5	やまにた 山仁田	薩摩川内市青山町山口仁田	台地 古墳～中世		
6	しとくじょうあと 総徳城跡	薩摩川内市都町麦･灰原･門前屋敷田	丘稜 不詳	堀切跡	別称「南城」「麦城」
7	むぎ 麦	薩摩川内市都町麦	低地 縄文～中世		
8	あつまり 集	薩摩川内市中福良町集	台地 縄文～中世	土器・陶器・黒曜石	
9	たていし 立石Ｂ	薩摩川内市中福良町立石	段丘 縄文～中世	土器・石鏃・黒曜石	
10	たていし 立石Ａ	薩摩川内市中福良町立石	段丘 縄文～中世	土器・土師器・青磁	
11	よんたんだ 四反田	薩摩川内市尾白江町四反田	低地 平安～近世	土師器・青磁・染付	
12	せとやま 瀬戸山	薩摩川内市木場茶屋町瀬戸山	台地 古墳～近世	土師器・須恵器・青磁	
13	やまぐちばる 山口原	薩摩川内市山之口町山口原	台地 古墳～近世	土器・青磁・染付	
14	やぐらじょう 矢倉城	薩摩川内市矢倉町矢倉城	平地 不詳	不詳	消滅
15	なりおか 成岡	薩摩川内市中福良町成岡	台地 旧石器～近世	須恵器･青磁・細石刃	県埋文報(28)
16	にしのひら 西ノ平	薩摩川内市中福良町西ノ平	台地 旧石器～近世	土師器・青磁・細石刃核	県埋文報(28)
17	うえのはら 上ノ原	薩摩川内市中福良町上ノ原	台地 旧石器～戦国	土器・須恵器・青磁・染付	県埋文報(28)
18	ゆのたに 湯之谷	薩摩川内市隈之城町湯之谷	山腹緩斜面 平安	土師器	
19	にしのくち 西ノ口	薩摩川内市隈之城町西ノ口	台地 古墳		
20	にふくじょう 二福城	薩摩川内市隈之城町城	丘陵 鎌倉～戦国	曲輪跡	別称「隈之城」
21	こじょう 小城	薩摩川内市勝目町小城ほか	低地 不詳		
22	かこいじょう 栫城	薩摩川内市勝目町小城･外園原	低地 不詳		
23	かつめばる 勝目原	薩摩川内市勝目町栫･集ほか	丘陵 古墳～近世	須恵器･青磁・染付	
24	うえのじょう 上野城	薩摩川内市百次町上野ほか	丘陵 旧石器～近世	掘立柱建物跡ほか 土器・青磁・白磁・鉄製品	別称「百次城」「岩田ヶ城」 県埋文報(68)
25	じょうした 城下	薩摩川内市百次町城下	丘陵 縄文～近世	土器・須恵器・陶器	県埋文報(57)
26	くすもと 楠元	薩摩川内市百次町	低地 縄文～近世	土器・木製品・石鏃	県埋文報(57)
27	いけじり 池尻	薩摩川内市隈之城町池尻	丘陵 古墳～近世	須恵器	
28	かこいじょう 栫城	薩摩川内市隈之城町尾賀	丘陵 不詳	堀切跡	
29	おがだ 尾賀台	薩摩川内市隈之城町尾賀･後原ほか	丘陵 縄文～中世	一部貝塚 土器・須恵器・染付・石鏃	
30	あかでんばる 赤殿原	薩摩川内市宮崎町赤殿原	低地 古墳～中世	土器・土師器	
31	みやざききたはら 宮崎北原	薩摩川内市永利町若宮東	台地 古墳～中世（室町）	土器・須恵器・陶器	
32	せとぐち 瀬戸口	薩摩川内市宮崎町瀬戸口	低地 縄文～平安	土器・土師器	
33	あかざわつ 赤沢津	薩摩川内市宮崎町赤沢津	低地 縄文（中）～古墳	並木式土器・須恵器・石斧	
34	ひぐらしおか 日暮丘	薩摩川内市向田町鉢本･諏訪平	台地 古墳～江戸	土器・須恵器・染付	
35	きいればる 喜入原	薩摩川内市平佐町喜入原	台地 縄文～近世	土器・須恵器・染付	
36	ひらさじょうあと 平佐城跡	薩摩川内市平佐町藤崎･庵ノ城･寄侍	丘陵 中世（鎌倉中）～安土桃山	空堀跡	
37	かじやばば・はるた 鍛冶屋馬場・春田	薩摩川内市平佐町	低地 縄文～奈良・平安	土師器・陶磁器・鉄滓	県埋文報(39)
38	きよみずきょうずか 清水経塚	薩摩川内市宮里町清水	山腹 平安		清水寺経壺　市指定



第３図　遺跡の位置及び周辺遺跡

明らかになっている。そのほかに，近世，近代の鍛冶遺跡として古原遺跡，鍛冶屋馬場遺跡がある。このように川内川は，平佐焼や鍛冶などの生産に関わる原料の搬入と製品の搬出に積極的に利用され，古来より商工業の発展に大きな役割を担ってきた。

霜月田遺跡，都原遺跡の南部に位置する木場茶屋町には，藩政時代に藩主が参勤交代などで東上する際の休憩所（茶屋）が置かれた。また，隈之城郷には郷士集落である麓が形成された。両遺跡付近に2007年３月には，南九州西回り自動車道の薩摩川内都インターが完成している。鹿児島市から20分の所要時間で到着することが可能となり，今後の薩摩川内市の発展が期待されている。最後に，ここで紹介できなかった遺跡や詳細については，各遺跡の発掘調査報告書を参考にされたい。

〈参考文献〉

郷土史・概説本など

川内郷土史編纂委員会編1976　『川内市史』上巻
川内市歴史資料館編　1985　『川内市文化財要覧』
川内市郷土史研究会編　1984　『千台』第12号
竹内　理三編　1983　『角川日本地名大辞典･46鹿児島県』角川書店
芳　即正・五味　克夫編1998　『日本歴史地名大系第47巻･鹿児島県の地名』平凡社
河口　貞徳　1988　『日本の古代遺跡･38鹿児島』保育社
藤井　重寿　1965　『薩摩の古府』薩摩字絵図研究会
〃　1967　『薩摩国衙領考六題』薩摩字絵図研究会
池畑　耕一　1986　「西ノ平遺跡と薩摩郡衙（上･下）」『隼人文化』16･18　隼人文化研究会
鹿児島県教育委員会　2005　『先史･古代の鹿児島（資料編）』
鹿児島県教育委員会　2006　『先史･古代の鹿児島（通史編）』

発掘調査報告書

鹿児島県教育委員会　1975　『薩摩国府･国分寺跡』
鹿児島県教育委員会　1983　『成岡遺跡･西ノ平･上ノ平遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（28）
鹿児島県教育委員会　1984　『外川江遺跡･横岡古墳』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（30）
鹿児島県教育委員会　1985　『成岡遺跡Ⅱ』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（35）
川内市教育委員会　1985　『国指定史跡　薩摩国分寺跡　環境整備事業報告書』
川内市土地開発公社　1987　『麦之浦貝塚』
川内市教育委員会　1991　『御釣場古墳（2号墳）』　川内市埋蔵文化財発掘調査報告書（1）
鹿児島県立埋蔵文化財センター2002『計志加里遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（38）
〃　2002『鍛冶屋馬場遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（39）
〃　2003『前畑遺跡』　鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（56）
〃　2004『上野城跡』　鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（68）
〃　2005『大島遺跡』　鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（80）
〃　2005『京田遺跡』　鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（81）

霜　月　田　遺　跡

第Ⅲ章　霜月田遺跡の発掘調査成果

第１節　調査の成果

１　調査の経過

建設省九州地方建設局（中央省庁再編により平成13年１月より国土交通省九州地方整備局鹿児島国道事務所に改称）鹿児島国道工事事務所（以下，鹿児島国道事務所）は，「南九州西回り自動車道川内道路建設事業」の計画に基づいて，市来ＩＣ～薩摩川内都ＩＣ間の建設工事を進めた。

工事区間内の埋蔵文化財の取り扱いについては，鹿児島県教育庁文化財課と鹿児島国道事務所との協議に基づき，鹿児島県知事と鹿児島国道事務所との間で発掘調査に係わる委託契約が結ばれた。これを受けて鹿児島県立埋蔵文化財センター（以下，埋文センター）が埋蔵文化財の確認調査と本調査を進めた。

平成８年８月に市来ＩＣ～薩摩川内都ＩＣ間の分布調査が実施され，事業予定地内に８か所の遺物散布地や確認調査の必要な地点が所在することが判明した。この結果に基づき，霜月田遺跡の確認調査は平成11年10月４日から10月８日まで実施した。

本調査は，年次的・計画的に実施することとし，平成12年度は調査区域のうち3,000㎡，平成15年度は8,000㎡を対象として，埋文センターが実施した。

平成12年度の調査は平成12年10月４日から12月26日まで，平成15年度の調査は平成15年６月16日から平成16年２月26日まで実施した。

２　調査の組織

起因事業主体　〈建設省　九州地方建設局　鹿児島国道工事事務所（平成12年12月まで）
国土交通省　九州地方整備局　鹿児島国道事務所（平成13年１月から）〉

〈確認調査・平成11年度〉

調査主体	鹿児島県教育委員会		
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所長	吉永和人
調査企画	鹿児島県立埋蔵文化財センター	次長兼総務課長	黒木友幸
	〃	主任文化財主事兼調査課長	戸崎勝洋
	〃	課長補佐兼第一調査係長	新東晃一
	〃	主任文化財主事兼第三調査係長	青崎和憲
調査担当	鹿児島県立埋蔵文化財センター	文化財主事	宮田洋一
	〃	文化財研究員	三垣恵一
調査事務	鹿児島県立埋蔵文化財センター	主査	今村孝一郎

〈発掘調査・平成12年度〉

調査主体	鹿児島県教育委員会		
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所長	井上明文
調査企画	鹿児島県立埋蔵文化財センター	次長兼総務課長	黒木友幸
	〃	主任文化財主事兼調査課長	新東晃一
	〃	調査課長補佐	立神次郎
	〃	主任文化財主事兼第三調査係長	牛ノ濵修
調査担当	鹿児島県立埋蔵文化財センター	文化財主事	宮田洋一
	〃	文化財研究員	三垣恵一
調査事務	鹿児島県立埋蔵文化財センター		
	〃	総務係長	有村貢
	〃	主査	今村孝一郎

〈発掘調査・平成15年度〉

調査主体	鹿児島県教育委員会		
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所長	木原俊孝
調査企画	鹿児島県立埋蔵文化財センター	次長兼総務課長	田中文雄
	〃	調査課長	新東晃一
	〃	調査課長補佐	立神次郎
	〃	主任文化財主事兼第三調査係長	牛ノ濵修
調査担当	鹿児島県立埋蔵文化財センター	文化財研究員	寺原徹
	〃	文化財主事	石原田高広（～10月）
	〃	〃	國師洋之（11月～）
調査事務	鹿児島県立埋蔵文化財センター	総務係長	平野浩二
	〃	主査	脇田清幸
労務管理担当	新和技術コンサルタント株式会社	埋蔵文化財部調査課係長	別府哲二

〈整理作業・報告書作成作業・平成19年度〉

調査主体	鹿児島県教育委員会		
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所長	宮原景信
調査企画	鹿児島県立埋蔵文化財センター	次長兼総務課長	平山章
	〃	次長	新東晃一

	〃	調査第二課長	立神次郎
	〃	文化財主事 兼第二調査係長	牛ノ濵　修
	〃	主任文化財主事	宮田栄二
整理担当者	〃	文化財主事	岩屋高広
	〃	文化財調査員	松元佑輔
調査事務	鹿児島県立埋蔵文化財センター	総務課係長	寄井田正秀
	〃	主査	蒲池俊一

報告書作成検討委員会　平成19年12月17日　宮原所長ほか　11名
報告書作成指導委員会　平成19年12月13日　新東次長ほか　3名
企画担当者　寺原　徹，黒川　忠広
指導者　大阪府堺市教育委員会　主査　森村健一

3　調査の方法及び概要

⑴　調査期間　平成12年10月4日（月）～12月26日（火）（実働59日）
　　平成15年6月16日（月）～平成16年2月26日（木）（実働153日）
⑵　作業員数　延べ4,599人
⑶　調査面積　11,000㎡
⑷　出土遺物量　パンケース35箱

調査は川内道路実施設計図（串木野IC～隈之城IC間）と用地買収図面をもとに，地番6685－4と6701－6の境界線を結ぶ線を基軸に，南北方向にA・B・C～，東西方向に1・2・3～とする10m間隔の調査用区割り（グリッド）を設定した。

発掘調査当初は，平成12年度調査時に未買収地であった区域についてトレンチを設定し，人力により確認調査を実施した。

平成12年度及び15年度には本調査を実施した。その結果，旧石器時代の礫群を検出し，黒曜石の剥片やチップ等の遺物が集中して出土したために，A～D調査区において下層確認を行った。

調査方法は，伐採等の環境整備を行い，表土を重機によって除去した後，表土直下で精査し遺構検出を行った。その後，各調査区とも基本的に遺構検出まで人力（ジョレン・ねじり鎌）による掘り下げを行った。検出した遺構については，移植ゴテなどを用いて丁寧に掘り下げた後，写真撮影や図面作成などの作業等を行った。さらに下層確認を行い，旧石器時代の遺物が出土した地点については周辺を拡張して調査を行った。

⑸　検出遺構の概要

A－14区ではⅥ，Ⅴ層より黒曜石の剥片やチップなどが集中して出土し，旧石器時代のブロックが検出された。また，古代から中世にかけて掘立柱建物跡5棟，竪穴建物跡4基，落とし穴3基などが検出された。C－12区から検出された落とし穴1基には，埋土中から十数個の貝殻が出土したために，貝殻は炭素14年代測定を行った。

このほか，旧石器時代の礫群1基，縄文時代早期の集石遺構3基，中期の集石遺構1基，縄文時

代晩期の集石遺構２基などが検出された。

⑹　出土遺物の概要

調査区域内を掘り下げたところ，旧石器時代は第Ⅰ文化層（ナイフ形石器文化期）の黒曜石製ナイフ形石器や台形石器，第Ⅱ文化層（細石刃文化期）の細石刃やチップ等が出土した。また，縄文時代早期の中原式土器・条痕文土器・押型文土器・塞ノ神式土器など，縄文時代中・後期や晩期と考えられる土器が出土した。石器は，縄文時代早期，晩期の打製石鏃，磨製石斧，磨石，石皿等が出土した。古代から中世は土師器や須恵器，中国の輸入磁器等が発見され，更に近世の陶磁器等も確認された。

４　調査の経緯（日誌抄）

調査の経過は調査日誌をもとに主な出来事を記したい。

⑴　確認調査〈平成11年10月４日～10月８日〉

10月４日　１～９のトレンチを設定し，表土剥ぎを行った。１～７トレンチは南尾根，８，９トレンチは北尾根のものである。１トレンチから３基のピットが検出され，出土状況の写真撮影を行う。２トレンチからピット，硬化面（古道），イモ穴が検出される。青﨑係長，繁昌文化財主事，野邊文化財主事来訪。

10月５日　前日に同じく作業を進め，各トレンチ掘り下げを行った。２トレンチを拡張し，遺構検出状況の写真撮影を行う。３トレンチから土師器片２点が出土，遺物出土状況の写真撮影を行う。遺構はなく再度掘り下げを行う。５トレンチからピットが２基（Ⅴ層）検出され，遺構の出土状況の写真撮影を行う。

10月６日　前日に同じく作業を進めた。新たに南尾根に10，11トレンチを設定し，各トレンチの位置図を作成した。４トレンチでⅢa層を掘り下げたところ，遺物（土師器片２点）が出土し，出土状況の写真撮影を行った。

10月７日　１～５トレンチの平板実測を行い，遺物の取り上げを行った。北尾根の８，９トレンチは遺構の有無，包含層の残存状況を確かめたが，いずれも確認されなかった。遺構が見つかり拡張された１～５トレンチからは，黒曜石の剥片，土師器片，内黒土師器，須恵器，青磁，鉄石英片等が検出された。ただし，縄文土器は発見されていない。

10月８日　雨天のため，作業中止。現場内の整備作業。

⑵　発掘調査〈平成12年10月３日～12月26日〉

10月　事務所を設置し，備品を搬入。重機による伐採や表土剥ぎ終了後，西側からⅢa層上面の精査を行う。Ｄ～Ｅ－８区とＥ－６区に焼土域を検出する。また溝状遺構を３条検出する。Ｅ～Ｆ－７～８区のトレンチの掘り下げを行ない，遺物を検出する。ピット，土坑，イモ穴，などの主な遺構の実測作業を行う。雨天には水洗い作業を行なう。牛ノ濵係長，彌榮係長，繁昌文化財主事，森田文化財主事が来訪。

11月　完掘した焼土域の実測作業を行い，遺物を検出する。Ｃ～Ｄ－７～８区で１号掘立柱建物跡を検出する。Ｄ～Ｅ－８区，Ｅ－６区の焼土域の実測作業を行う。またＦ－８区のⅤ層上

面からは石皿が出土し，実測作業を行う。

12月　１号竪穴建物跡の写真撮影及び，実測作業を行なう。また，遺物のとりあげを行う。新たに２号掘立柱建物跡と３号掘立柱建物跡を検出し，共にピットが確認された。主に埋土遺物の取り上げ，遺構の実測作業を行った。調査最終日はプレハブ周辺の環境整備と撤収作業を行う。川内市教育委員会の中島氏ほか２名が現地査察のため来訪。井ノ上所長，牛ノ濵係長，彌榮係長が来訪。

⑶　発掘調査＜平成15年６月16日～平成16年２月26日＞

６月　事務所を設置し，備品を搬入する。重機による伐採や表土剥ぎ終了後，調査区北側からトレンチを設定して掘り下げる。黒曜石・石鏃・土器片等が出土する。国土交通省甲斐監督官，上馬庭係長，瀧川氏ほか１名が視察のため来訪。

７月　重機による表土剥ぎを行い，終了した区域から順次掘り下げる。黒曜石の石鏃・青磁・白磁・土師器・薩摩焼・土器片等が出土する。硬化面と溝状遺構をそれぞれ数条検出する。うち１組がほぼ直角に交わり，そこで終了していることから，同時期の道跡である可能性が高い。出土遺物からみて昭和頃までは使用されていたと思われる。８日，木原所長来訪。霧島町教育委員会山下氏が調査に参加（２週間）。鹿児島県教育委員会倉元氏，川内市教育委員会中島氏，大島郡大和村立今里中学校松下教諭来訪。

８月　調査区東側の表土を剥ぎコンタ図を作成した（昭和まで使用されていた道がⅢ層にあったため，以前に１回造成を受けていると思われる）。トレンチの完掘状況写真撮影と土層断面図作成を行う。長島町教育委員会尾﨑氏が調査に参加（２週間）。台風10号が接近したため対策を講じる（進入路に土留めを敷設。プレハブまでの道路の補修）。国土交通省瀧川氏ほか３名，川内市立隈之城小学校大久保氏ほか２名来訪。鹿児島大学関氏がインターンシップ（職場体験）事業の一環として調査に参加する。新東調査課長，牛ノ濵係長，脇田総務課主査を交えて調査期間について協議を行う。

９月　表土より大三角岩盤を採出（安山岩　正三角形　一辺約50㎝）する。竪穴状遺構と溝状遺構２条を検出する。３号竪穴建物跡と４号竪穴建物跡を調査する。台風14・15号が接近したため対策を講じる。川内市立隈之城小学校教諭大久保氏ほか，考古学クラブ児童５名が来訪。鹿児島大学理学部３年蓑部氏がインターンシップ（職場体験）事業の一環として調査に参加する。牛ノ濵係長が調査指導を行う。

10月　引き続き３号竪穴建物跡と４号竪穴建物跡の調査を行う。７日に空撮（スカイサーベイ九州）を行う。５号掘立柱建物跡と６号掘立柱建物跡の写真撮影と実測を行う。Ａ～Ｄ－９～15区表土直下のピット群レベル測量とＥ－９・10区表土直下ピット群レベル測量を行う。黒曜石のチップが100点以上出土した集中区を検出したので調査を開始する。Ｂ－12区表土直下の土坑（貝殻入り）を実測する。土坑の床面長軸方向にピットが３個並んだため落とし穴の可能性が出てきた。貝殻文円筒土器同一個体７点一括出土する。出土状況の写真撮影を行う。国土交通省甲斐監督官，副長，総務課脇田主査，繁昌文化財主事，吉岡文化財主事来訪。

11月　Ｃ－17区で溝状遺構を検出し，実測を行う。埋土は黒緑色で中世と思われる。Ｂ～Ｄ－13～15区Ⅴ層上面の地形図を作成する。４号掘立柱建物跡を実測終了する。国土交通省用地課本坊氏，調査課上馬庭係長，瀧川氏来訪。

12月　４号掘立柱建物跡の焼土域を調査したが，焼土域の掘り込みは樹痕であった。上部の焼土は人工的なものと判断した。旧石器確認トレンチ掘り下げを行う。また，Ａ～Ｄ－14・15区のⅤ・Ⅵ層の下層確認を行う。Ｃ－17区の下層確認トレンチで土坑を検出する。検出面からの深さ約80cm，長径約170cm×短径約50cmの土坑のため落とし穴の可能性がある。本年の最終日に，遺跡周辺の道路の草刈りなど環境整備を行った。新東調査課長と脇田主査が視察。

１月　Ａ～Ｄ－11～12区のⅣ～Ⅵ層の下層確認を行う。一部のトレンチでⅥ層から遺物が出土する。Ｄ－11区で土坑（焼石，土師器甕，炭化物入り）を検出。実測と全掘を行う。Ａ～Ｄ－12区，Ａ－11区の地形図を作成する。また，Ａ－11～12区のⅥ層の下層確認を拡張したところ，旧石器の遺物が出土した。今月は降雪のため２日間発掘調査を中止した。牛ノ濵係長，奈良県香芝市二上山博物館主査（学芸員）佐藤良二氏が来訪。

２月　Ａ～Ｄ－９～11区のⅢa～Ⅵ層の下層確認を行う。Ｄ－９区で礎石入りのピットを検出する。調査したところ，古銭が出土した。Ｅ－９区から４基の集石を検出したため写真撮影と実測を行う。また，同じ区のⅣ層から磨石・石皿のセットが出土した。Ａ～Ｄ－12区の西壁土層断面図とＤ－11～12区の北壁土層断面図を作成する。Ａ－10区の落とし穴を調査中に逆茂木跡（５本）が検出した。全区の調査を行い完掘状況の写真撮影を行う。隈之城小学校大久保教諭と考古学クラブの児童４人が来訪。上野原縄文の森内村副園長と菅牟田氏が現場視察。木原所長，牛ノ濵係長，脇田主査が作業員へ調査終了あいさつのため来訪。

(4)　報告書作成作業

整理作業及び報告書作成作業を平成19年４月から平成20年３月にかけて，県立埋蔵文化財センターで行った。

４月　整理作業開始。実測図及び遺物の点検，確認。石器実測委託準備。土器の分類。土器の接合。地形図をデジタルトレースで作成する。実測用遺物選別。

５月　土器の拓本とり。ドット入力。遺物台帳によりデータをパソコンに入力する。図面整理。

６～７月　土器，土師器等の実測。剥片等の分類。接合分布作成。土器の復元。中世遺物の分類。土層断面図トレース。

８～９月　拓本貼り，石器計測。土器，遺構トレース。仮レイアウト。

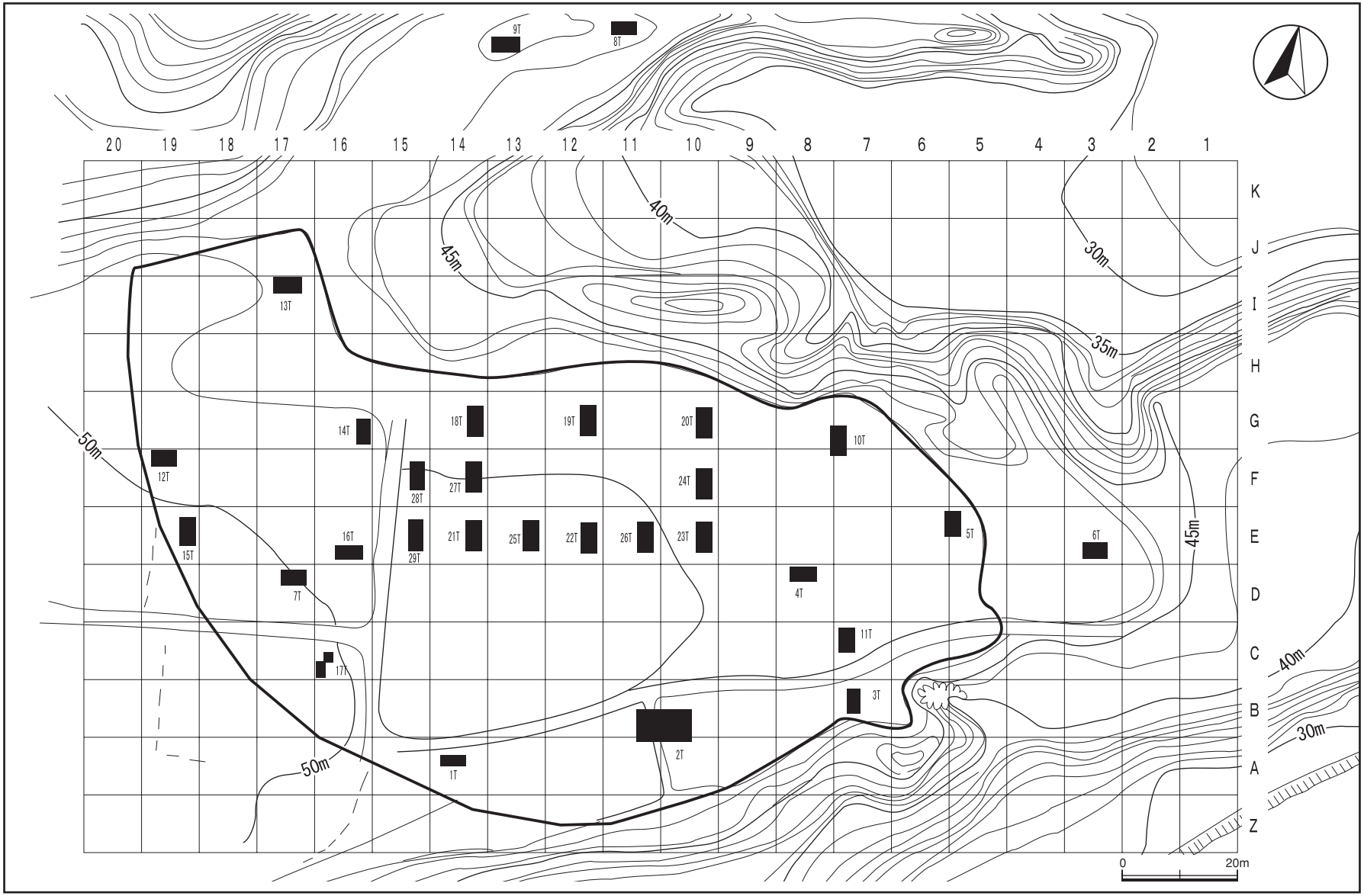
10～11月　遺構，土器，土師器等のトレース。文章作成。遺構・遺物のレイアウト。遺物写真撮影。

12月　遺構・遺物のレイアウト。文章作成及び修正。入札のための起案。

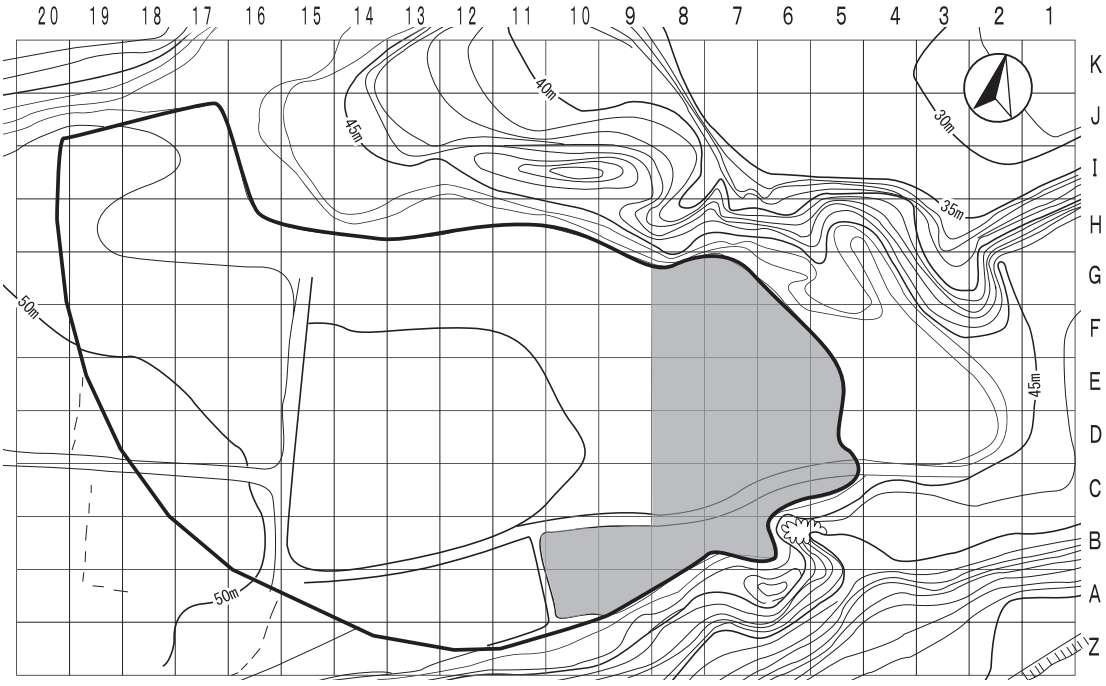
１月　文章確認，修正。入札。校正。一般遺物の収納。

２月　校正。現場図面及び遺物の実測図の整理，仮収納。

３月　校正。報告書掲載遺物の整理，仮収納。報告書納入。これにより，報告書作成業務の全てを終了する。

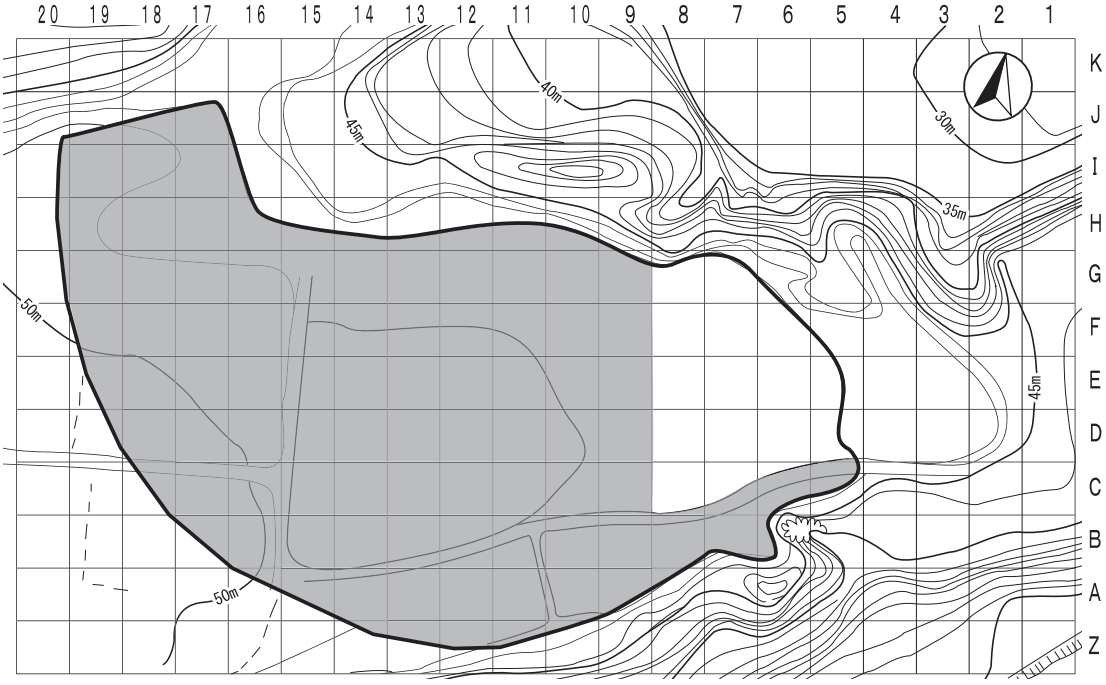


第４図　グリッド配置及び確認トレンチ位置図



第５図　平成12年度調査位置図

0　20m



第６図　平成15年度調査位置図

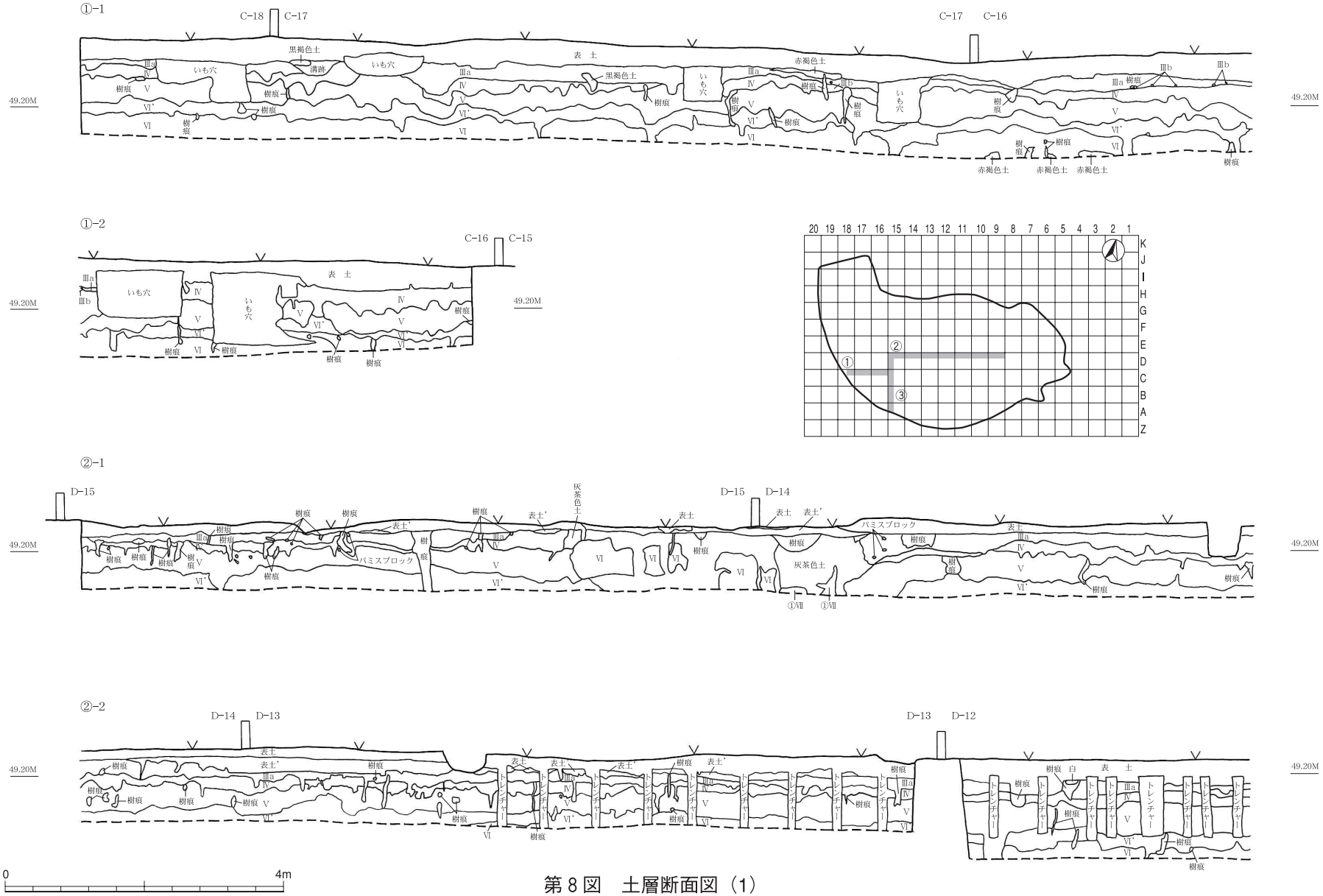
0　20m

第２節　遺跡の層位

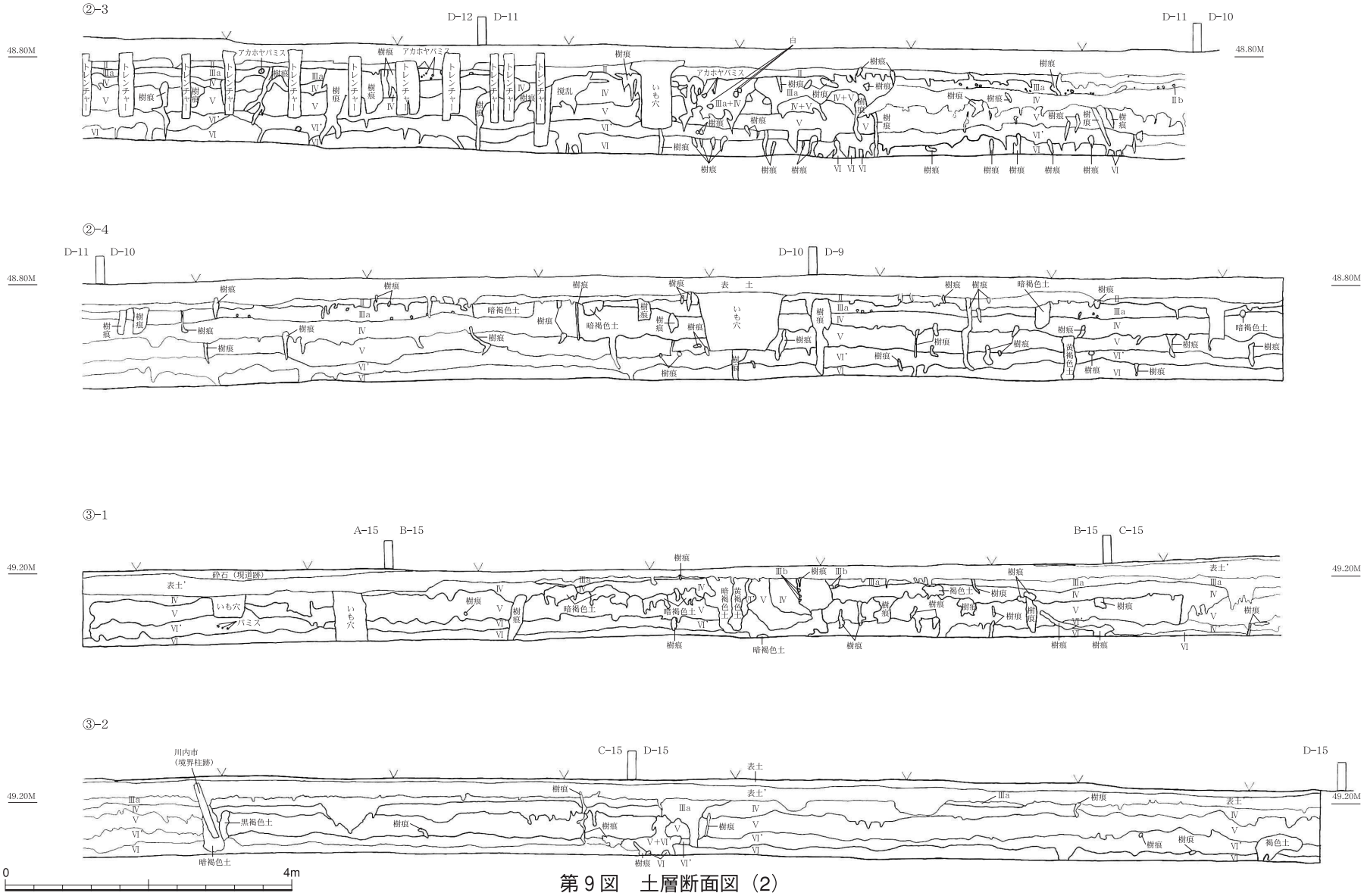
霜月田遺跡は，標高49mの平坦なシラス台地上に位置している。調査は北尾根と南尾根に区分された。北尾根は調査前からシラスが露出しており，確認調査の結果，遺物包含層は確認されなかった。平成12・15年度の本調査で，南尾根の調査を実施したところ，遺構や遺物包含層が確認された。地点によって若干の差異があるが，標準的なものをここで示す。第７図は標準的な地層の模式図である。以下，各層の説明を行う。

Ⅰ層 暗灰色土	やや砂質の表土である。層厚は約25㎝。
Ⅱ層 濃暗灰色土	腐植土である。古代から中世の遺物包含層である。層厚は約５㎝。
Ⅲa層 明黄褐色土	鬼界カルデラ起源のアカホヤ火山灰（約6400年前）である。縄文時代晩期の遺物包含層である。層厚は約20㎝。都原遺跡や成岡遺跡にも同等に堆積している。
Ⅲb層 黄橙色土	黄橙色パミスで，Ⅲa層下部にあるアカホヤの軽石層である。連続した堆積はなく，ブロック状になる所も多い。無遺物層である。
Ⅳ層 暗黄褐色土	暗黄褐色のふかふかした土層である。縄文時代早期の遺物包含層である。都原遺跡，成岡・西ノ平・上ノ原遺跡でも全体に見られ，遺跡を特徴づける文化層である。層厚は約25㎝。
Ⅴ層 暗褐色土	暗褐色土で，やや粘質である。旧石器時代第Ⅱ文化期の遺物包含層である。薩摩火山灰を微量に含んでおり，層厚は約25㎝である。薩摩火山灰はP－14と呼ばれ，約11,500年前の桜島の墳出によって形成された層である。
Ⅵ層 暗黄白色土	暗黄白色土である。やや粘質であり，硬くしまっている。旧石器時代第Ⅰ文化期の遺物包含層である。層厚は約15㎝。
Ⅶ層 黄白色土	シラスの黄白色土であり，やや砂質である。淡黄色のパミスを含んでいる。シラスは入戸火砕流の堆積物であり，約24000年の姶良カルデラの噴出によるものである。

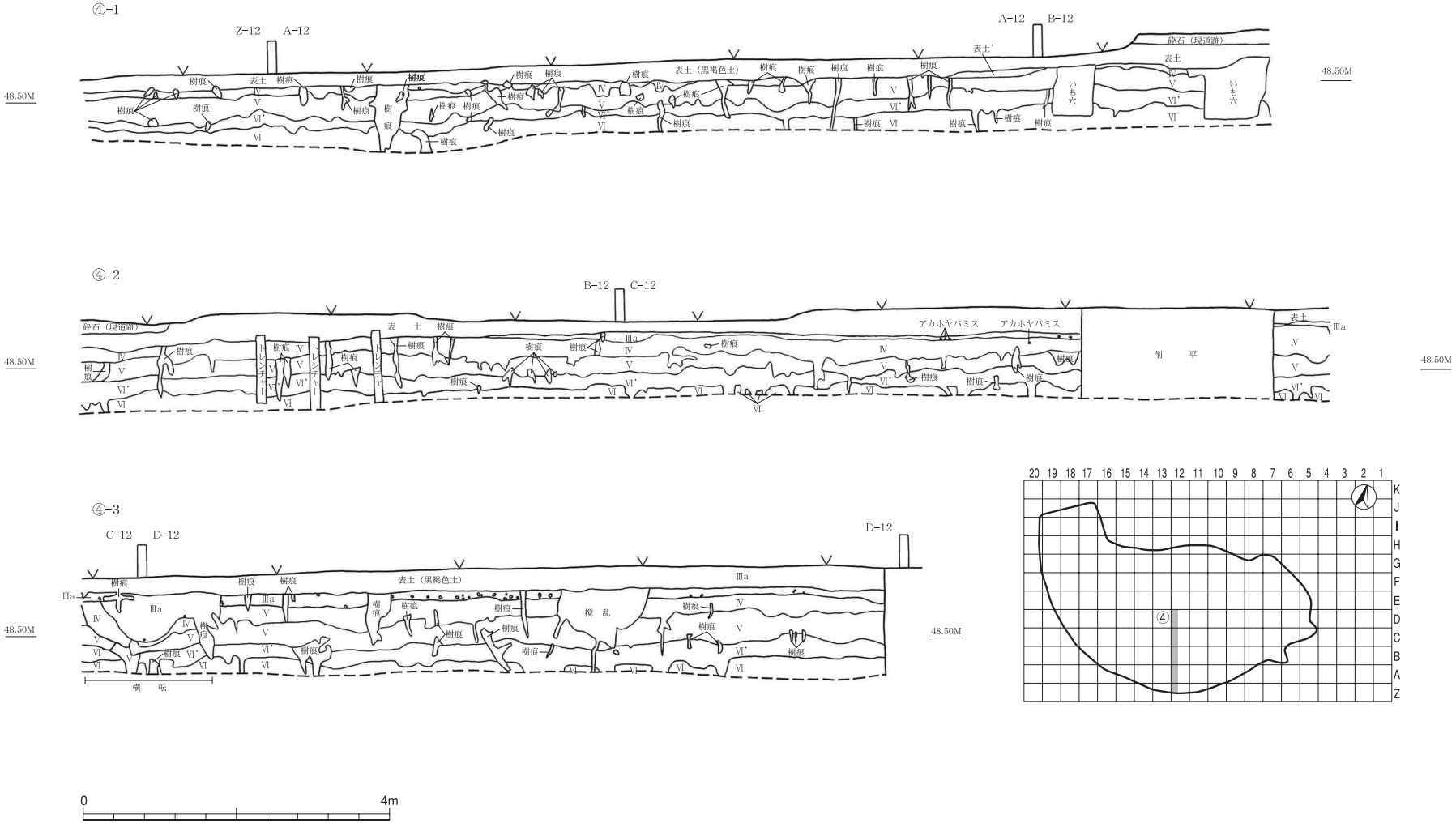
第７図　柱状模式図


①-1
C-18
C-17
C-16
黒褐色土
溝跡
いも穴
表　土
赤褐色土
黒褐色土
樹痕
49.20M
①-2
C-16
C-15
②-1
D-15
D-14
灰茶色土
表土
表土'
パミスブロック
①Ⅶ
②-2
D-14
D-13
D-12
白
トレンチャー
0
4m

第８図　土層断面図（1）


②-3
D-12
D-11
D-10
48.80M
トレンチャー
アカホヤパミス
樹痕
撹乱
いも穴
白
②-4
D-9
暗褐色土
表土
黄褐色土
褐色土
③-1
A-15
B-15
C-15
49.20M
砕石（現道跡）
表土'
パミス
③-2
D-15
川内市
（境界柱跡）
黒褐色土
0
4m

第９図　土層断面図（2）


④-1
Z-12
A-12
A-12
B-12
48.50M
48.50M
表土
表土（黒褐色土）
表土'
砕石（現道跡）
樹痕
いも穴
④-2
B-12
C-12
48.50M
48.50M
砕石（現道跡）
表土
アカホヤパミス
アカホヤパミス
削平
トレンチャー
④-3
C-12
D-12
D-12
48.50M
48.50M
表土（黒褐色土）
撹乱
横転
0
4m

第10図　土層断面図（3）

第３節　旧石器時代の調査

旧石器時代は時期判定が明確な遺物及び，旧石器時代を特定する包含層から第Ⅰ文化層と第Ⅱ文化層に区分された。

第Ⅰ文化層は，Ⅵ層から剥片等のいくつかのまとまりが確認されたが，出土量から１つのブロックを認定した。出土遺物として，ナイフ形石器，台形石器，スクレイパー，剥片，石核，磨石がある。

第Ⅱ文化層は，Ⅴ層から１つのブロックを確認した。出土遺物として，細石刃，スクレイパー，磨石がある。

１　第Ⅰ文化層の調査

出土分布は第12図に示した。等高線はⅤ層上面を使用した。Ａ－14区にブロックが確認され，ブロック内からナイフ形石器（４，５），スクレイパー（９），剥片（10）が出土している。第11図の第Ⅰ文化層から確認された石器群の石材の割合は上牛鼻産黒曜石が大半の69.4%を占め，次いで三船産黒曜石が13.0%である。

遺物

ナイフ形石器（第13図　１～５）

１～５は横長剥片もしくは幅広の剥片を素材とした切出し型のナイフ形石器である。１～３は一部自然面が残る比較的厚みのある横長剥片を素材とし，打面部の主要剥離面に対して平坦剥離を行いバルブを除去している。その後，腹面から急角度のブランティングを二側縁に施している。１，２の先端部は僅かに欠損し，４は半損している。

台形石器（第13図　６，７）

６は横長の剥片を素材とし，基部は折断後に平坦剥離を行い整形している。７は腹面から急角度のブランティングを施し，両側縁を直線状に形成したものである。

スクレイパー（第14図　８，９）

８，９は上牛鼻産の黒曜石である。剥片の縁辺に二次加工を施し刃部を形成したものである。

剥片（第15図　10）

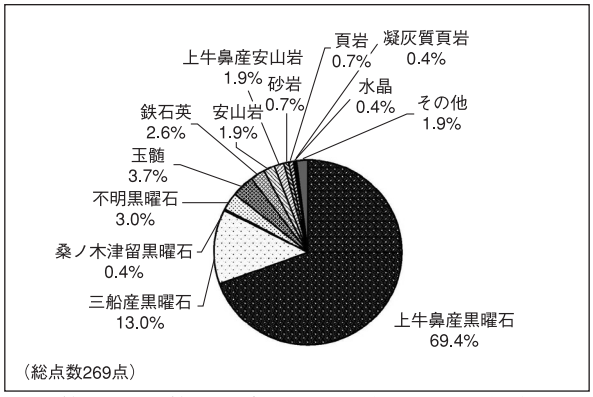
10は凝灰岩質頁岩を素材とする剥片石器である。背面は自然面が多く，腹面は平坦な剥離面である。右側縁に使用痕が認められる。

石核（第15図　11）

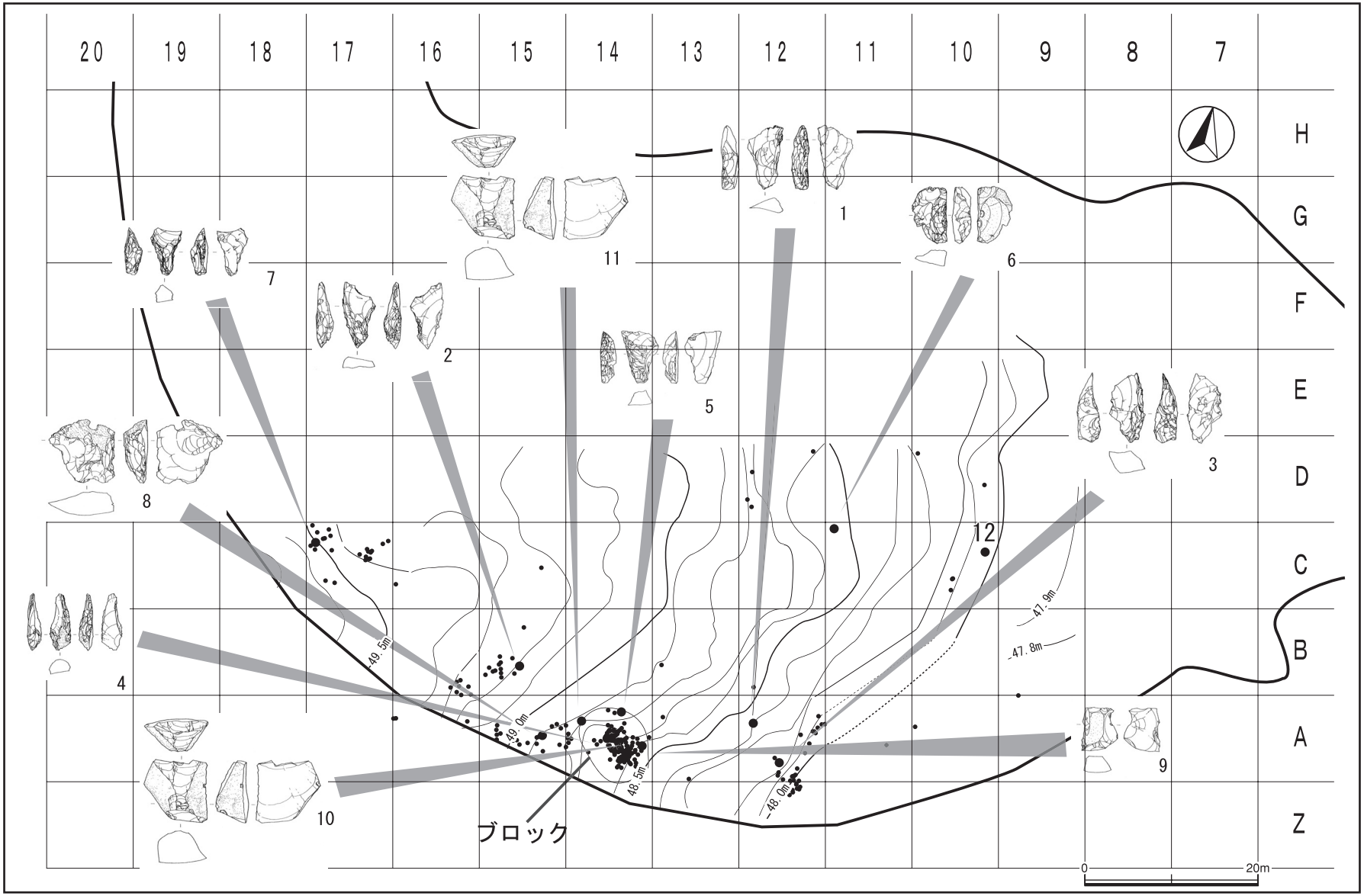
11は，上牛鼻産の黒曜石である。平坦な面を打面とし，作業面を回転させながら剥離面を剥いでいる石核である。

磨石・敲石（第15図　12）

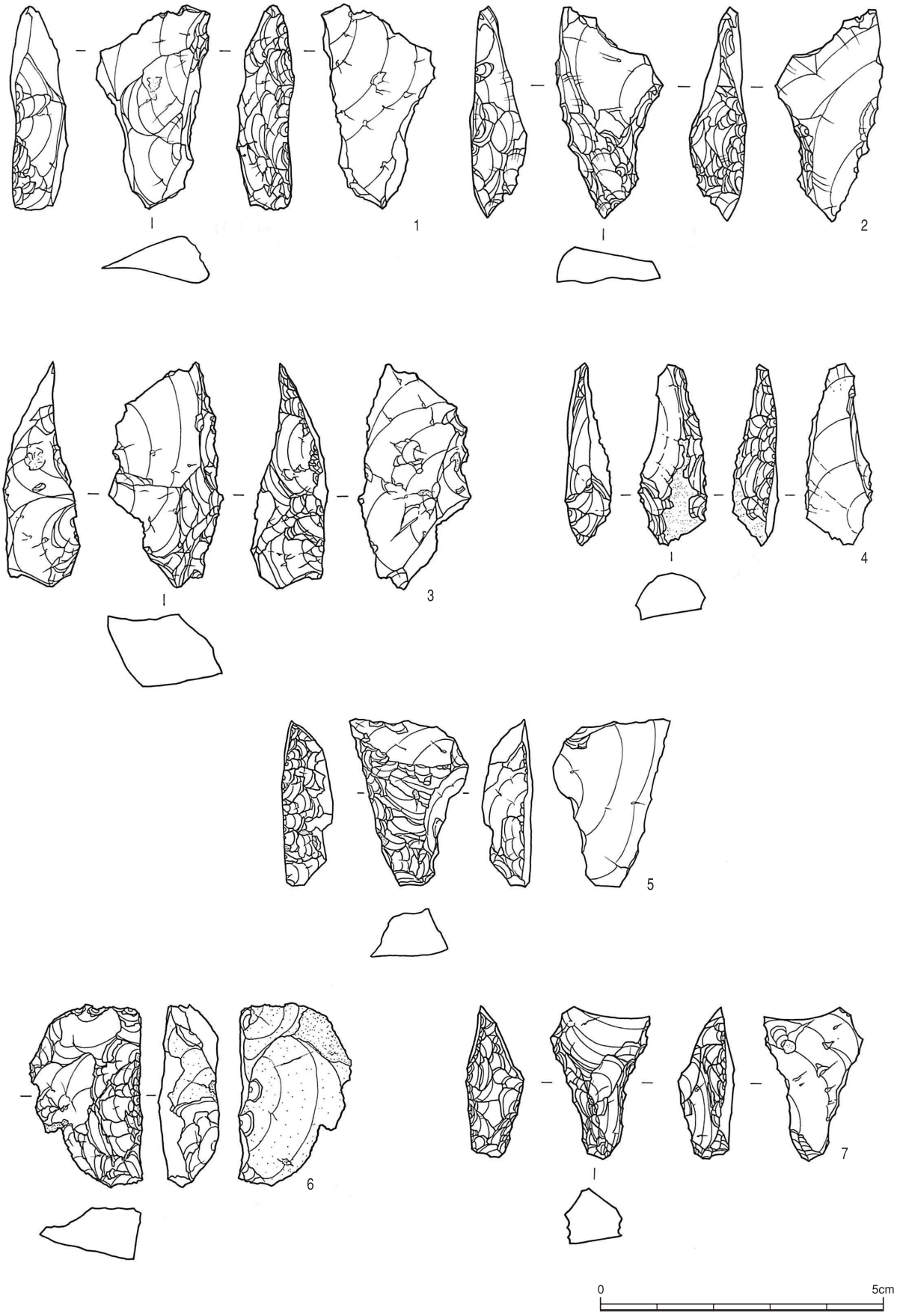
12は安山岩で円礫を用いた磨石と敲石の機能を合わせもったものである。一部敲打の痕跡が認められた。



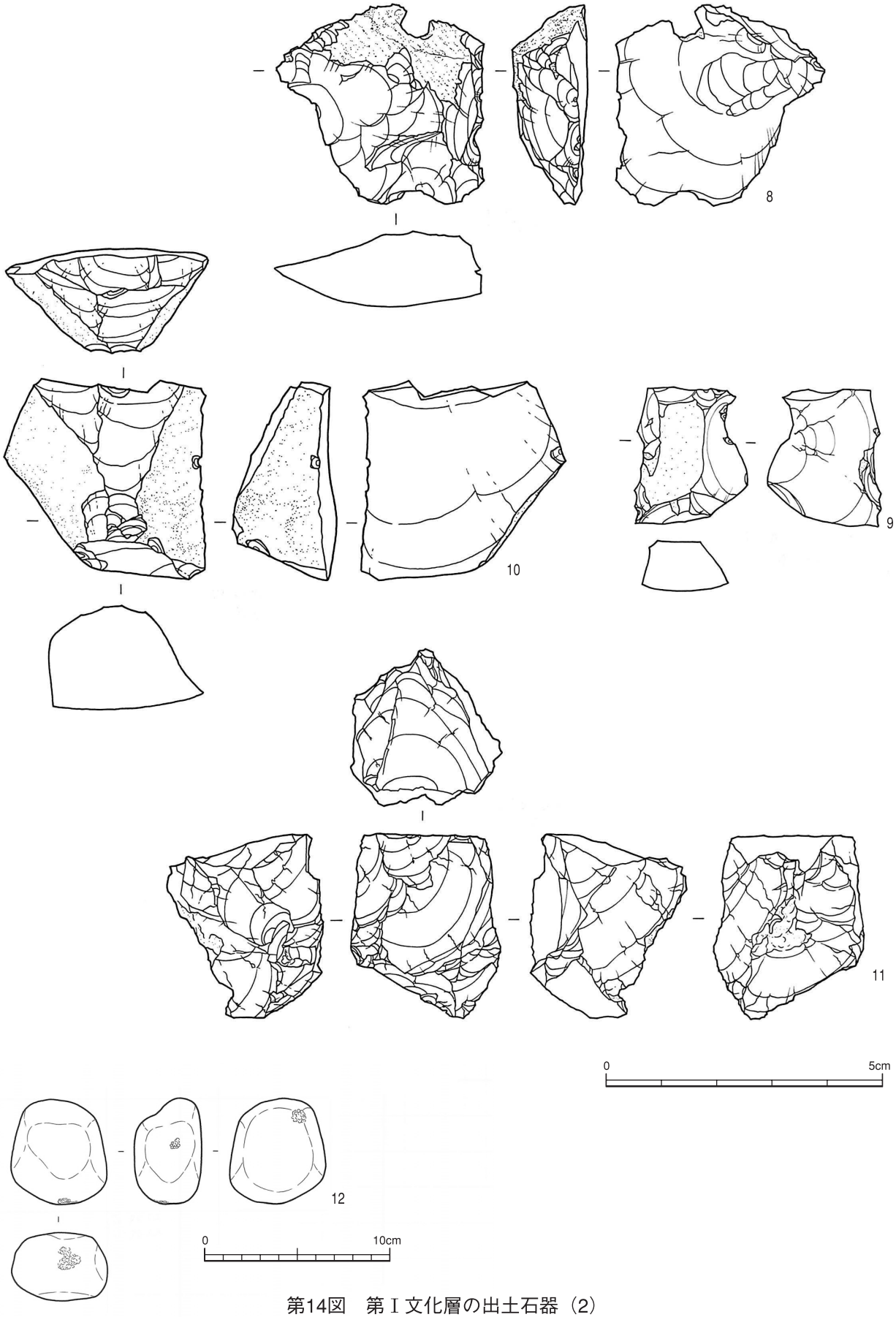
第11図　第Ⅰ文化層石器群の石材の割合



第12図　第Ⅰ文化層のブロック主要石器出土分布



第13図　第Ⅰ文化層の出土石器（1）



第14図　第Ⅰ文化層の出土石器（2）

2　第Ⅱ文化層の調査

出土分布は第17図に示した。等高線はⅤ層上面で計測した。遺構は礫群１基，ブロックがＡ－14区で確認されたが，ブロック内から定形石器は確認されなかった。遺物は主にⅤ層上面から出土し，細石刃，スクレイパー，磨石・敲石が出土している。第15図の石器群の石材の割合から上牛鼻産黒曜石と三船産黒曜石の割合が少なくなり，石材の種類が増え鉄石英や頁岩等の割合が増えてきている。

(1)　遺構

礫群（第16図）

５点の礫から成り，一辺５cmから15cmのものまである。長軸50cm，短軸40cmの範囲内に散在している。①と②，③，④，⑤が接合された。２点の礫が破砕し形成されたものと思われる。灰色をなし，５点とも赤化はみられない。

(2)　遺物（石器）

細石刃（第18図　13，14）

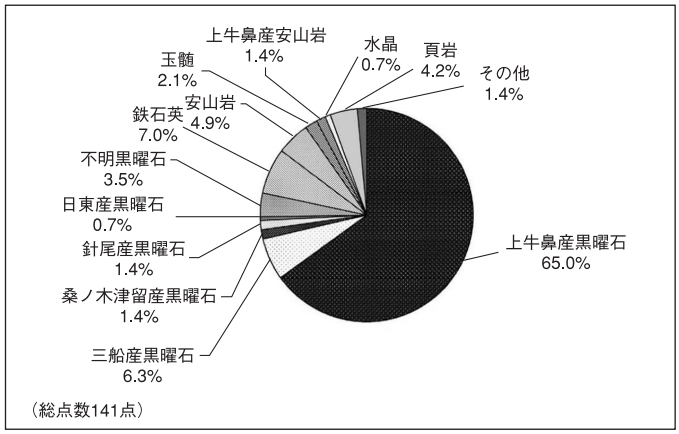
細石刃は２点出土し，使用されている石材は13が腰岳産黒曜石，14が上牛鼻産黒曜石である。２点とも尾部を除去したものであり，両側縁に使用痕が認められる。

スクレイパー（第18図　15～17）

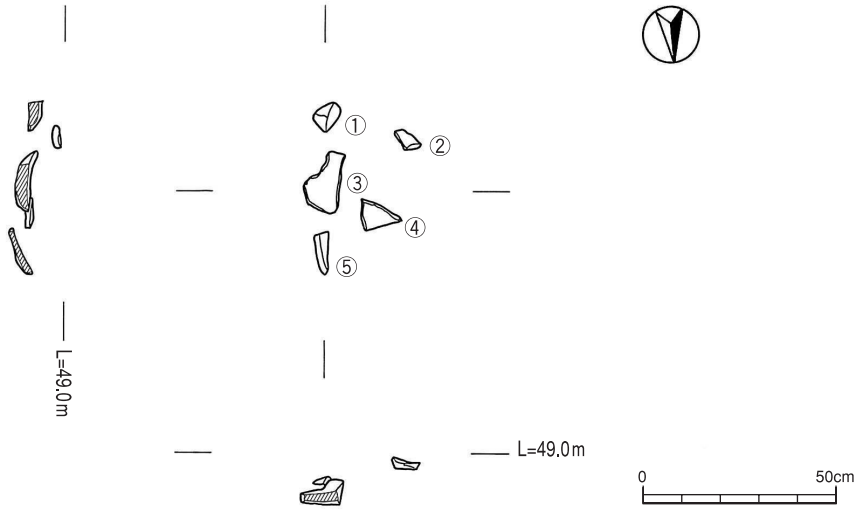
スクレイパーが３点出土し，使用されている石材は15が日東産黒曜石，16が頁岩，17が上牛鼻産黒曜石である。剥片の縁辺に二次加工を施し刃部を形成している。17は右側縁に使用痕が認められる。

磨石・敲石（第18図　18～20）

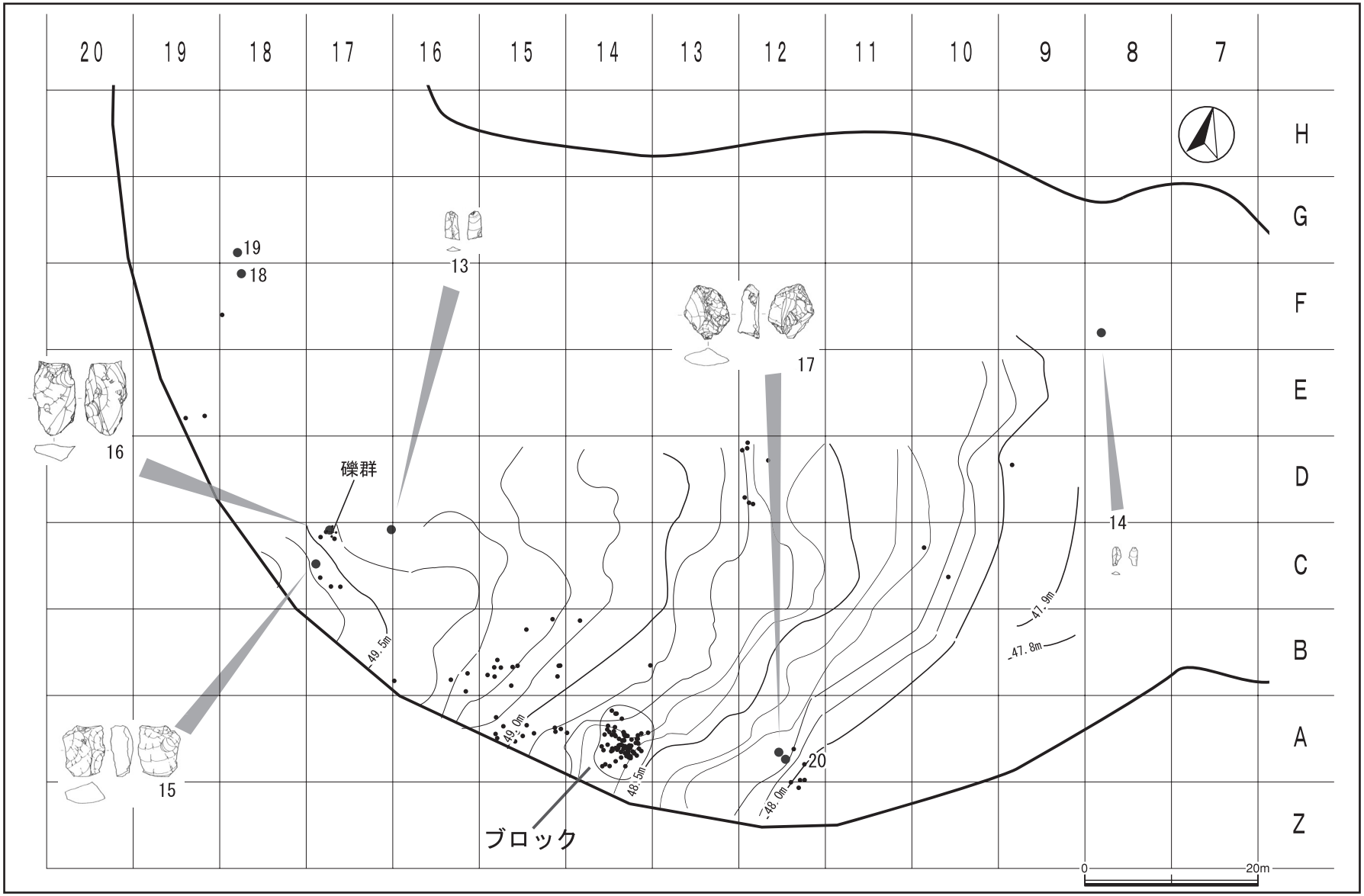
18・19は，安山岩を素材として使用している。18と19は磨石で，20は磨石と敲石の機能を合わせもったものである。側縁に敲打痕集中部が認められる。



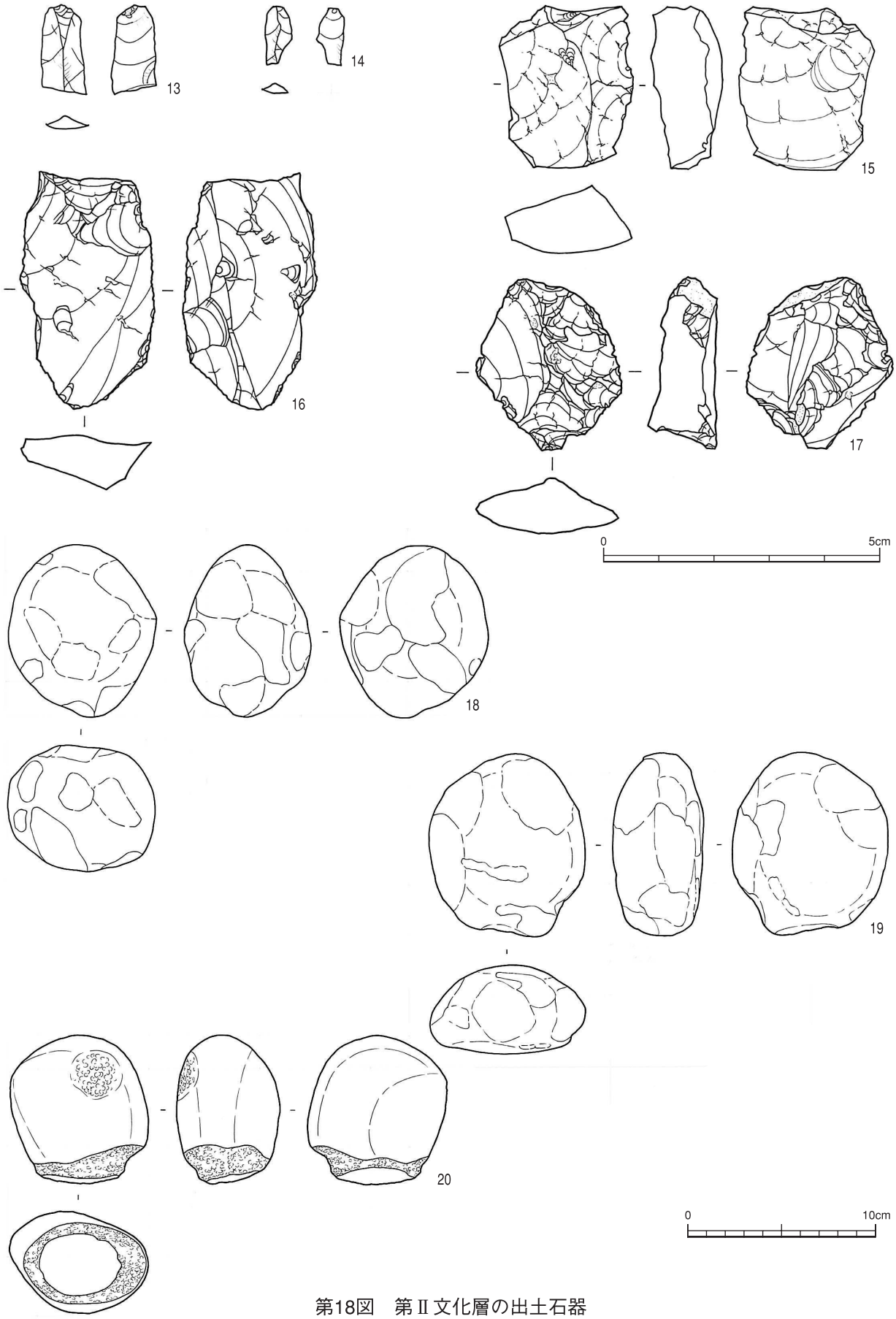
第15図　第Ⅱ文化層石器群の石材の割合



第16図　第Ⅱ文化層の礫群



第17図　第Ⅱ文化層の遺構位置図及びブロック主要石器出土分布



第18図　第Ⅱ文化層の出土石器

第４節　縄文時代の調査

縄文時代については，Ⅳ層から早期，Ⅲa層から前期，中期，後期，晩期がそれぞれ出土している。

以下，遺構と遺物について，それぞれ時代順に述べていきたい。

１　早期の調査

早期は，主としてＢ～Ｅ－９～11区に集中し，集石遺構が３基検出され，Ⅳ層から土器，石器が出土している。

(1)　遺　構

１号集石遺構

１号集石遺構はⅣ層上面で検出された。122cm×70cmの範囲に広がり，上下幅は11cmである。16個の礫で構成され，11個に赤化が見られる。構成礫の平均値は，最大長で9.0cm，厚さが4.2cm，重量は281ｇである。

２号集石遺構

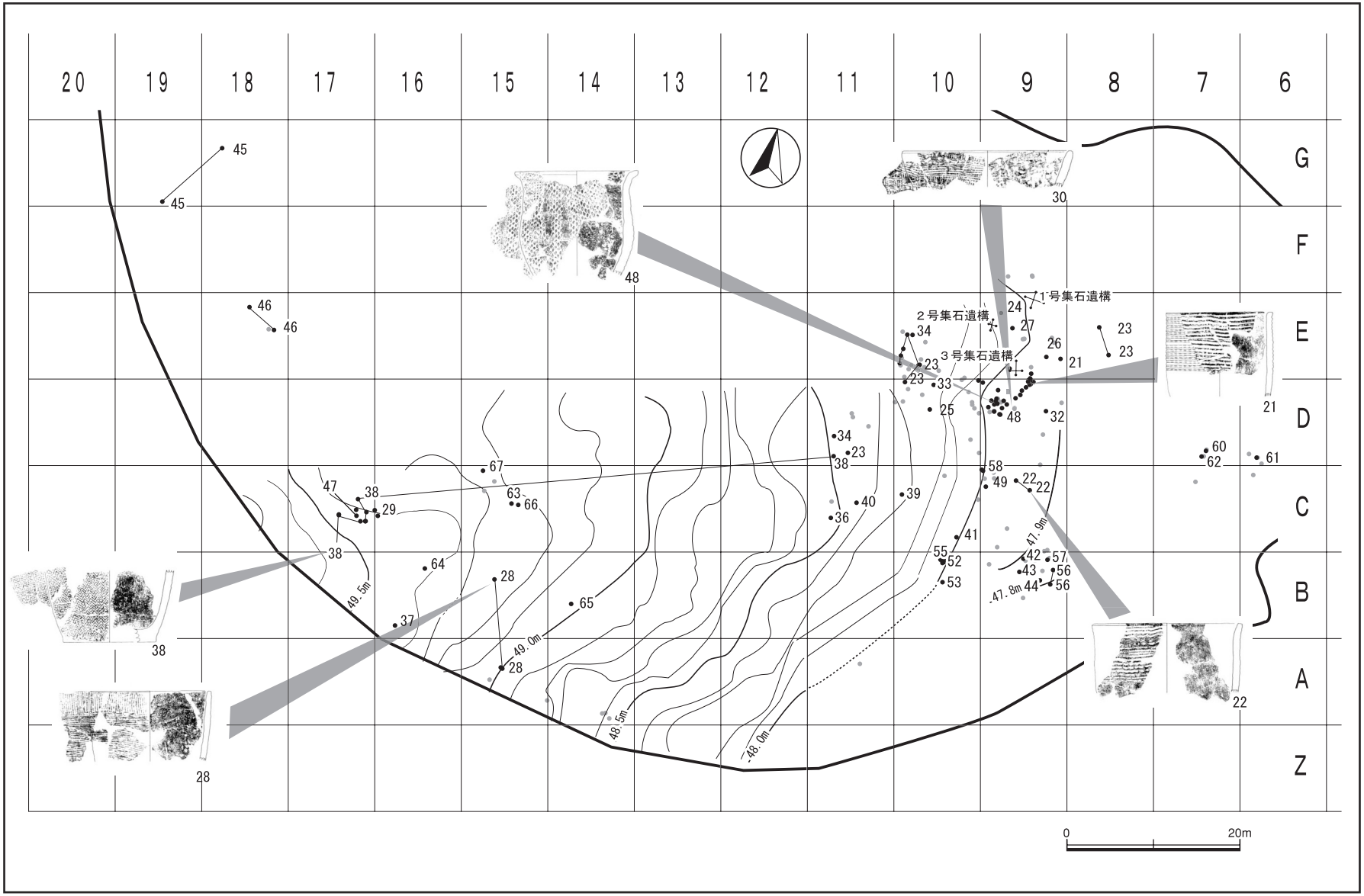
２号集石遺構は138cm×135cmの範囲に広がりをもち，上下の幅は13cmである。83個の礫で構成され，ほぼ全てにおいて赤化が見られた。構成礫の平均値は，最大長で7.8cm，厚さが3.6cm，重量は177.2ｇである。主に50ｇから200ｇのものが突出して多い。掘り込みはみられないが，中央部で過密に集中しており，典型的な集石といえる。

３号集石遺構

３号集石遺構は60cm×55cmの広さを持ち，上下の幅は７cmである。８個の礫で構成され，３個に赤化が見られた。構成礫の平均値は，最大長で9.4cm，厚さが4.6cm，重量は418.8ｇである。これも掘り込みは見られなかった。密度は疎だが，円を描くように形成されている。

第３表　旧石器時代の石器観察表

挿図番号	遺物番号	出土区	層	遺物名	石　材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	注記番号	備　考
第13図	1	A-12	Ⅵ	ナイフ形石器	上牛鼻産安山岩	3.58	2.01	0.84	6.47	3944	
	2	B-15	Ⅲa	ナイフ形石器	上牛鼻産黒曜石	3.78	1.90	0.66	5.16	1360	
	3	A-12	Ⅵ	ナイフ形石器	上牛鼻産黒曜石	4.02	2.02	1.31	8.47	3918	
	4	A-14	Ⅴ	ナイフ形石器	上牛鼻産黒曜石	3.22	1.16	0.84	2.36	3391	
	5	A-14	Ⅴ	ナイフ型石器	上牛鼻産黒曜石	2.96	2.10	0.83	4.36	3578	
	6	C-11	Ⅳ	台形石器	上牛鼻産黒曜石	3.26	1.99	1.10	6.53	4125	
	7	C-17	Ⅴ	台形石器	上牛鼻産黒曜石	2.69	1.73	0.98	3.11	3350	
第14図	8	A-15	Ⅵ	スクレイパー	上牛鼻産黒曜石	3.62	3.80	1.34	16.54	3663	
	9	A-14	Ⅵ	スクレイパー	上牛鼻産黒曜石	2.51	2.09	0.94	5.85	3581	
	10	A-14	Ⅵ	剥片石器	凝灰質頁岩	3.60	3.66	1.87	22.99	3372	
	11	A-14	Ⅵ	石核	上牛鼻産黒曜石	3.32	2.69	2.76	21.65	3628	
	12	C-10	Ⅵ	磨石	安山岩	5.60	5.08	3.54	150.00	4052	
第18図	13	C-17	Ⅴ	細石刃	腰岳産黒曜石	1.61	0.84	0.23	0.29	3339	
	14	F-8	Ⅴ	細石刃	上牛鼻産黒曜石	1.05	0.47	0.13	0.06	73	
	15	C-17	Ⅴ	スクレイパー	日東産黒曜石	2.97	2.43	1.28	9.71	3354	
	16	C-17	Ⅴ	スクレイパー	頁岩	4.24	2.39	0.98	8.22	3346	
	17	A-12	Ⅴ	スクレイパー	上牛鼻産黒曜石	3.05	2.62	1.25	7.58	3920	
	18	F-18	Ⅴ	磨石	安山岩	9.29	8.04	6.82	600.00	1175	
	19	G-18	Ⅴ	磨石	安山岩	9.82	8.42	4.89	550.00	1173	
	20	A-12	Ⅴ	磨石・敲石	安山岩	8.00	7.50	5.50	380.00	3919	



第19図　縄文時代早期の遺構配置図及び土器出土分布

(2) 遺　物

1　土　器

Ⅰ類土器（第24図　21～27）

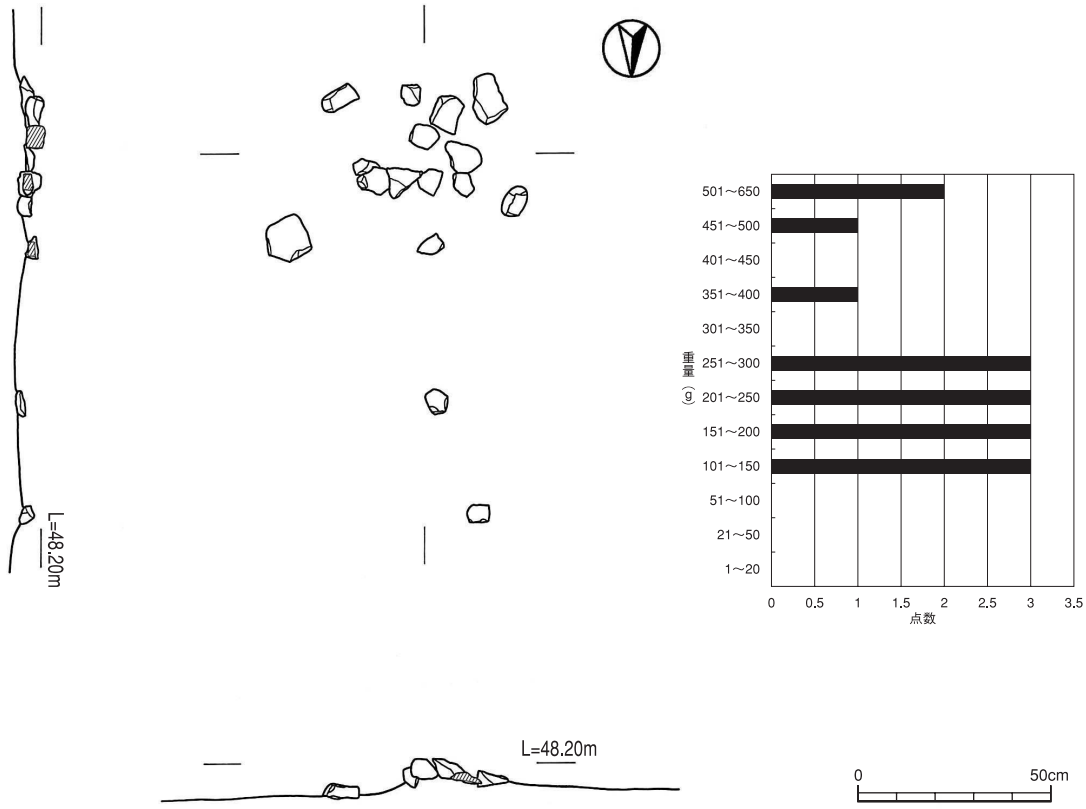
Ⅰ類土器は，口縁部から胴部にかけて貝殻腹縁による横方向の条痕文が施され，胴部への施文は特にない。器形は円筒形で，口縁部が直立または外反している。胴部がやや膨み，底部は平底である。主にⅣ層から27点出土し７点を図化した。

21は，口縁部から胴部下位まで接合できたものであり，口縁直径は18.8cmである。22，23は，口縁部片である。21，22は，口唇部が平坦であり，23は丸みは帯びている。24，25は胴部片である。26，27は底部片である。26の底径は10.6cm，27の底径は25.2cmで，両方とも内外面の調整はナデである。

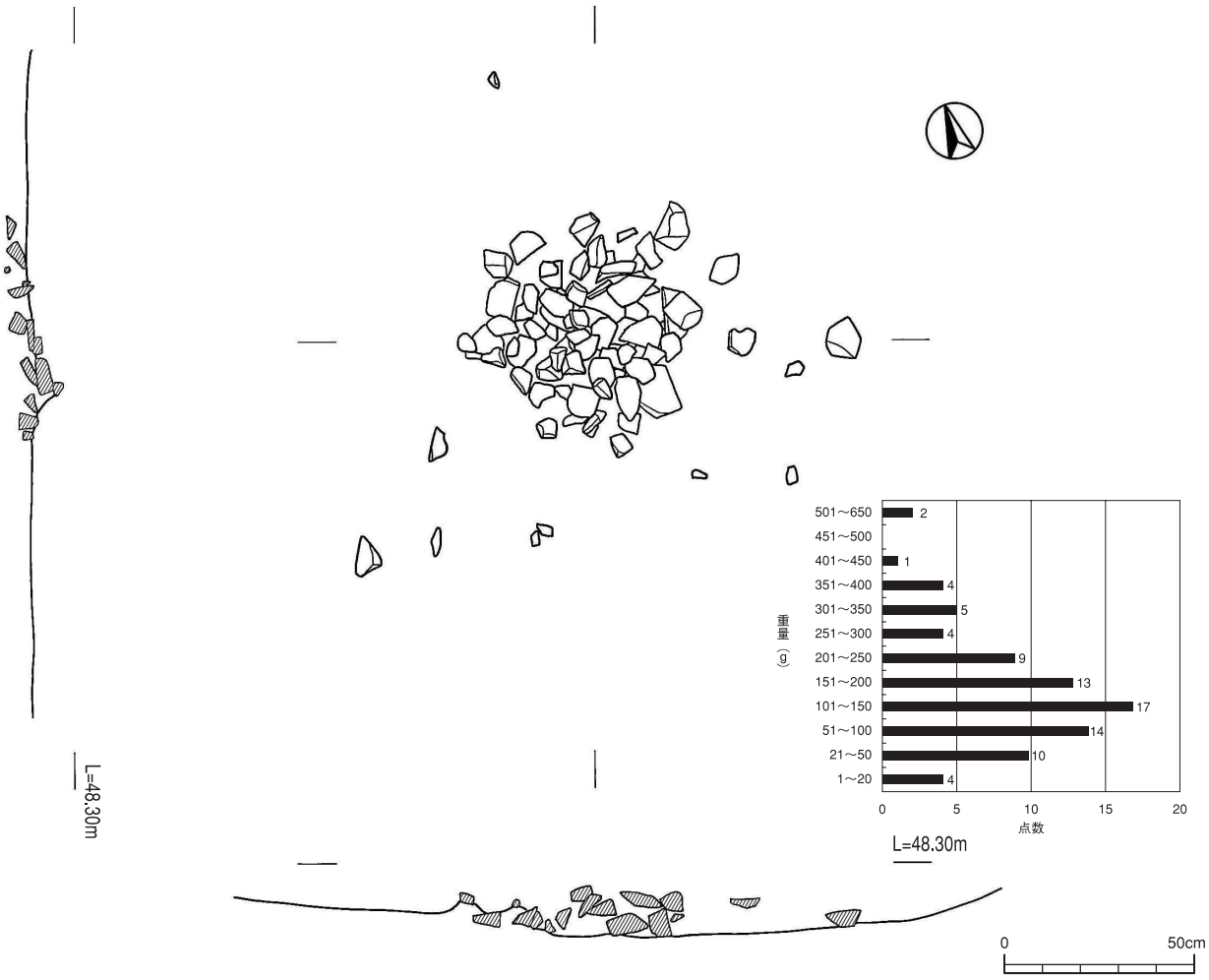
Ⅱ類土器（第25図　28～37）

Ⅱ類土器は，口縁部から胴部にかけて貝殻による条痕文が施されている。器形は，円筒形である。主にⅣ層から48点出土し10点を図化した。

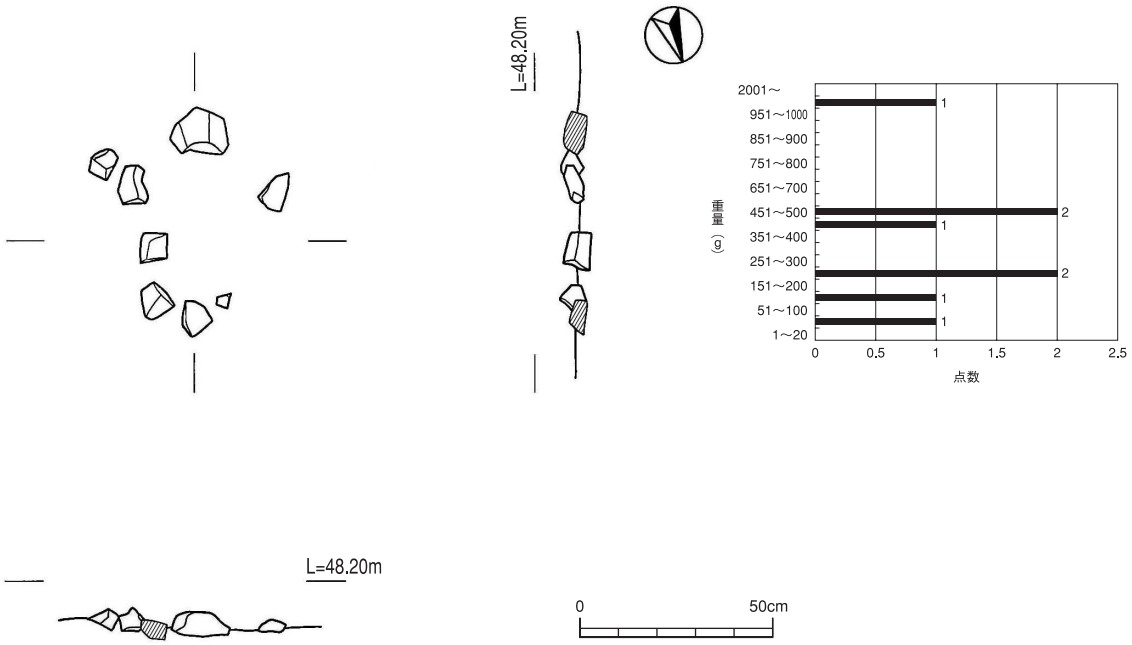
28～30は，口縁部片である。28，29は，口縁部に縦方向の条痕文が施され，その下は横方向の条痕文が施されている。30は，まず縦方向の条痕文が施された後，横方向の条痕文が施され，器厚も1.2cmである。31～37は，胴部片である。31は，縦方向の条痕文が施された後，横方向の条痕文が施されている。器厚も1.2cmで，30と同一個体であると考えられる。35，37は，横方向の条痕文が施され，内面調整はナデで，同一個体の可能性がある。



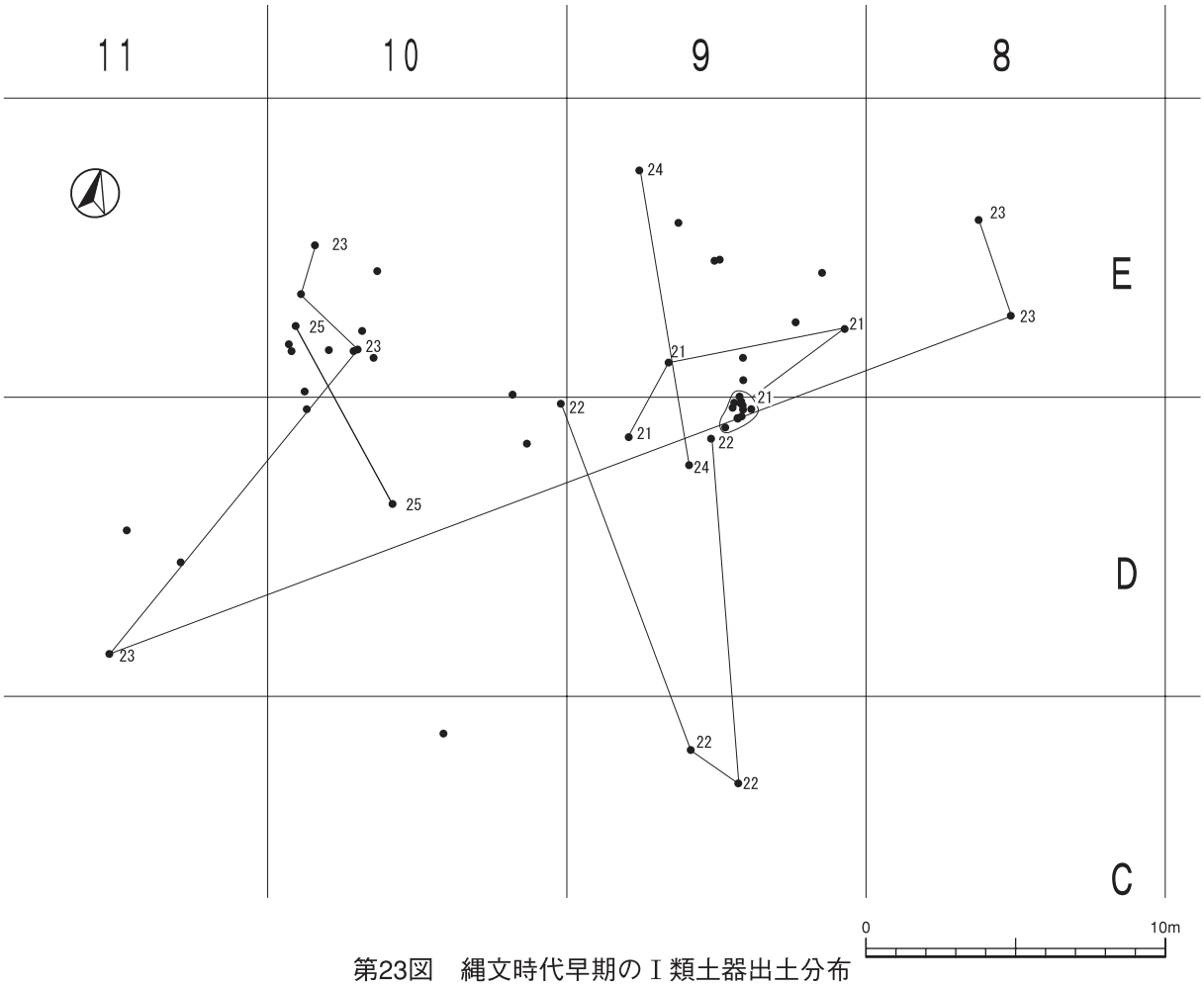
第20図　縄文時代早期の１号集石遺構



第21図　縄文時代早期の２号集石遺構



第22図　縄文時代早期の３号集石遺構



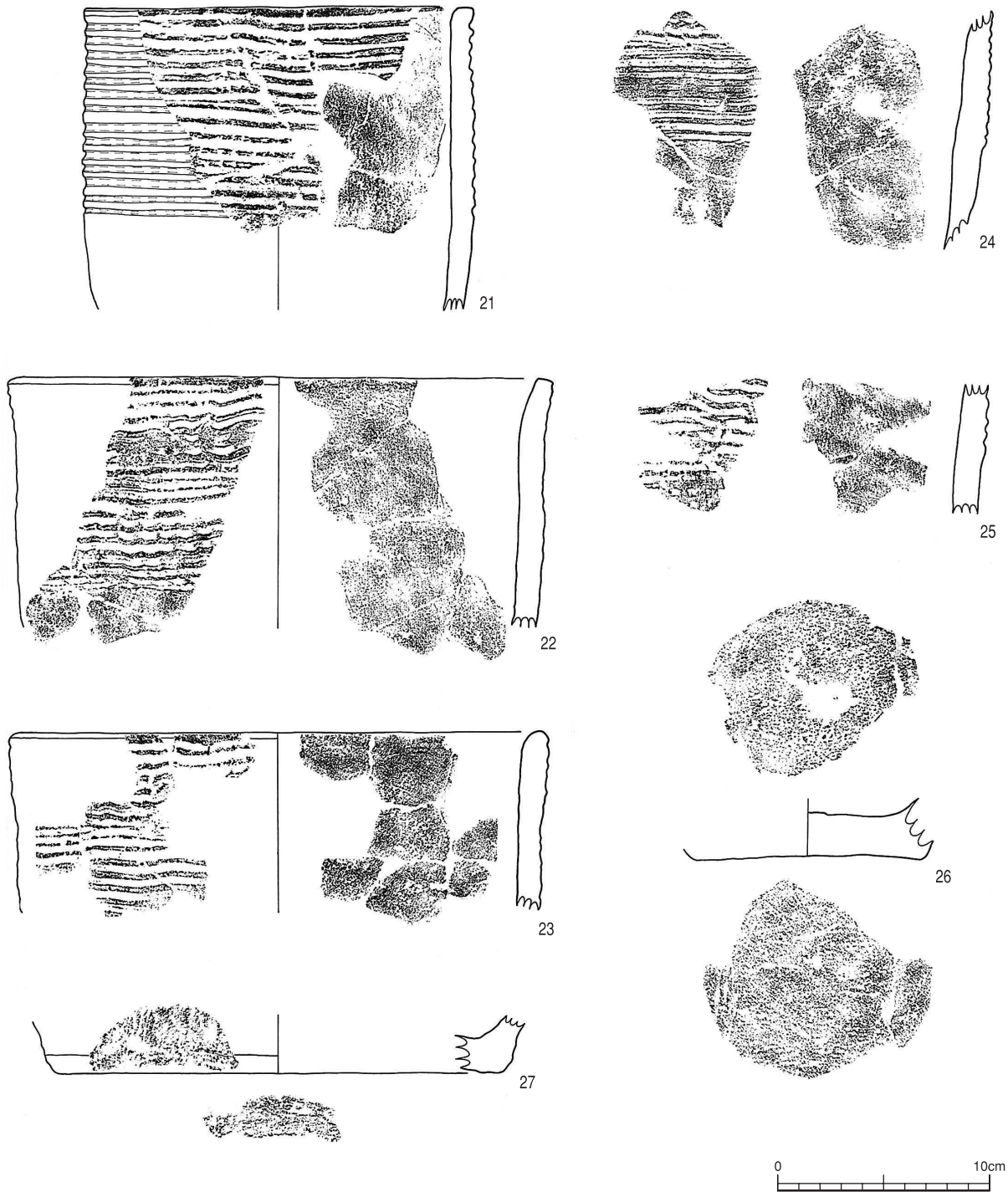
第23図　縄文時代早期のⅠ類土器出土分布

Ⅲ類土器（第28図　38～47）

Ⅲ類土器は，外面と内面上部に山形の押型文を施文するものである。主にⅣ層から30点出土し10点図化した。39，40は口縁部が外反し，口唇部は丸みを帯びている。外面は縦方向に施文が施され，内面は横方向に施文が施されている。38は，胴部から底部まで接合できたものであり，底径は約16cmである。外面全体に山形の施文が横方向に規則正しく施されている。器厚も厚く約12cmである。内面の調整はナデである。41～47は胴部片である。44は，山形の施文の下に横方向の沈線文が施されている。

Ⅳ類土器（第28図　48～55）

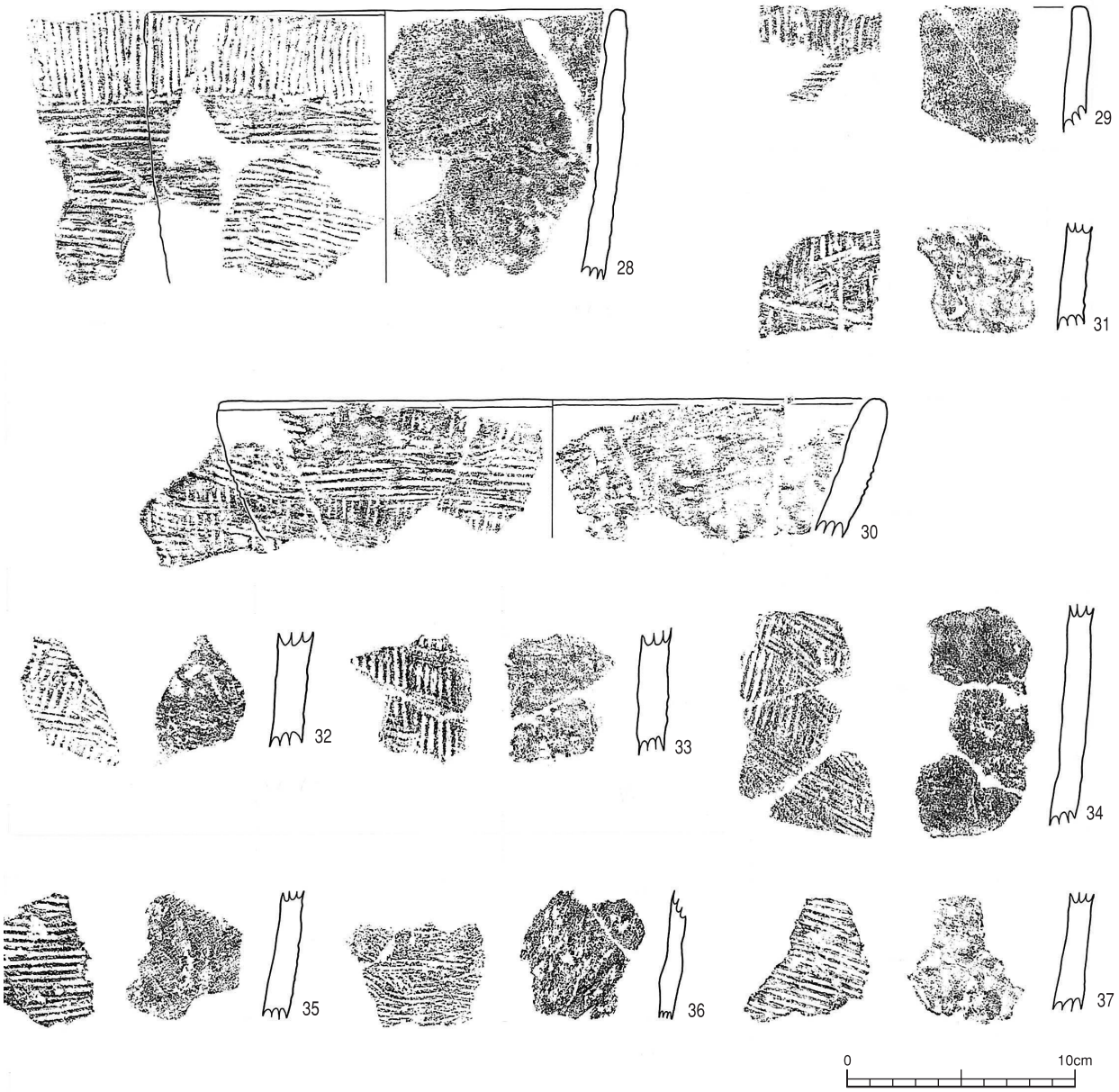
Ⅳ類土器は，外面と内面上部に楕円形の押型文を施文するものである。主にⅣ層から41点出土し８点図化した。48は，口縁部から胴部まで接合できたものであり，外面には楕円形の押型文が全面に縦方向に巡らしている。口縁部は外反し，内面の口縁部近くにも押型文が施されている。胴部は幾分膨らみを有する。49は口縁部片で外反し，内外面ともに楕円形の押型文が施されている。50～54は胴部片である。52と53は，細かな楕円形の押型文が施され，内面調整はナデで，同一個体の可能性がある。55は底部片である。外面に楕円の押型文がわずかではあるが見られた。



第24図　縄文時代早期のⅠ類土器

Ⅴ類土器（第29図　56～59）

Ⅴ類土器は，撚糸文が施されている。主にⅣ層から16点出土し４点図化した。56は，口縁部片で，外面は縦方向に撚糸文が施され，内面は口縁近くに横方向の撚糸文が施されている。57～59は，胴部片である。57，59は横方向に撚糸文が施され，58は縦方向に撚糸文が施されている。



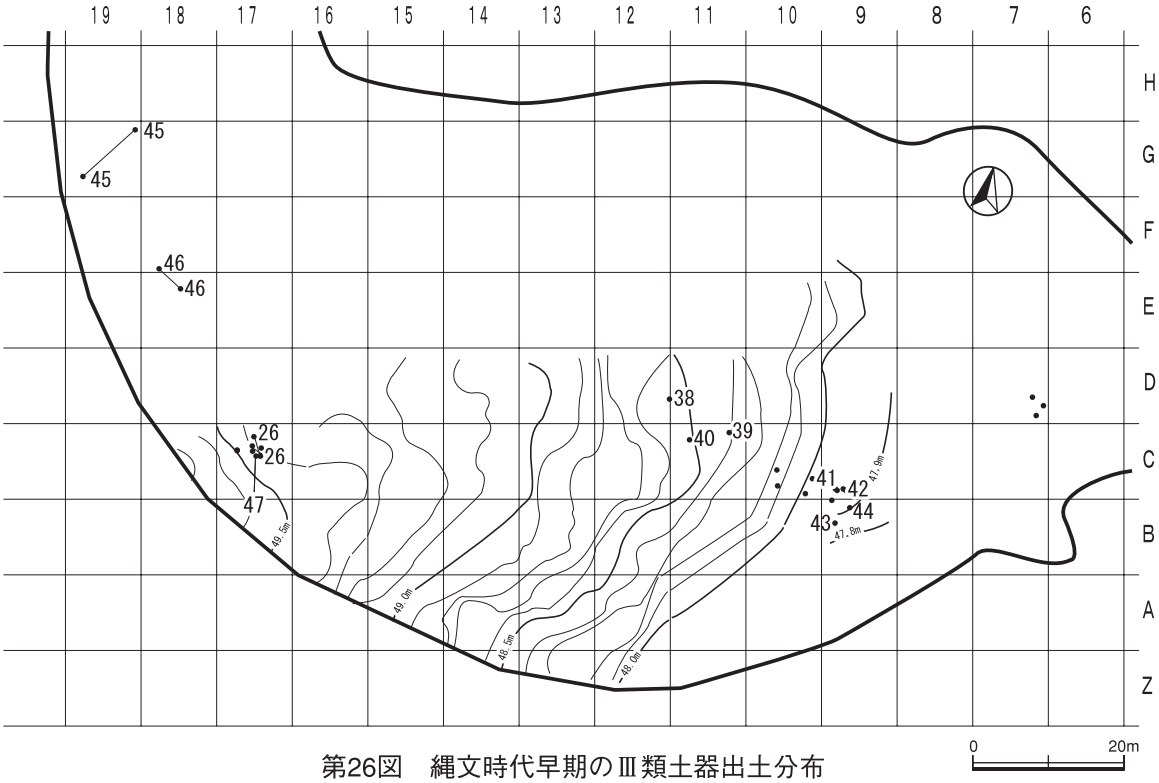
第25図　縄文時代早期のⅡ類土器

Ⅵ類土器（第29図　60～62）

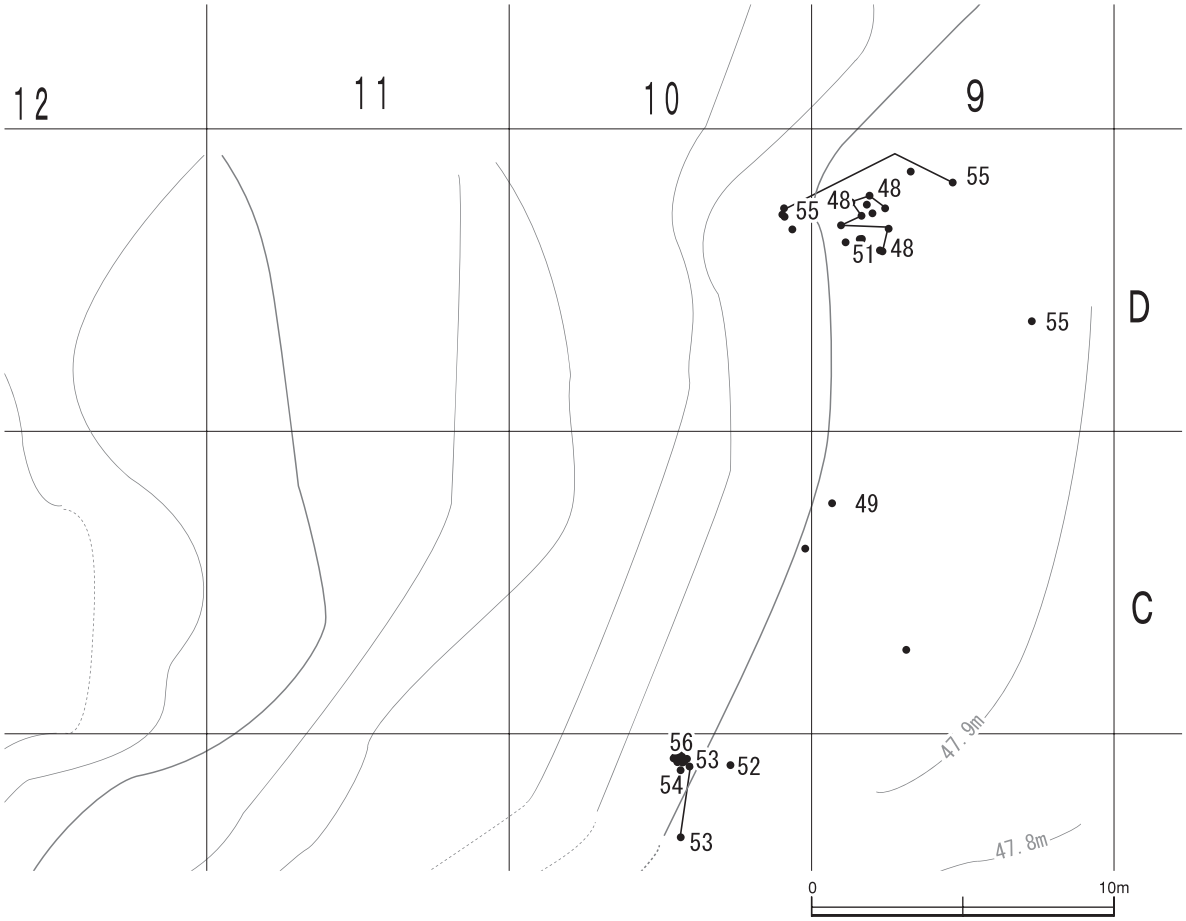
Ⅵ類土器は，外面に縄文が施文されている。60～62は胴部片で外面に縄文が施文され，内面はケズリ後ナデが施されている。

Ⅶ類土器（第29図　63～65）

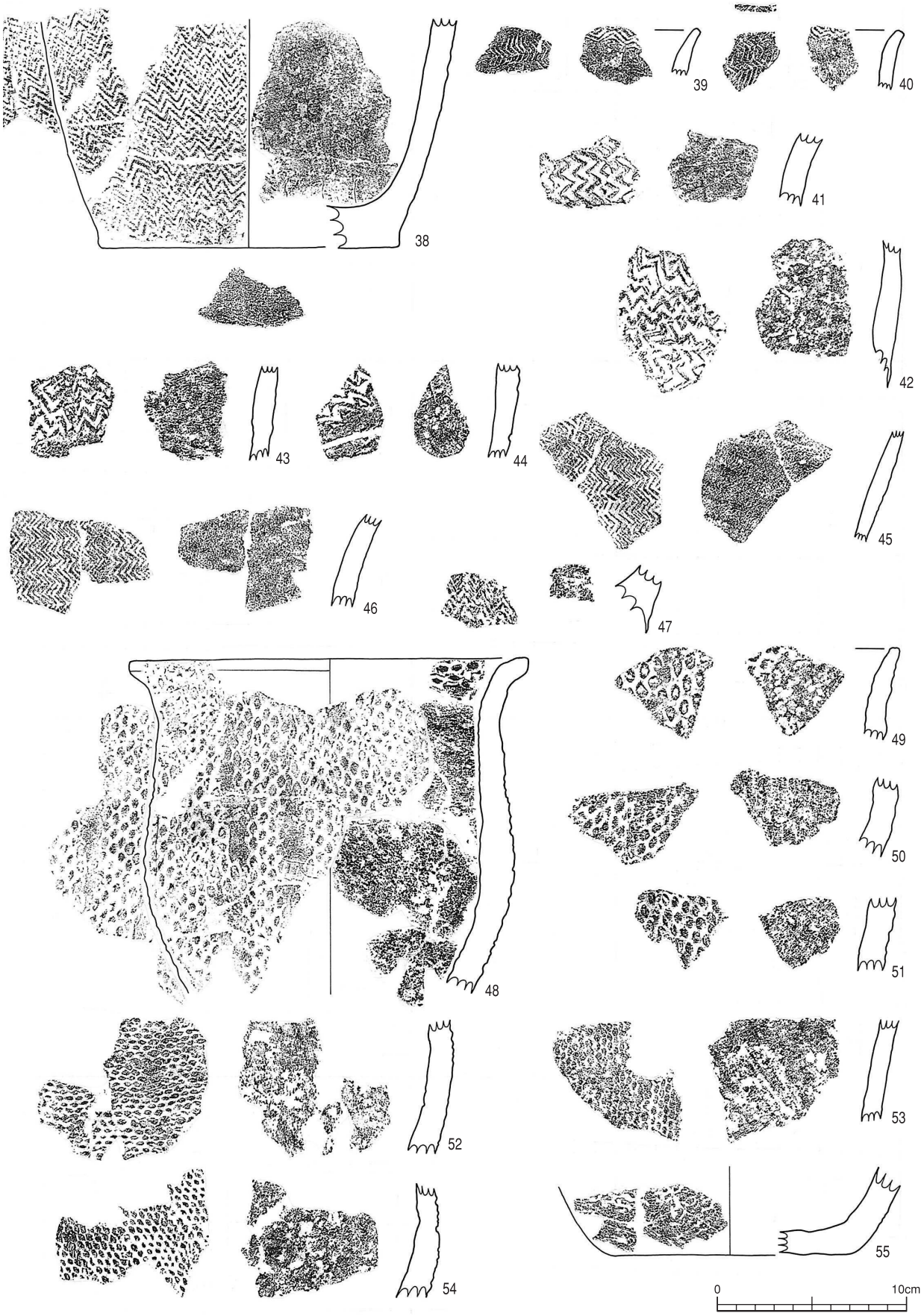
Ⅶ類土器は，沈線文や網目撚糸文が施されている。7点出土し5点図化した。63，65は口縁部片である。外面は沈線文が施文され，やや外反する。63～67は胴部片である。65の外面は沈線文が施され，66，67は網目撚糸文が施されている。器厚は約5㎜でやや薄めである。



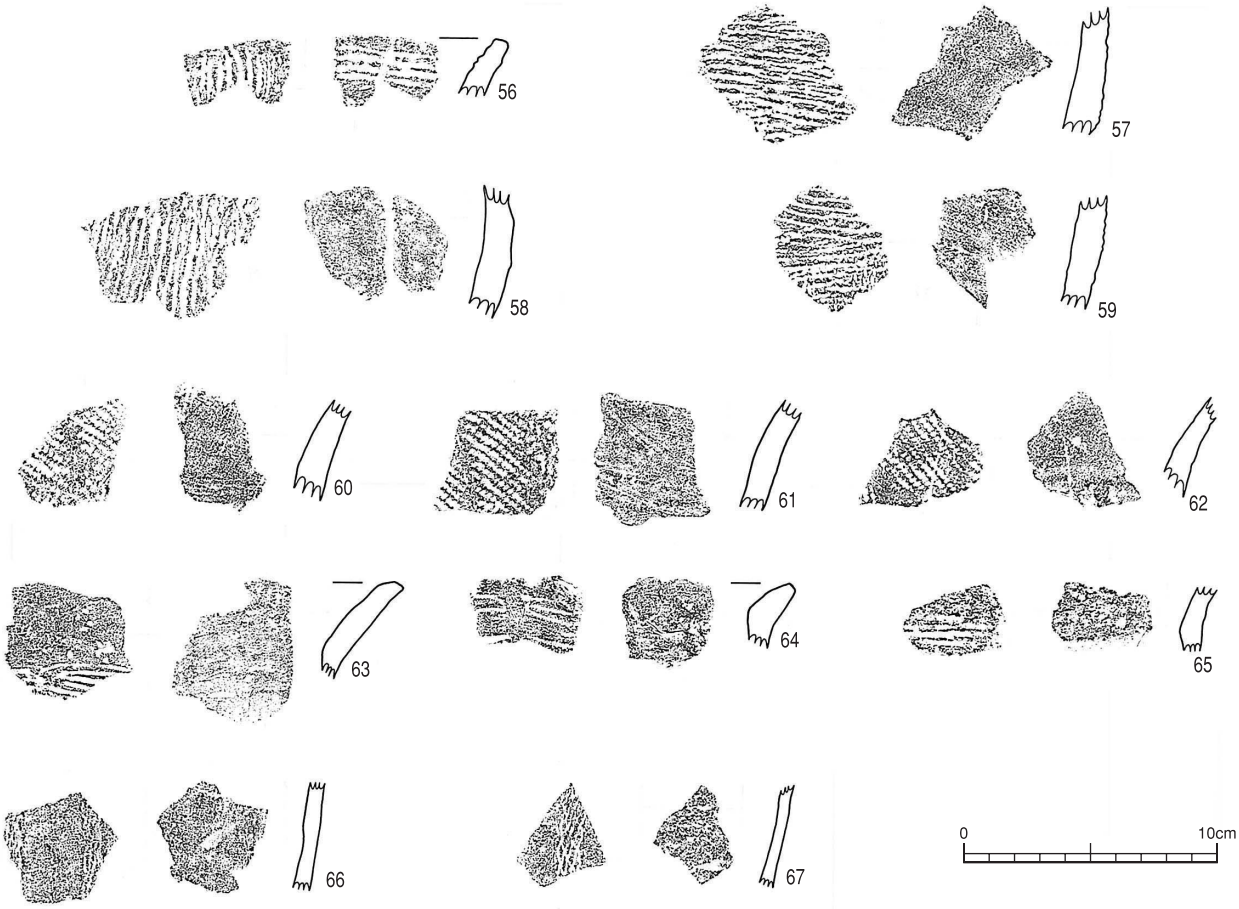
第26図　縄文時代早期のⅢ類土器出土分布



第27図　縄文時代早期のⅣ類土器出土分布



第28図　縄文時代早期のⅢ・Ⅳ類土器



第29図　縄文時代早期のⅤ・Ⅵ・Ⅶ類土器

第４表　縄文時代早期の土器観察表(1)

挿図番号	遺物番号	出土区	層位	分類	部位	色 外面	調 内面	胎土				焼成	調整		備考
								石英	長石	角閃石	その他		外面・底部	内面	
第24図	21	D-9,E-9	Ⅳ,Ⅲ	Ⅰ	口縁部	にぶい黄橙	にぶい黄橙		○	○		良	貝殻条痕	ナデ	
	22	C-9,D-9	Ⅲa,Ⅳ		口縁部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○		良	条痕	ナデ	
	23	E-8,D-11,E-10	Ⅳ		口縁部	灰黄	浅黄	○	○	○		良	条痕	ナデ	
	24	D-9,E-9	Ⅳ		胴部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○		良	貝殻条痕	ナデ	
	25	D-10,E-10	Ⅳ		胴部	浅黄	浅黄	○	○	○		良	貝殻条痕	ナデ	
	26	E-9	Ⅲa		底部	黄褐色	暗灰黄色	○	○	○		良	ナデ	ナデ	
	27	E-9	Ⅳ		底部	にぶい黄褐	黒褐	○	○	○		良	条痕	ナデ	
第25図	28	A-15	Ⅲa,Ⅳ	Ⅱ	口縁部	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○	○	○		良	貝殻条痕	ナデ	
	29	C-16	Ⅳ		口縁部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○		良	貝殻条痕	ナデ	
	30	D-9	Ⅳ		口縁部	にぶい橙	明赤褐	○	○	○		良	貝殻条痕	ナデ	
	31	D-9	Ⅳ		胴部	明赤褐	明赤褐	○	○	○		良	貝殻条痕	ナデ	
	32	D-9	Ⅳ		胴部	橙	橙	○	○	○		良	貝殻条痕	ナデ	煤付着
	33	E-10,D-10	Ⅳ		胴部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○		良	貝殻条痕	ナデ	
	34	E-10,D-11	Ⅳ		胴部	にぶい黄橙	明赤褐	○	○	○		良	貝殻条痕	ナデ	
	35	一括	表層		胴部	灰黄褐	にぶい黄橙	○	○	○		良	貝殻条痕	ナデ	
	36	C-11	Ⅴ		口縁部	にぶい黄橙	灰褐色	○	○	○		良	楕円押型文	ナデ	
	37	B-16	Ⅳ		胴部	にぶい黄橙	黒褐	○	○	○		良	貝殻条痕	ナデ	
第28図	38	C-17,D-10	Ⅲa	Ⅲ	底部	橙	にぶい黄		○	○		良	山形押型文	ナデ	
	39	C-11	Ⅳ		口縁部	にぶい褐	にぶい褐		○	○		良	山形押型文	ナデ	内面口唇部に山形文あり・煤付着
	40	C-11	Ⅳ		口縁部	にぶい橙	にぶい橙		○	○		良	山形押型文	ナデ	内面口唇部に山形文あり
	41	C-10	Ⅳ		胴部	明黄褐	明黄褐	○	○	○		良	山形押型文	ナデ	

第５表　縄文時代早期の土器観察表(2)

挿図番号	遺物番号	出土区	層位	分類	部位	色 外面	調 内面	胎土 石英	長石	角閃石	その他	焼成	調整 外面・底部	内面	備考
第28図	42	C-9	Ⅳ	Ⅲ	胴部	にぶい橙	にぶい橙		○	○		良	山形押型文	工具ナデ	
	43	B-9	Ⅳ		胴部	にぶい黄橙	にぶい黄橙		○	○		良	山形押型文	ナデ	
	44	B-9	Ⅳ		胴部	にぶい橙	にぶい橙		○	○		良	山形押型文	工具ナデ	下部に沈線文あり
	45	G-19	Ⅲa		胴部	にぶい黄橙	浅黄	○	○	○		良	山形押型文	ナデ	
	46	E-18,F-18	Ⅴ		胴部	浅黄	にぶい黄橙	○	○	○		良	山形押型文	板ナデ・ナデ	
	47	C-17	Ⅲa		胴部	橙	灰黄		○	○		良	山形押型文	ケズリ	
	48	D-9	Ⅳ	Ⅳ	口縁部	明赤褐	にぶい黄褐	○	○	○		良	楕円押型文	ナデ	
	49	C-9	Ⅳ		胴部	にぶい黄褐	にぶい黄	○	○	○		良	楕円押型文	押型文	
	50	D-9	Ⅳ		胴部	明赤褐	にぶい黄褐	○	○	○		良	楕円押型文	ナデ	
	51	D-9	Ⅳ		胴部	橙	にぶい黄褐	○	○	○		良	楕円押型文	ナデ	
	52	B-10	Ⅲa		胴部	にぶい褐	にぶい褐	○	○	○		良	楕円押型文	工具ナデ	
	53	B-10	Ⅳ		胴部	明赤褐	にぶい黄褐		○	○		良	楕円押型文	ナデ	
	54	B-10	Ⅳ		胴部	にぶい褐	にぶい褐	○	○	○		良	楕円押型文	ナデ	
	55	B-10,D-9	Ⅳ		底部	褐	にぶい褐	○	○	○		良	ナデ・ケズリ	ナデ	
第29図	56	B-10	Ⅳ	Ⅴ	口縁部	明黄褐	明黄褐		○	○		良	撚糸文	撚糸文	
	57	B-9	Ⅲa		胴部	にぶい黄橙	にぶい黄橙		○	○		良	撚糸文	ナデ	
	58	C-9	Ⅳ		胴部	明黄褐	明黄褐		○	○		良	撚糸文	ナデ	
	59	B-9	一括		胴部	にぶい褐	にぶい黄橙	○	○	○		良	撚糸文	ナデ	
	60	D-7	Ⅳ	Ⅵ	胴部	にぶい黄褐	にぶい黄橙	○	○	○		良	撚糸文	ケズリ・ナデ	
	61	D-6	Ⅳ		胴部	にぶい黄褐	浅黄褐	○	○	○		良	撚糸文	ケズリ・ナデ	
	62	D-7	Ⅲa		胴部	灰黄褐	にぶい黄褐	○	○	○		良	撚糸文	ケズリ・ナデ	
	63	C-15	Ⅲa	Ⅶ	口縁部	浅黄	にぶい黄	○	○	○		良	沈線文	ナデ・磨き	
	64	B-16	Ⅲa		口縁部	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○	○	○		良	沈線文	ナデ	
	65	B-14	Ⅲa		胴部	にぶい黄橙	にぶい黄橙		○	○		良	沈線文	ナデ	
	66	C-15	Ⅲa		胴部	灰黄	灰黄	○	○	○		良	網目撚糸文	ハケ・ナデ	
	67	C-15	Ⅳ		胴部	にぶい黄橙	黄褐		○	○		良	網目撚糸文	ナデ	煤付着

２　石　器

縄文時代早期の石器は，主にⅣ層より石鏃，スクレイパー，使用痕剥片，石斧，礫器，磨石，敲石，石皿が出土している。

石鏃（第31図　68～85，第32図　86～88）

石鏃はＺ～Ｆ－５～19区に散布しており，22点出土し，21点を図化した（図31・32）。素材は黒曜石（９点），安山岩（６点），玉髄（２点），砂岩（２点），鉄石英（１点），珪質頁岩（１点）である。さらに黒曜石の原産地を細分すると上牛鼻産（５点），西九州産（２点），桑ノ木津留産（１点），針尾産（１点）である。

石鏃の分類は，本遺跡の報告書における統一的な分類に従うことにする。（石鏃分類表Ｐ41　参照）

Ａ－ａ－ｂ（第31図　68～75）

長幅比が１～1.5で，形状がほぼ正三角形である。基部は浅い抉りとなっている。

Ａ－ａ－ｃ（第31図　76）

長幅比が１～1.5で，形状がほぼ正三角形である。基部は深い抉りとなっている。

Ａ－ａ－ｄ（第31図　77～81）

長幅比が１～1.5で，形状がほぼ正三角形である。基部はＵ字状に抉れている。

Ａ－ｂ－ｂ（第31図　82～85）

長幅比が1.5～２で，形状がほぼ二等辺三角形である。基部は浅い抉りである。

Ａ－ｂ－ｃ（第31図　85）

長幅比が1.5～２で，形状がほぼ二等辺三角形である。基部は深い抉りである。

Ｂ－ａ－ｄ（第32図　86）

形状がほぼ五角形である。長幅比が１～1.5であり，基部が深い抉りである。

その他（第32図　87，88）

87，88は頭部や基部が欠損しているため分類ができないものである。

スクレイパー（第32図　89～92）

89は上牛鼻産黒曜石を使用し，左側縁に二次加工が施され，下部に剥離痕が残る。90は玉髄を使用し，右側縁から下部にかけて丸く刃部が作り出されているが，わずかに欠損している。91，92は安山岩を使用し，91は左側縁に二次加工が施され，右側縁は自然面が残る。92は右側縁から下部にかけて丁寧な二次加工を施し，刃部を形成している。背面は自然面を残す。

使用痕剥片（第33図　93，94）

93は日東産の黒曜石を，94は上牛鼻産の黒曜石を使用している。93は，右側縁から下部にかけて，94は左側縁に微細剥離が確認できる。さらに94の腹面には平坦剥離が施されている。

磨製石斧（第33図　95，96）

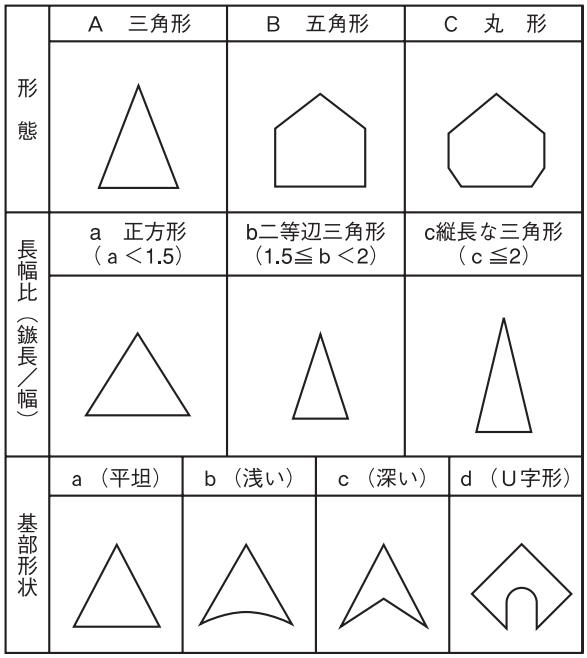
95は安山岩の自然礫を使用し，下部に剥離加工を施し刃部を形成している。96は表裏面に入念な研磨が施され，両側縁から整形剥離を施した局部磨製の石斧である。

礫器（第33図　97～100）

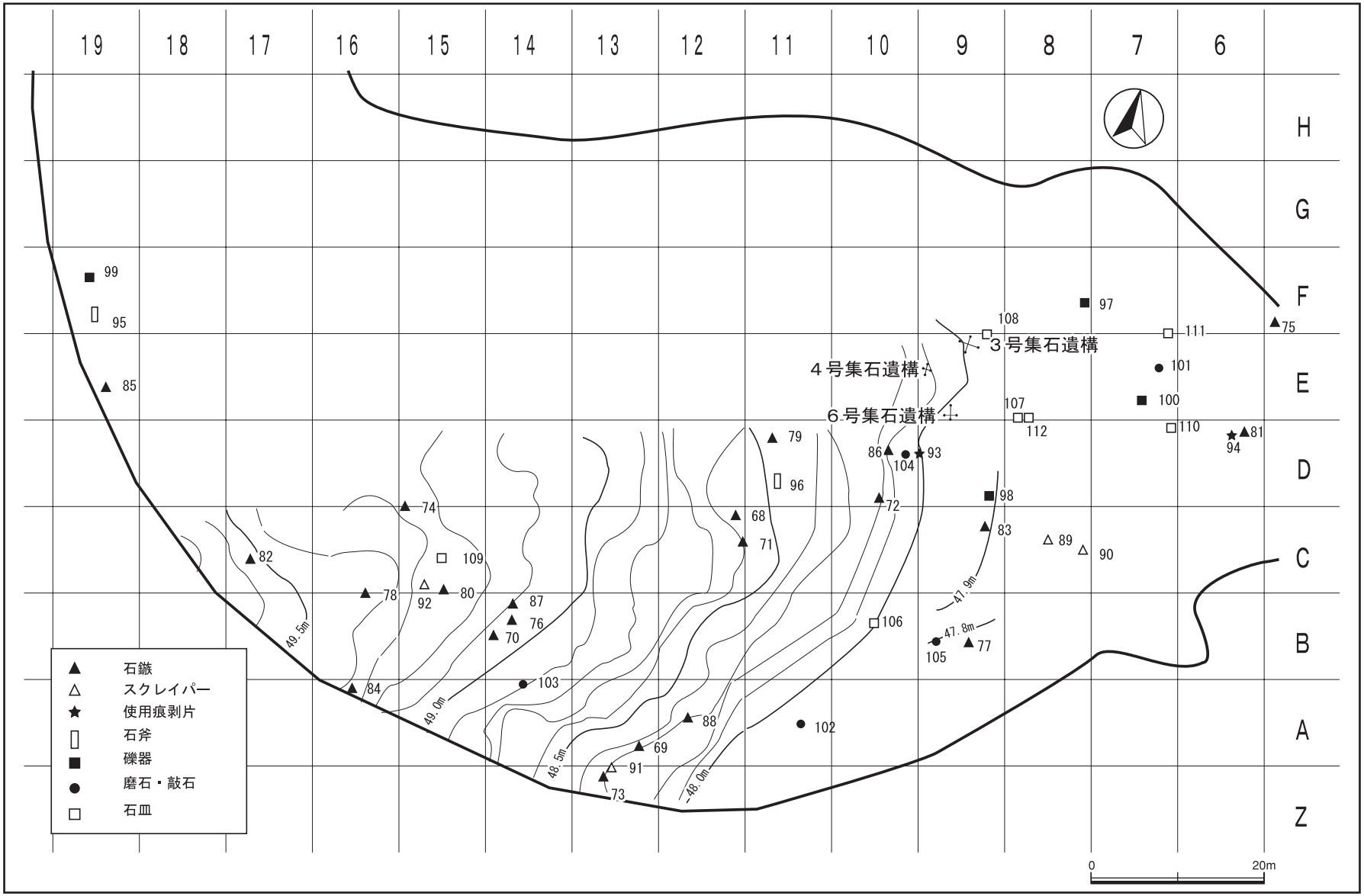
97～100は両面に自然面を残すもので，97は右側縁に，98は下部に剥離を施している。99には接合できる破片が一点出土している（図化はしていない）。自然礫を使用し下部に剥離を施した後，半分に割れている。100は自然礫の両側と下部に剥離を施し，下部に刃部を形成している。

磨石・敲石・凹石（第34図　101～105）

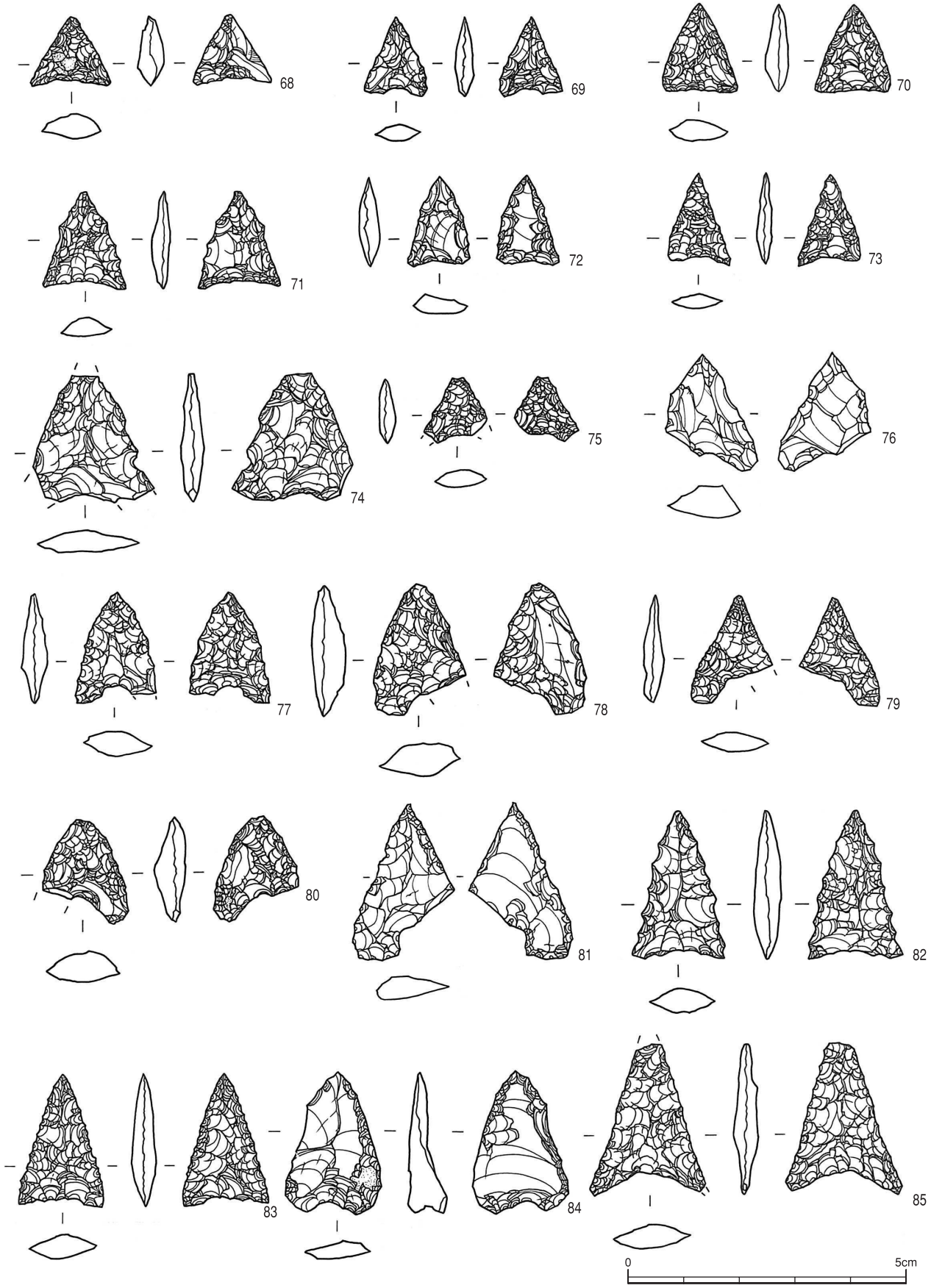
101，102は円礫を用いた磨石，敲石の機能をもつもので部分的に敲打の痕跡が確認される。103，104は自然礫を使用し，103は側面に敲打の痕跡がみられ，104は部分的に敲打の痕跡がみられる。105は磨石の機能を持つもので，表裏面に磨面が確認される。



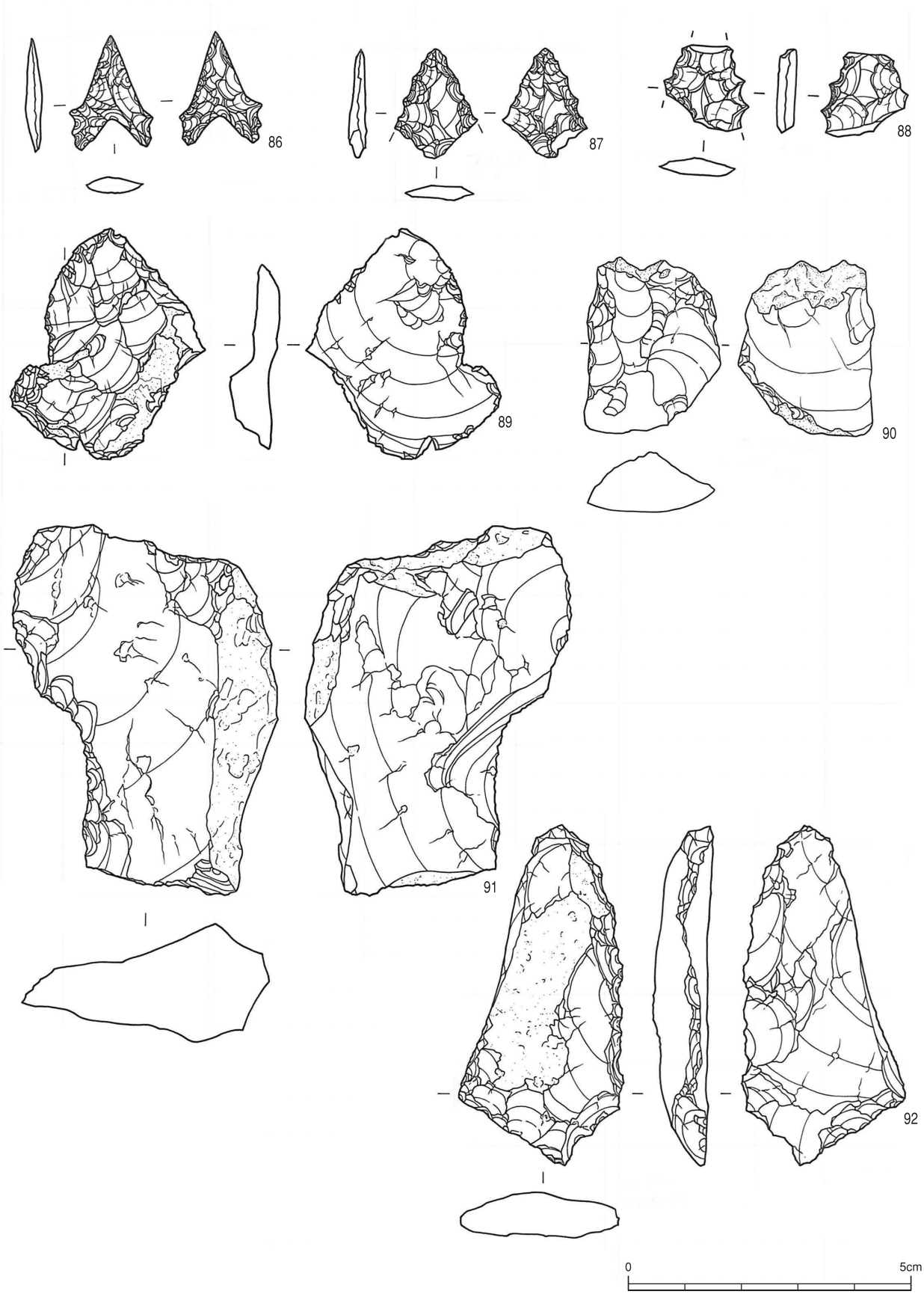
※　農業センター遺跡群報告書（98）石鏃分類表より



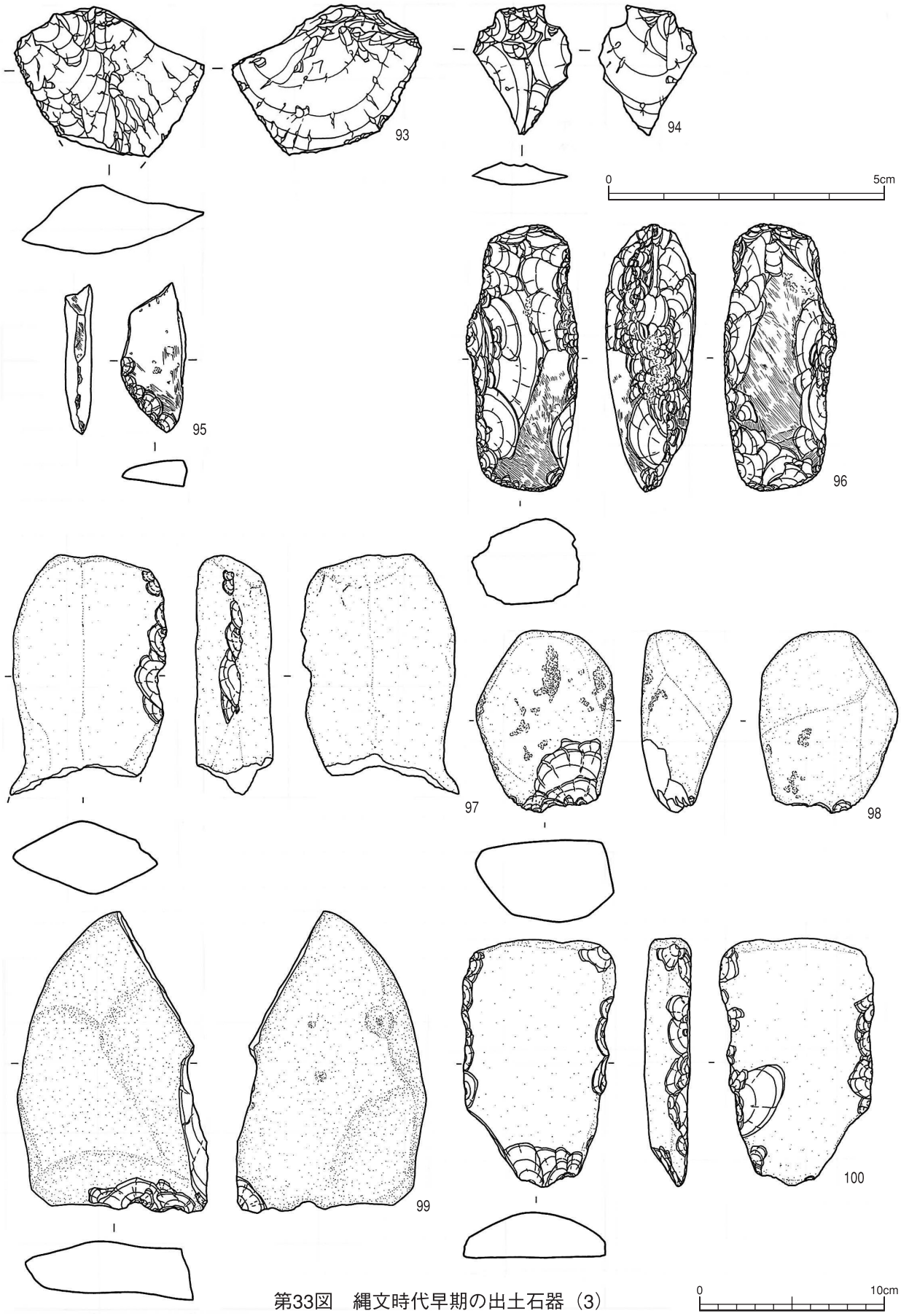
第30図　縄文時代早期の石器出土分布



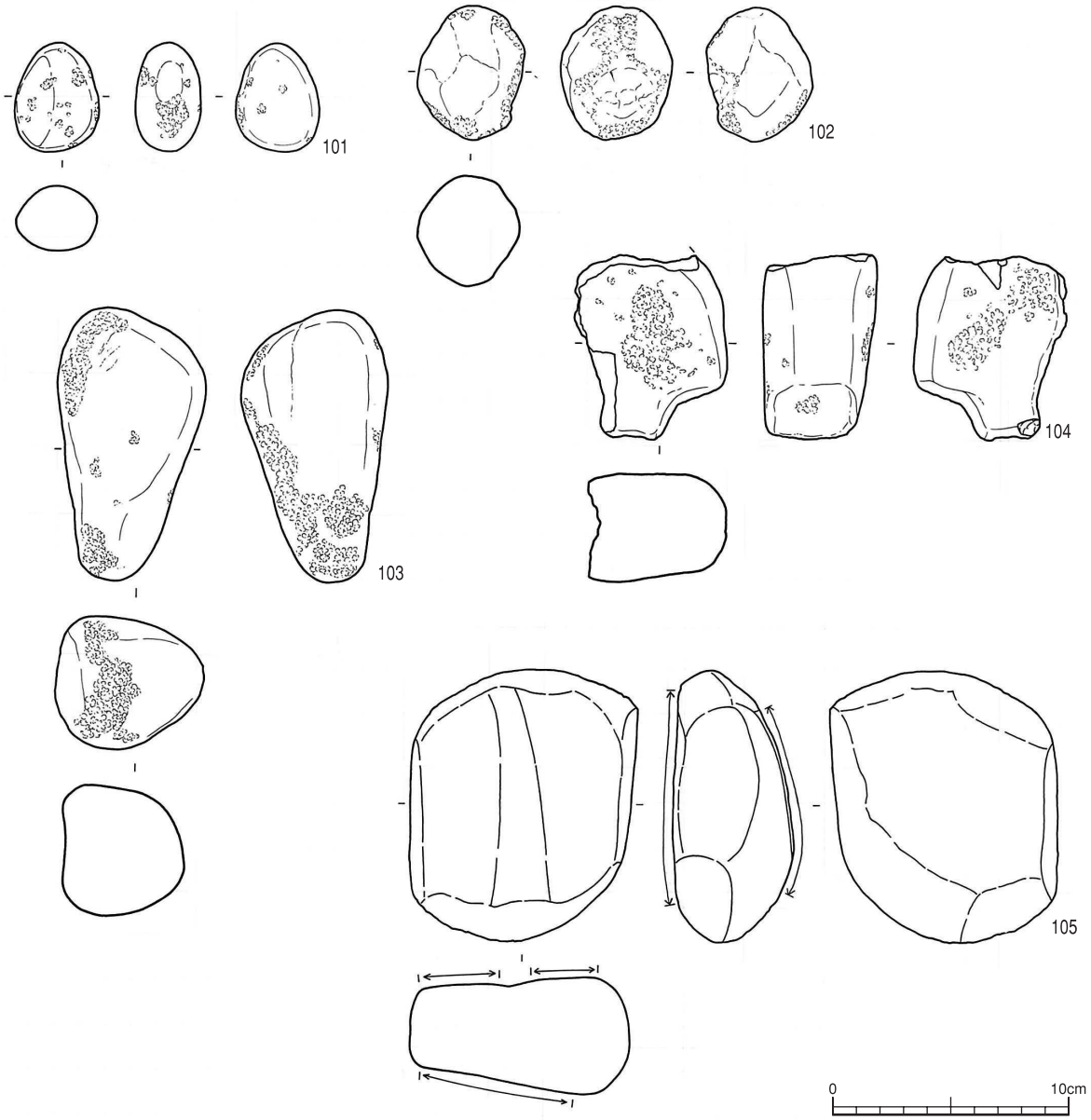
第31図　縄文時代早期の出土石器（1）



第32図　縄文時代早期の出土石器（2）



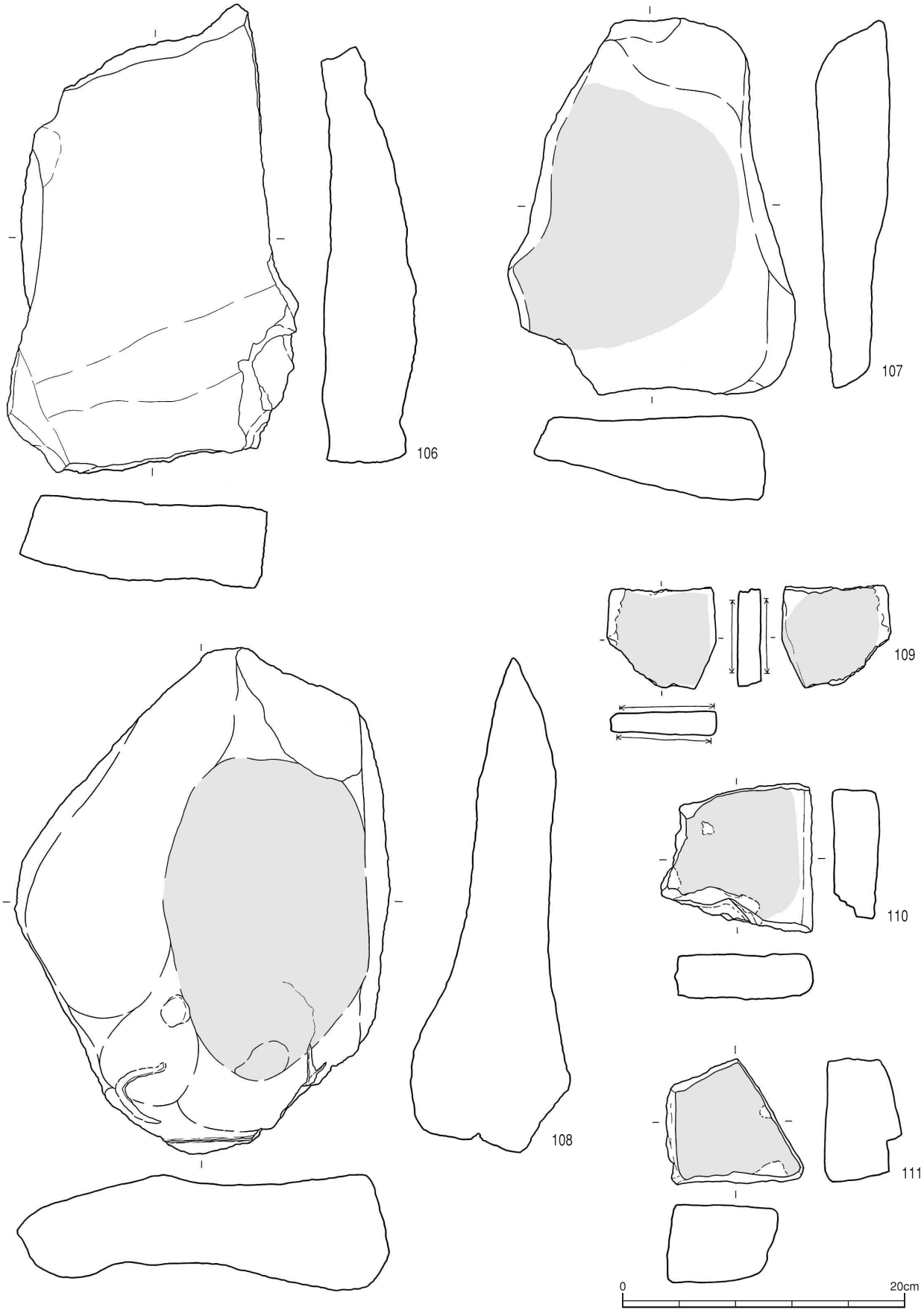
第33図　縄文時代早期の出土石器（3）



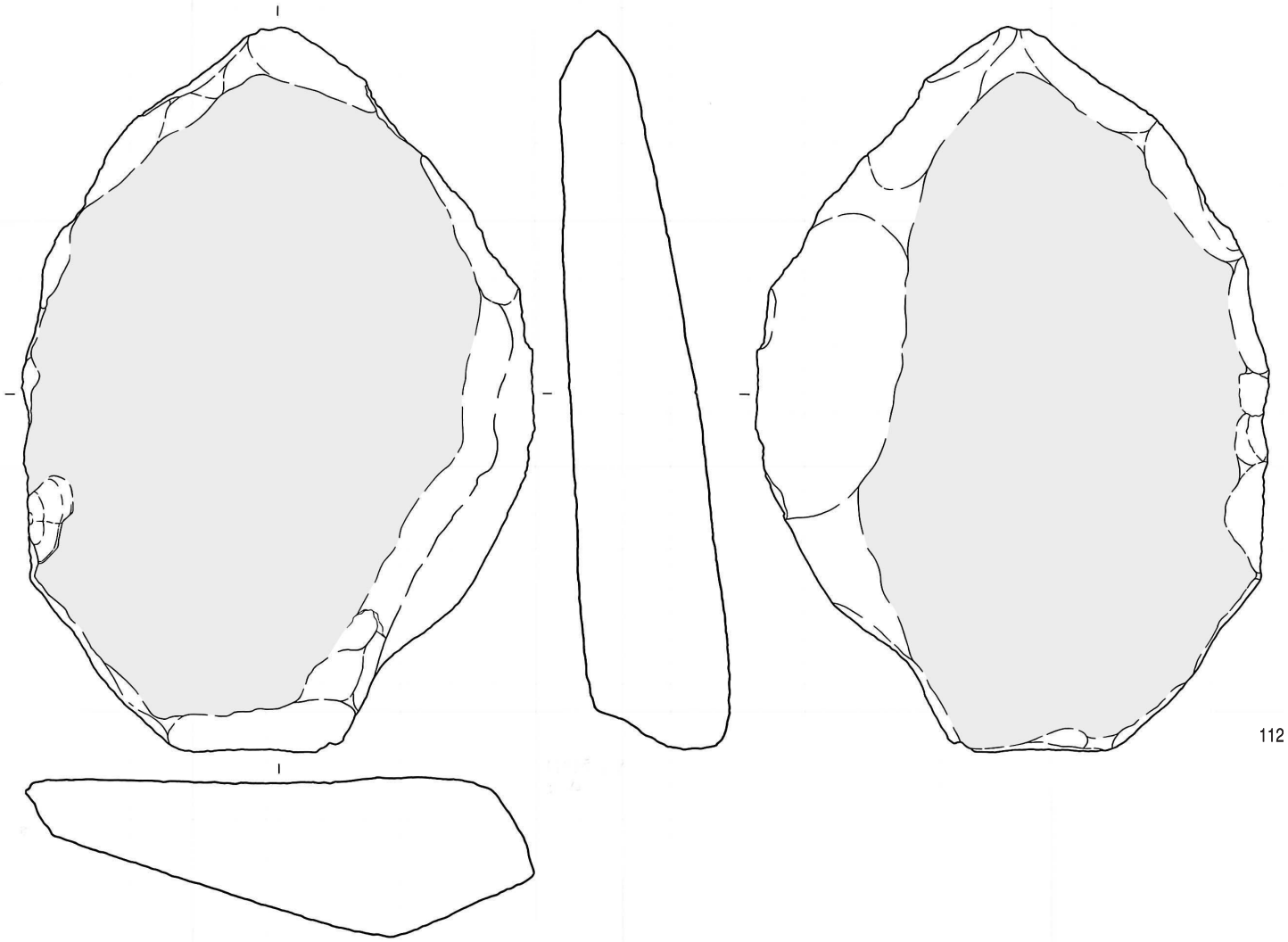
第34図　縄文時代早期の出土石器（4）

石皿（第35図　106～111，第36図　112）

106～112は石皿で，素材は安山岩を使用し，ほとんどが石の目がつぶされたなめらかな面があり，窪みや擦痕がみられる石器である。106～108，112は大型の礫を使用し，106，107，112は皿部がほぼ平坦な石器である。108は皿部が窪む石器であり，長軸方向で斜面の低い方に「掃き出し口」が明瞭に作られている。109～111もまた，大型の礫を使用し，皿部が平坦になる石器であると考えられるが，細かく割れて出土した。



第35図　縄文時代早期の出土石器（5）



第36図　縄文時代早期の出土石器（6）

0　20cm

第６表　縄文時代早期の石器観察表

挿図番号	遺物番号	出土区	層	遺物名	石　材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	注記番号	備　考
第31図	68	C-12	Ⅳ	石　鏃	上牛鼻産黒曜石	1.24	1.41	0.47	0.49	4166	
	69	A-13	Ⅳ	石　鏃	西九州産黒曜石	1.43	1.12	0.35	0.40	2895	
	70	B-14	Ⅳ	石　鏃	玉　髄	1.58	1.33	0.43	0.66	2732	
	71	C-12	Ⅳ	石　鏃	玉　髄	1.74	1.48	0.33	0.55	4263	
	72	D-10	Ⅳ	石　鏃	西九州産黒曜石	1.60	1.09	0.37	0.55	4055	
	73	Z-13	Ⅳ	石　鏃	針尾産黒曜石	1.72	1.00	0.26	0.29	2872	
	74	C-15	Ⅳ	石　鏃	砂　岩	(2.31)	(2.18)	0.41	1.77	1794	
	75	F-5	Ⅳ	石　鏃	桑木津留黒曜石	(1.17)	(1.14)	0.30	0.29	353	
	76	B-14	Ⅳ	石　鏃	安　山　岩	2.19	1.65	0.60	1.66	2712	
	77	B-9	Ⅳ	石　鏃	砂　岩	1.98	1.46	0.45	0.91	4914	
	78	B-16	Ⅳ	石　鏃	上牛鼻産黒曜石	(2.38)	(1.65)	0.61	1.91	3266	
	79	D-11	Ⅳ	石　鏃	鉄　石　英	(1.96)	(1.44)	0.36	0.60	4102	
	80	C-15	Ⅴ	石　鏃	上牛鼻産黒曜石	(1.90)	(1.50)	0.55	1.29	3504	
	81	D-6	Ⅳ	石　鏃	上牛鼻産黒曜石	2.85	1.92	0.42	1.41	358	
	82	C-17	Ⅳ	石　鏃	安　山　岩	2.71	1.68	0.49	1.61	3281	
	83	C-9	Ⅳ	石　鏃	上牛鼻産黒曜石	2.38	1.50	0.43	1.07	4046	
	84	A-16	Ⅳ	石　鏃	鉄　石　英	2.48	1.69	0.70	1.58	3313	
	85	E-19	Ⅴ	石　鏃	珪　質　頁　岩	(2.72)	2.10	0.42	1.20	1187	
第32図	86	D-10	Ⅳ	石　鏃	安　山　岩	1.99	1.44	0.30	0.42	4006	
	87	B-14	Ⅳ	石　鏃	安　山　岩	(1.92)	(1.44)	0.30	0.66	2093	
	88	A-12	Ⅳ	石　鏃	安　山　岩	(1.49)	(1.52)	0.30	0.75	3768	
	89	C-8	Ⅳ	スクレイパー	上牛鼻産黒曜石	4.05	3.42	0.86	9.52	309	
	90	C-8	Ⅳ	スクレイパー	玉　髄	3.14	2.43	1.08	8.42	304	
	91	Z-13	Ⅳ	スクレイパー	安　山　岩	6.48	4.69	2.10	56.19	2877	
	92	C-15	Ⅳ	スクレイパー	安　山　岩	5.94	2.91	0.78	16.77	3710	
第33図	93	D-9	Ⅳ	使用痕石器	日東産黒曜石	2.67	3.42	1.22	8.44	4348	微細剥離痕
	94	D-6	Ⅳ	使用痕石器	上牛鼻産黒曜石	2.30	1.74	0.39	1.14	365	微細剥離痕
	95	F-19	Ⅳ	石　斧	安　山　岩	8.08	3.48	1.48	45.00	1040	
	96	D-11	Ⅳ	石　斧	頁　岩	14.41	6.02	4.88	540.00	4108	
	97	F-8	Ⅳ	礫　器	安　山　岩	12.87	8.48	4.19	540.00	196	
	98	D-9	Ⅳ	礫　器	安　山　岩	9.80	7.41	4.82	390.00	4383	
	99	F-19	Ⅳ	礫　器	安　山　岩	16.20	10.22	3.21	690.00	1042	未製品
	100	E-7	Ⅳ	礫　器	安　山　岩	13.36	8.35	2.53	390.00	96	
第34図	101	E-7	Ⅳ	磨石・敲石	安　山　岩	4.67	3.55	2.79	50.00	182	
	102	A-11	Ⅳ	敲　石	安　山　岩	5.80	4.58	4.76	150.00	3872	
	103	A-14	Ⅳ	敲　石	安　山　岩	11.90	6.27	5.72	450.00	1331	
	104	D-10	Ⅳ	磨　石	安　山　岩	7.80	6.55	4.81	350.00	4010	
	105	B-9	Ⅳ	磨石・敲石	安　山　岩	11.57	9.63	5.17	790.00	4918	
第35図	106	B-10	Ⅳ	石　皿	安　山　岩	32.95	20.50	6.60	600.00	4083	
	107	E-8	Ⅳ	石　皿	安　山　岩	26.60	20.10	5.20	420.00	－	
	108	E-9	Ⅳ	石　皿	安　山　岩	35.60	26.60	11.30	1020.00	4838	
	109	C-15	Ⅳ	石　皿	安　山　岩	7.10	7.70	1.70	160.00	3505	
	110	D-7	Ⅳ	石　皿	安　山　岩	10.60	10.80	3.20	620.00	328	
	111	E-7	Ⅳ	石　皿	安　山　岩	8.80	9.70	5.40	700.00	178	
第36図	112	E-8	Ⅳ	石　皿	安　山　岩	42.70	30.40	10.05	1580.00	－	

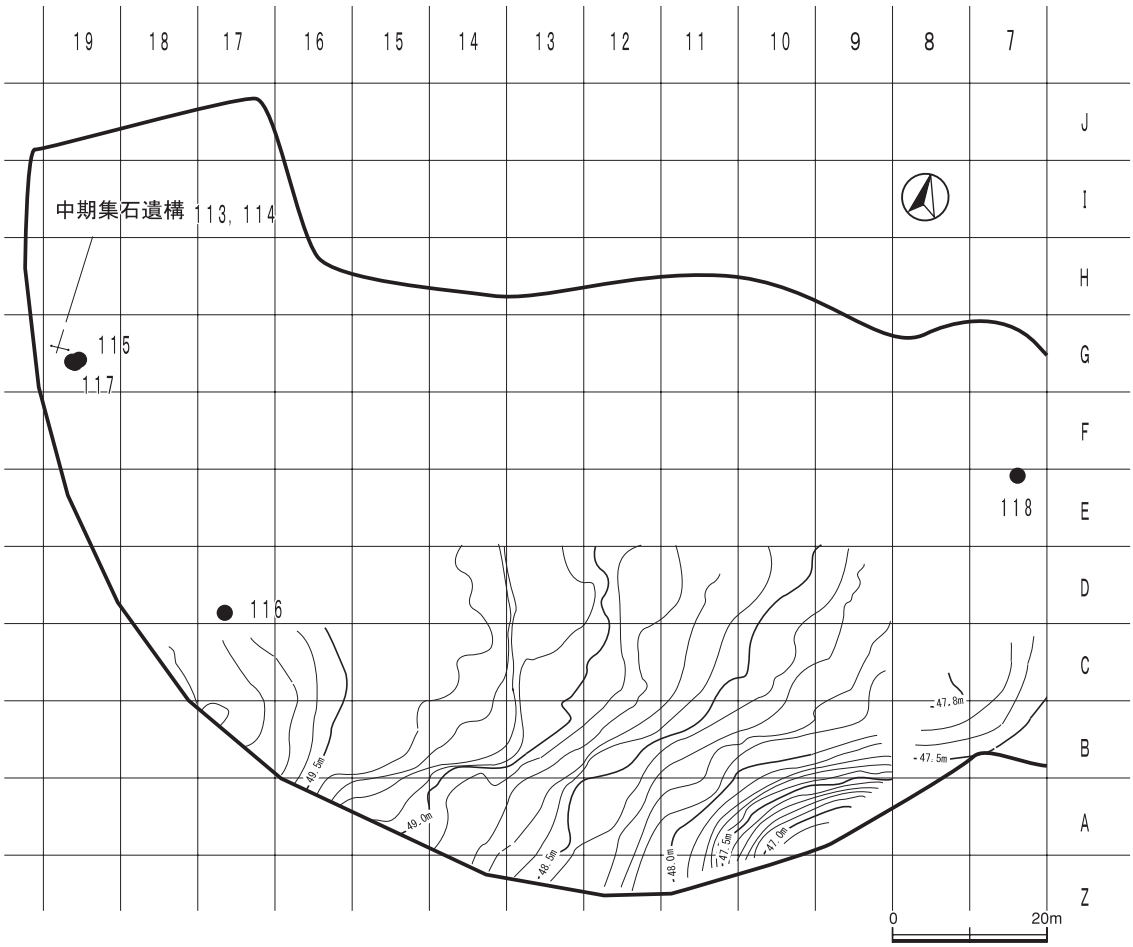
2　中期・後期の調査

中期は，Ｆ－19区のⅢa層で集石遺構が１基確認され，遺構内からⅧ類土器が２点出土した。縄文時代後期は４点出土し，図化した。

(1)　遺　構

集石遺構（第38図）

集石遺構は120cm×100cmの範囲に礫が散在している。19個の礫で構成され，11個に赤化が見られた。構成礫の平均値は，最大長で6.8cm，厚さが3.5cm，重量は116.6cmであった。掘り込みは見られなかった。また第37図に見られるように，120cm×95cmの範囲からは，Ⅷ類土器が連なるように出土した。



第37図　縄文時代中期・後期の遺構配置及び出土遺物分布

(2) 遺構内遺物　Ⅷ類土器（第39図　113，114）

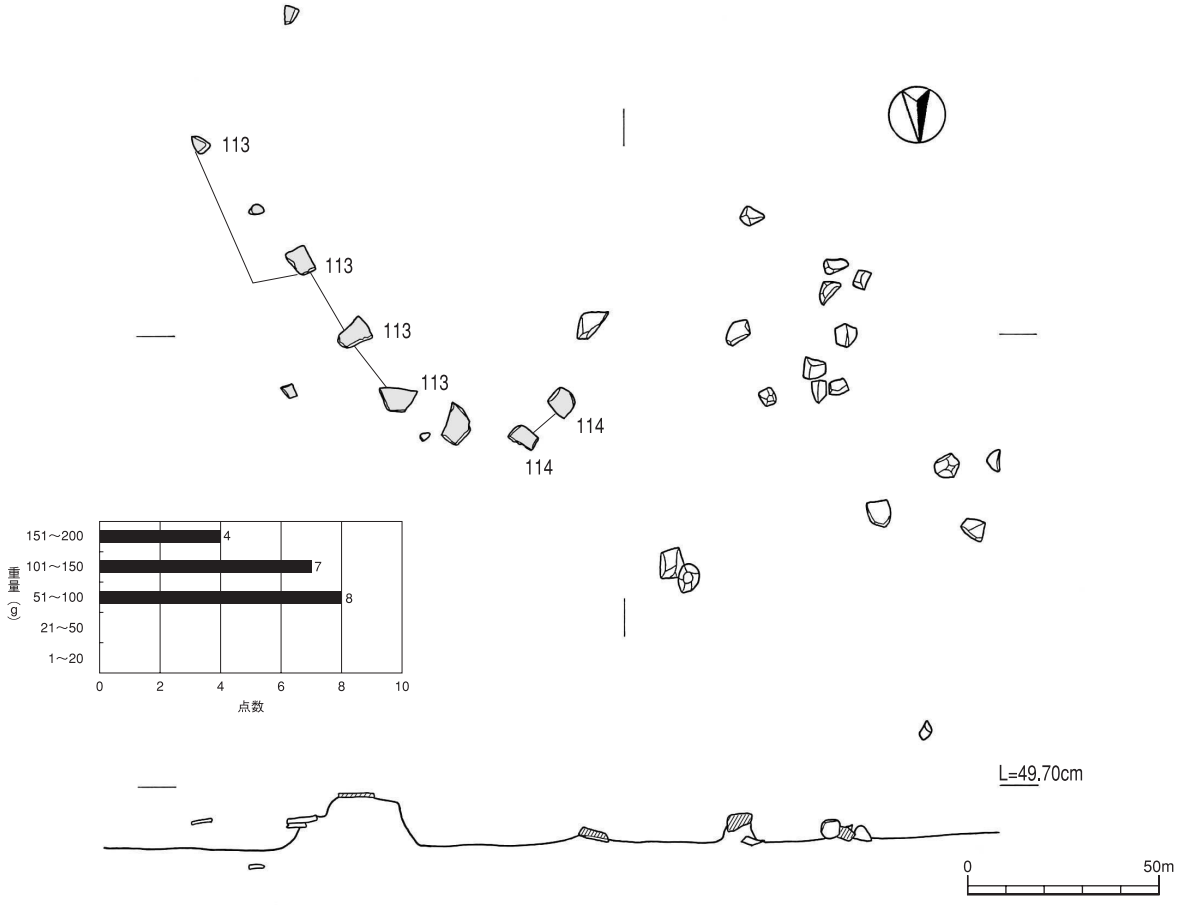
Ⅷ類土器は深鉢形の土器で，口縁部は波状口縁を呈するものがある。外面は楕円形の指頭による押圧や沈線文が施されている。遺構内遺物として４点出土し，２点を図化した。113，114は胴部片で，表裏ともにナデ調整である。色調は，表裏ともにぶい赤褐色であり，胎土から角閃石と滑石が確認された。口縁部は指圧文が見られ，口唇部には波状口縁を呈している。

(3) 遺　物

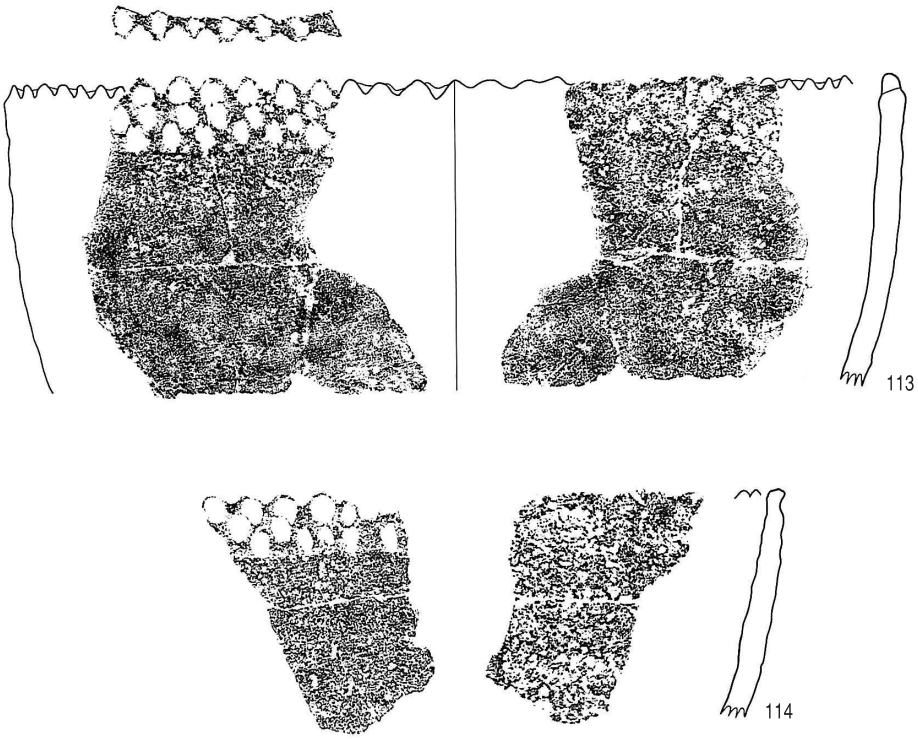
土　器

Ⅸ類土器（第40図　115～118）

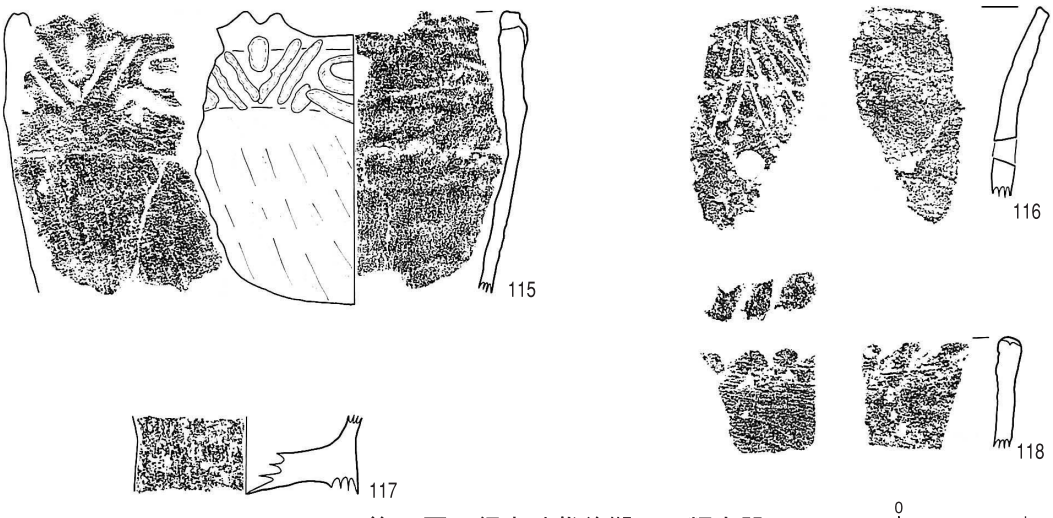
Ⅸ類土器は，口縁部分の外面に細い沈線文や指圧文等の文様が集約された深鉢形の土器である。115，116，118は，口縁部片である。115は文様が集約され外面に指圧文が施文され，沈線文が短い。口唇部は部分的に山形の突起を有し平坦である。外面調整はケズリである。116は，線刻が施され口唇部は平坦である。直径が約８㎜の補修孔が確認された。118は，口唇部に練り状の波状口縁が見られた。



第38図　縄文時代中期の集石遺構



第39図　縄文時代中期の遺構内遺物Ⅷ類土器



第40図　縄文時代後期のⅨ類土器

0　10cm

第７表　縄文時代中期・後期の土器観察表

挿図番号	遺物番号	出土区	層位	分類	部位	色 外面	調 内面	胎土 石英	長石	角閃石	その他	焼成	調整 外面・底部	内面	備考
第39図	113	G-19	2号集石	Ⅷ	口縁部	にぶい赤褐	にぶい赤褐			○	○	良		ナデ	滑石
	114	G-19	2号集石		口縁部	にぶい赤褐	にぶい赤褐				○	良	ナデ	ナデ	滑石
第40図	115	G-19	Ⅲa	Ⅸ	口縁部	橙	にぶい黄橙	○	○	○		良	沈線	ナデ	
	116	D-17	Ⅲa		口縁部	橙	にぶい橙	○	○	○		良	条痕	ナデ	補修穴あり
	117	G-19	Ⅲa		底部	橙	にぶい黄褐		○	○	○	良	ナデ	ナデ	火山ガラス(透明・黒褐色)
	118	E-7	Ⅲa		口縁部	にぶい褐	にぶい黄橙		○	○	○	良	条痕	ナデ	火山ガラス(黒褐色)

3　晩期の調査

晩期は，集石遺構が２基が検出され，Ⅲa層から深鉢形や浅鉢形の土器や，石鏃，スクレイパー，礫器，磨石，石皿等の石器が出土した。

(1)　遺　構

１号集石遺構（第42図）

１号集石遺構はＢ－９・10区のⅢa層で検出され，335㎝×220㎝の範囲に礫が散在している。44個の礫から構成され，ほぼ全ての礫に赤化が見られた。構成礫の平均値は，最大長で9.0㎝，厚さが3.7㎝，重量は，628.1ｇであった。掘り込みは見られなかった。

２号集石遺構（第43図）

２号集石遺構はＨ，Ｇ－16区のⅢa層上面で検出され，130㎝×90㎝の範囲に広がり，上下の幅は10㎝である。22個の礫で構成され，16個に赤化が見られた。構成礫の平均値は，最大長で8.0㎝，厚さが4.0㎝，重量が195.0ｇであった。

(2)　遺　物

１　土　器

晩期の土器は，深鉢と浅鉢に形態を分類できる。概して深鉢は粗製，浅鉢は精製である。主にⅢa層から出土し，深鉢は24点中15点，浅鉢は20点中３点を図化した。また，組織痕土器も確認され，25点中４点を図化した。

①　深鉢（第44図　119～123）

119～123は，深鉢の口縁部である。119～123は内外面ともナデ調整であり，口唇部は丸みを帯びている。120，121は内弯気味に外反するものである。123は波状口縁となり直線状に立ち上がっている。

124～133は，深鉢の胴部である。129，131の外面は貝殻条痕で調整され，内面は貝殻条痕後，ナデ調整が施されている。127，128，130は屈曲部の稜が明瞭である。

②　浅鉢（第45図　134～136）

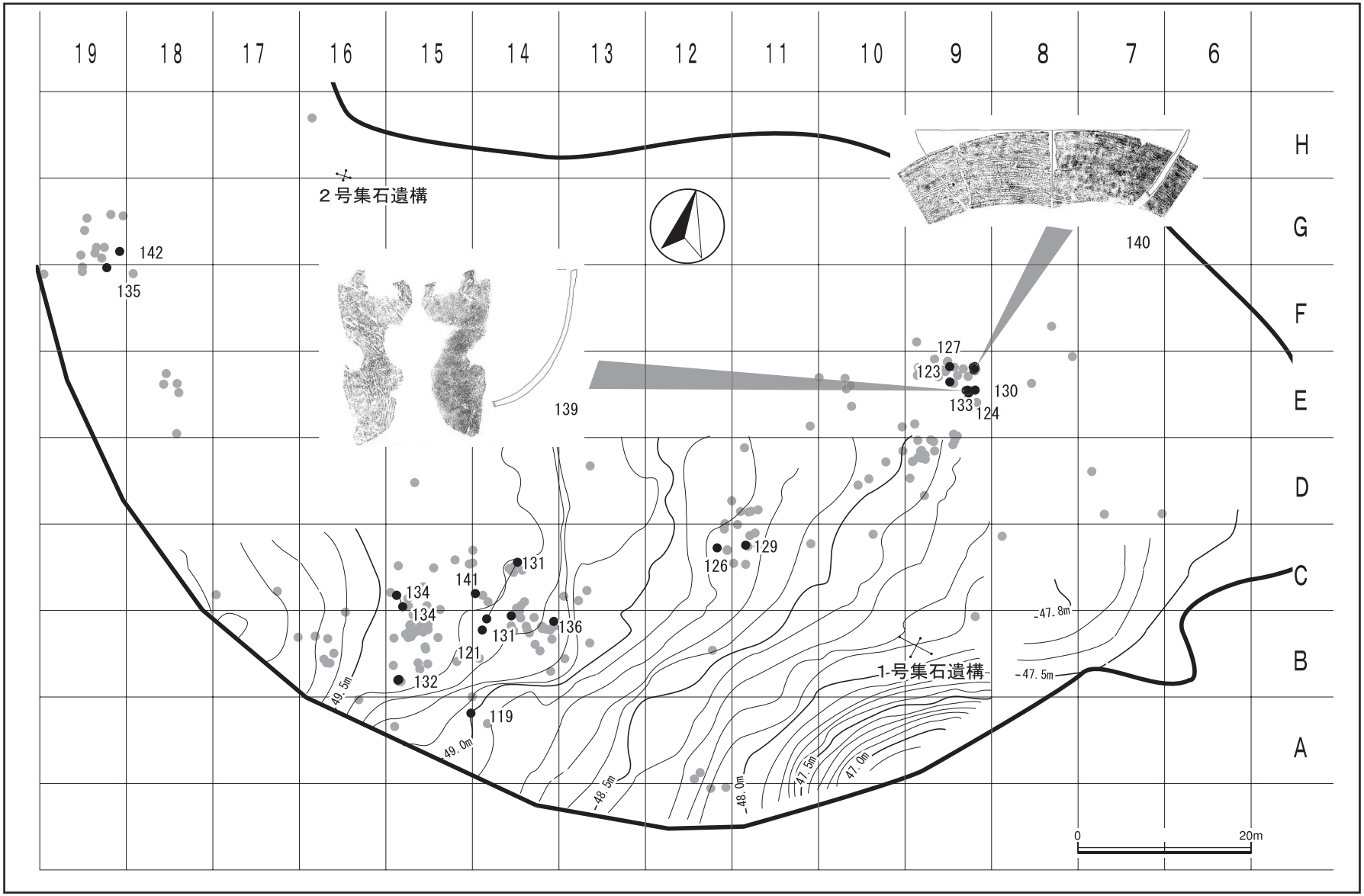
浅鉢は，ほとんどが内外面に丁寧なミガキを施す精製土器である。134～136は口縁部で，口唇部は玉縁状の口縁を呈し，135は外面の口縁下部に沈線を施している。

③　組織痕土器（第45図　137～139，第46図　140）

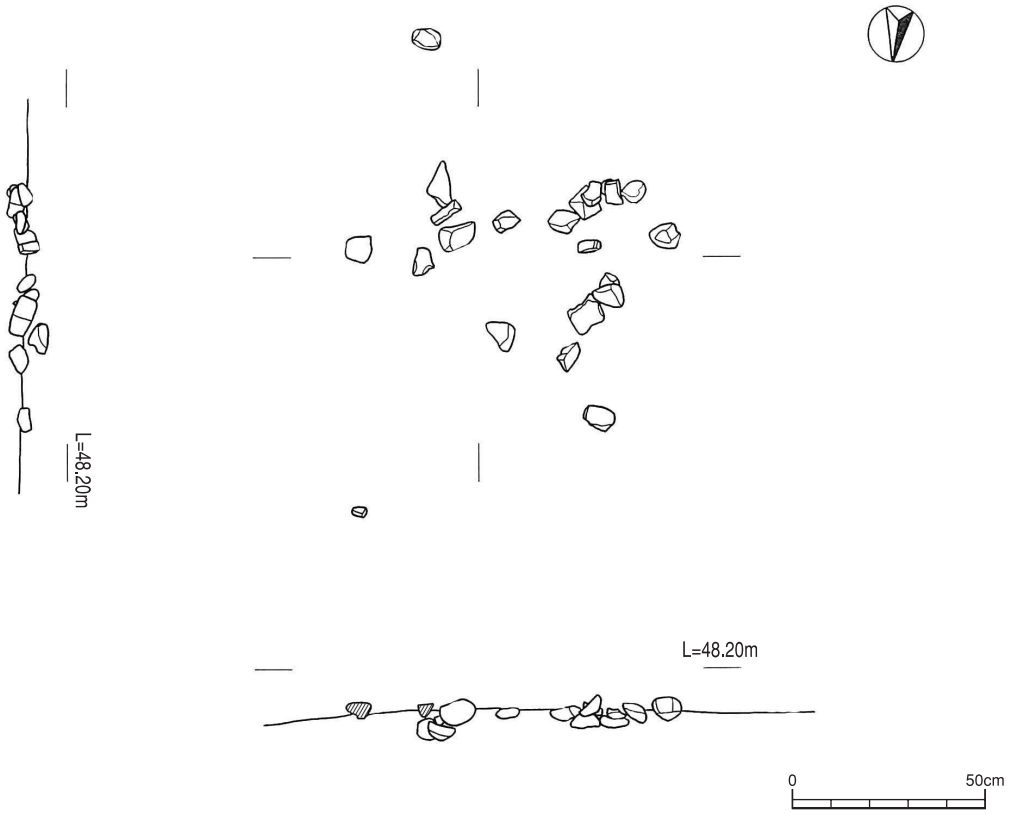
組織痕土器は，中華鍋形の器形を呈し，口縁部下位に組織の圧痕がみられる。137～140は口縁部である。137は，小破片で器形や大きさは不明であるが，外面にハケメ調整がみられ，内面はミガキが施されている。138～140は大型の組織痕土器である。138，139の外面の組織痕は不明であるが，口縁部上部に貝殻条痕の調整が施され，内面は部分的にミガキが施されている。また，胴部下位から口縁部にかけてやや垂直に外反する。140は口縁部から胴部まで接合できたものであり，口縁径が約45㎝である。上位は貝殻条痕で調整され，内面は条痕調整後，全体的にミガキが施されている。

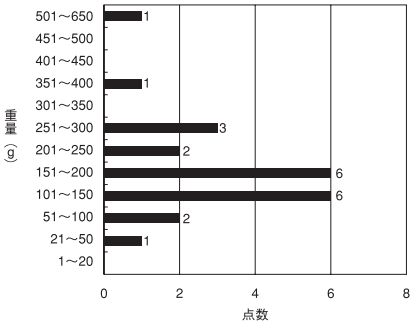
④　その他の土器（第46図　141～143）

141は屈曲する明瞭な稜がみられる胴部片である。屈曲の上部にわずかではあるが突帯文が残っている。142，143は深鉢の底部と思われる。内外面ともナデ調整で施されている。

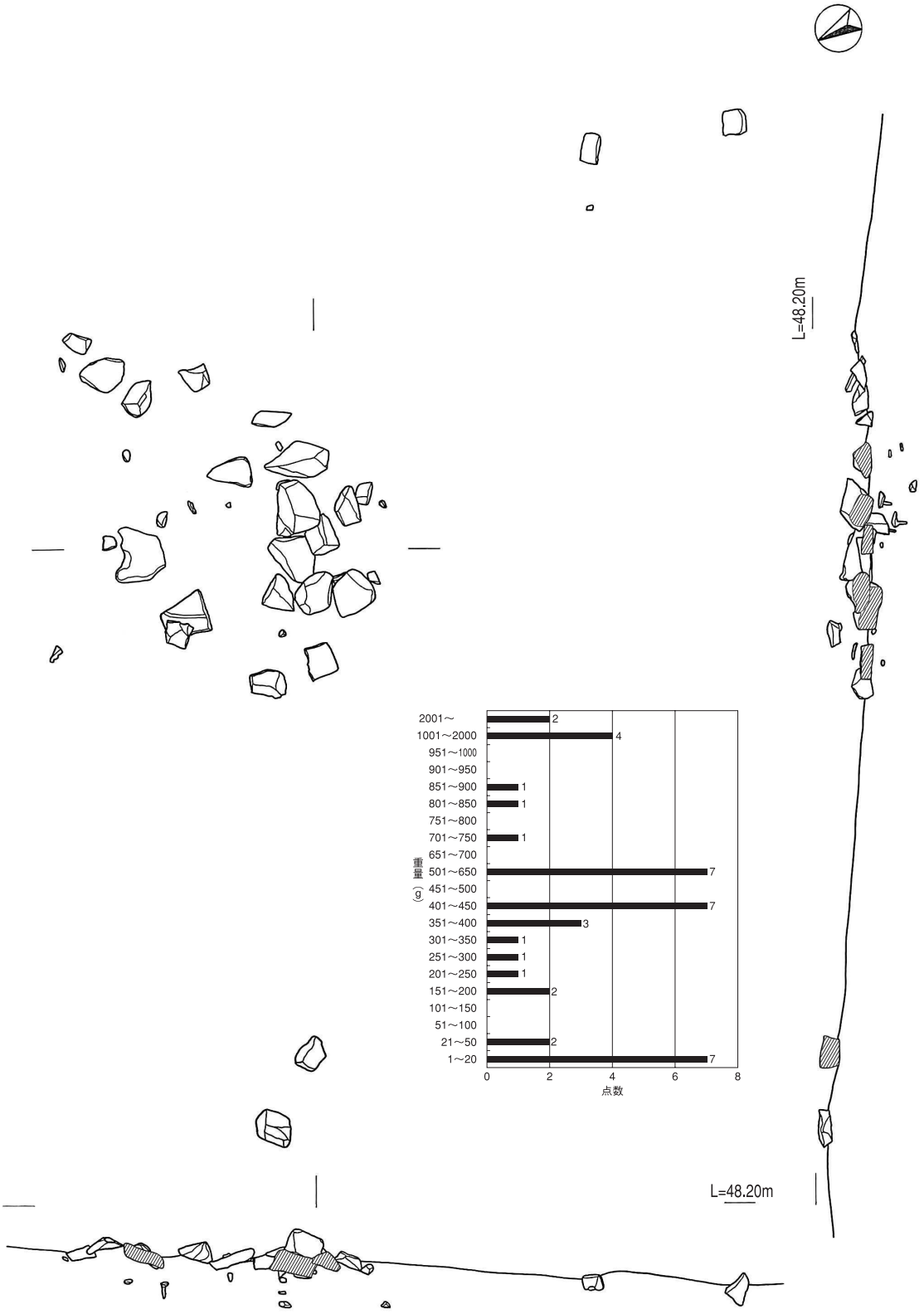


第41図　縄文時代晩期の遺構配置図及び土器出土分布



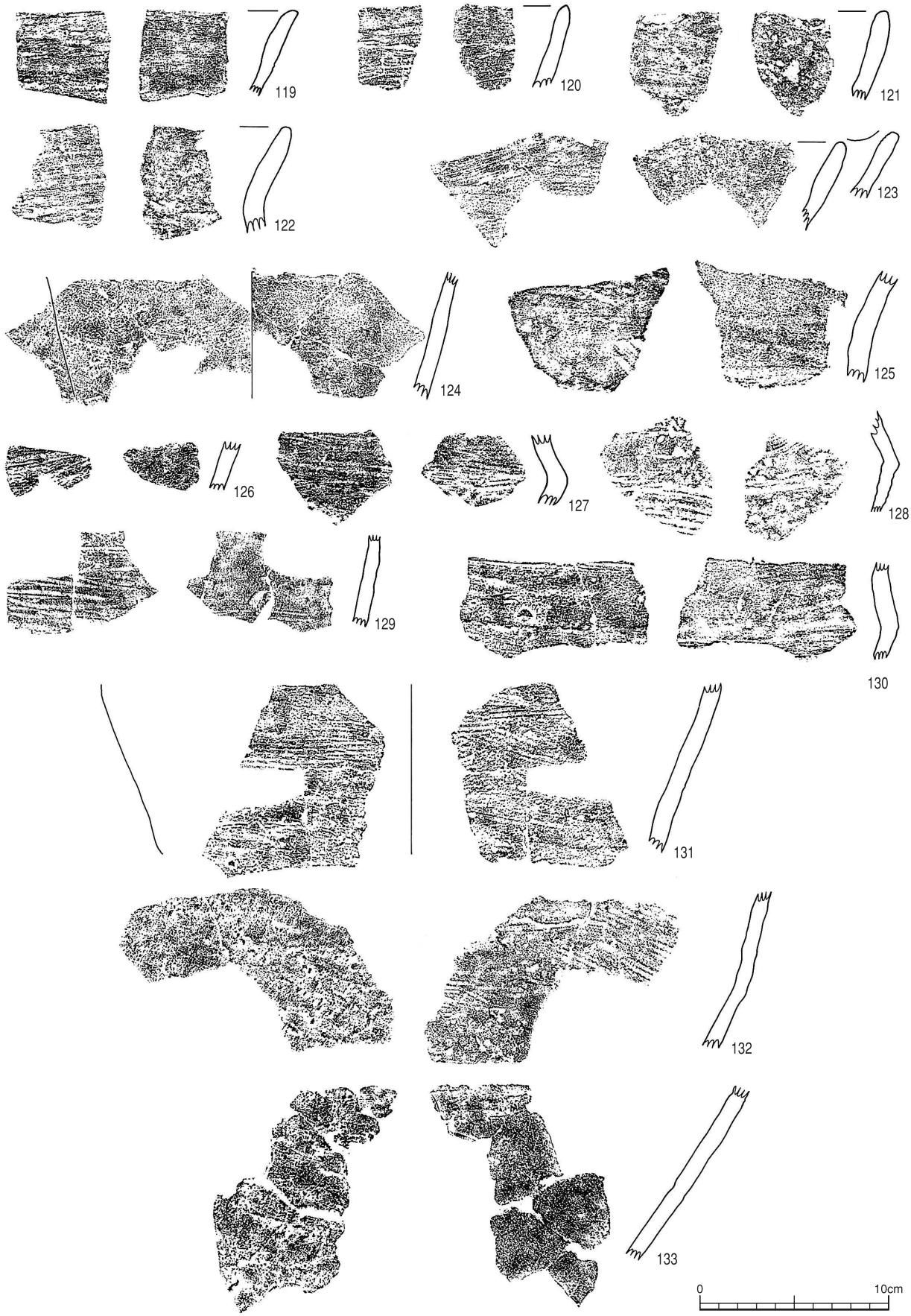


第42図　縄文時代晩期の１号集石遺構



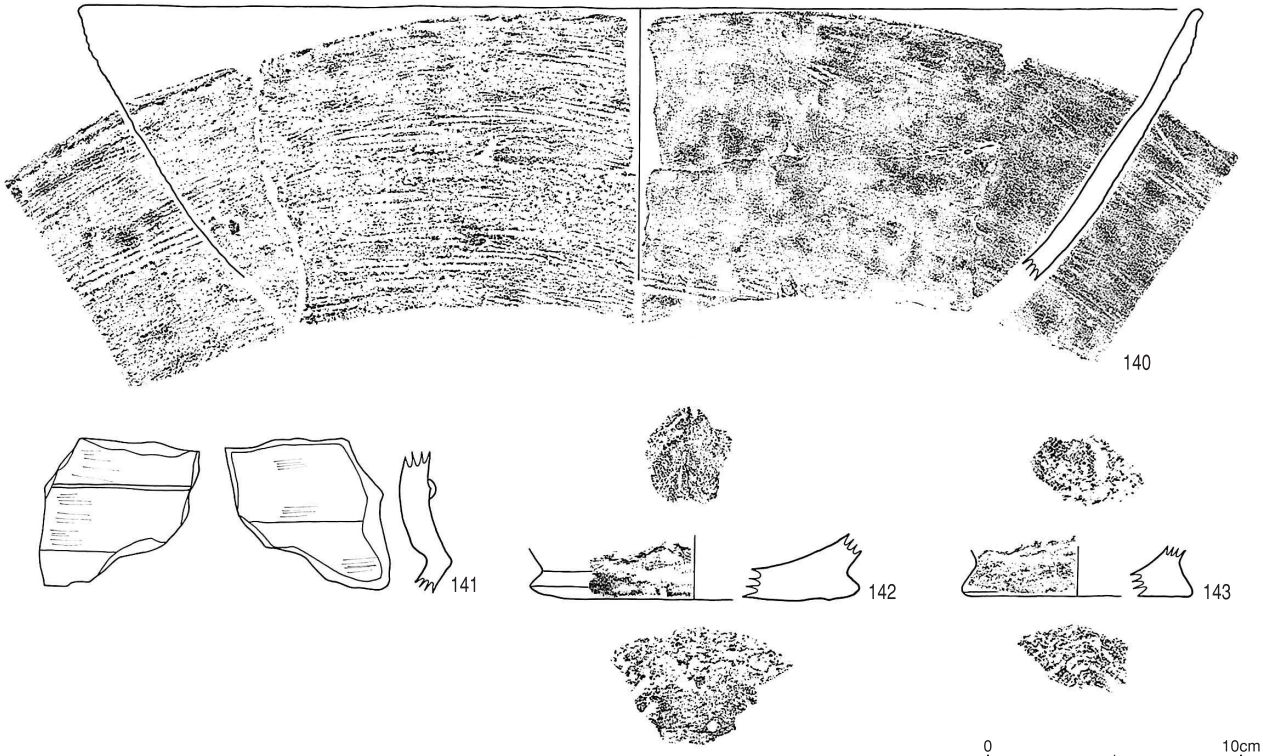
第43図　縄文時代晩期の２号集石遺構

0　50cm



第44図　縄文時代晩期の土器（1）

第45図　縄文時代晩期の土器（2）



第46図　縄文時代晩期の土器（3）

第８表　縄文時代晩期の土器観察表

挿図番号	遺物番号	出土区	層位	分類	部位	色 外面	調 内面	胎土 石英	胎土 長石	胎土 角閃石	胎土 その他	焼成	調整 外面・底部	調整 内面	備考
第44図	119	A-15	V	縄文時代晩期土器	口縁部	にぶい橙	にぶい橙		○	○		良	ナデ	ナデ	
	120	E-9	一括		口縁部	灰黄褐	灰黄褐		○	○		良	ハケ	ナデ	
	121	B-14	Ⅲa		口縁部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○		良	板ナデ	板ナデ	
	122	表層	一括		口縁部	灰	にぶい黄橙	○	○	○		良	ナデ	ナデ	
	123	E-9	Ⅲa		口縁部	黄灰	暗黄灰	○	○			良	ミガキ・ナデ	ナデ	
	124	E-9	Ⅲa		胴部	にぶ黄橙	にぶ黄橙	○	○	○		良	ミガキ	ナデ	
	125	B-13	一括		胴部	にぶい黄橙	浅黄	○	○	○		良	ハケ・ナデ	ナデ	
	126	C-12	Ⅳ		胴部	黒褐	灰	○	○	○		良	ミガキ	ナデ	
	127	E-9	Ⅲa		胴部	にぶい黄橙	にぶい黄		○	○		良	ミガキ	ミガキ・板ナデ	
	128	F-8	Ⅱ		肩部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○		良	条痕	ナデ	
	129	C-11	Ⅲa		胴部	灰黄	灰	○	○	○		良	貝殻条痕文	貝殻条痕文・ナデ	
	130	E-9	Ⅲa		胴部	にぶい黄橙	黄灰	○	○	○		良	ハケ・ナデ	ナデ	
	131	C-14	Ⅲa		胴部	にぶい黄	黄灰		○	○		良	貝殻条痕文	貝殻条痕文・ナデ	
	132	B-15	Ⅲa		胴部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○		良	条痕・ナデ	条痕	
	133	E-9	Ⅲa		胴部	灰褐	にぶい褐		○	○		良	ケズリ	ナデ	
第45図	134	C-15	Ⅲa		口縁部	にぶい黄橙	オリーブ黒	○	○	○		良	ミガキ	ミガキ	
	135	F-19	Ⅳ		口縁部	橙	橙	○	○	○		良	ミガキ	ミガキ	
	136	B-14	Ⅲa		口縁部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○		良	ミガキ	ミガキ	
	137	C-15	Ⅲa		口縁部	にぶい黄橙	オリーブ黒	○	○	○		良	条痕	ミガキ	
	138	E-9	－		口縁部	にぶい橙	にぶい橙	○	○	○		良	ハケ・ナデ	ナデ	
	139	E-9	Ⅲa		口縁部	にぶい橙	にぶい橙	○	○	○		良	ナデ	ナデ	
第46図	140	E-9	－		口縁部	にぶい黄橙	明黄褐	○	○	○		良	条痕・ナデ	ナデ	
	141	C-14	Ⅲa		胴部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○		○		良	ケズリ	ナデ	
	142	G-19	Ⅲa		底部	にぶい黄褐	黒	○	○	○		良	ナデ	ナデ	
	143	BC-16・17	Ⅱ		底部	にぶい黄橙	明灰黄	○	○	○		良	ナデ	ナデ	

2　石　器

縄文時代後期の石器は，主にⅢa層で，石鏃，石匙，スクレイパー，楔形石器，二次加工剥片石器，使用痕剥片，石斧，礫器，磨石，敲石，石皿が出土している。

石鏃（第48図　144～160，第49図　161～167）

石鏃は主にＡ～Ｆ－11～19区に散布しており（図47），24点出土し，すべて図化した。素材は黒曜石（11点），安山岩（５点），玉髄（２点），砂岩（２点），鉄石英（１点），頁岩（１点）である。更に黒曜石の原産地を細分すると上牛鼻産（４点），針尾産を含む西北九州産（５点），三船産（２点）である。

石鏃の分類は，本遺跡の報告書における統一的な分類に従うことにする。（石鏃分類表Ｐ41　参照）

Ａ－ａ－ａ（第48図　144～148）

長幅比が１～1.5で，形状はほぼ正三角形である。基部はほぼ平坦である。

Ａ－ａ－ｂ（第48図　149～153）

長幅比が１～1.5で，形状がほぼ正三角形である。基部は浅い抉りである。

Ａ－ａ－ｃ（第48図　154～158）

長幅比が１～1.5で，形状がほぼ正三角形である。基部は深い抉りである。158は基部が欠損しているが，残された形状からＡ－ａ－ｃに分類できる。

Ａ－ａ－ｄ（第48図　159～160）

長幅比が１～1.5で，形状がほぼ正三角形である。基部はＵ字状を呈する。

Ａ－ｂ－ｃ（第49図　161，162）

長幅比が1.5～２で，形状がほぼ二等辺三角形である。基部は深い抉りである。

Ａ－ｃ－ｃ（第49図　163）

長幅比が２以上で，形状がほぼ二等辺三角形である。基部は深い抉りである。

Ｂ－ａ－ｄ（第49図　164～166）

形状がほぼ五角形で施されている。長幅比が１～1.5で，基部はＵ字状を呈する。

Ｃ－ａ－ｂ（第49図　167）

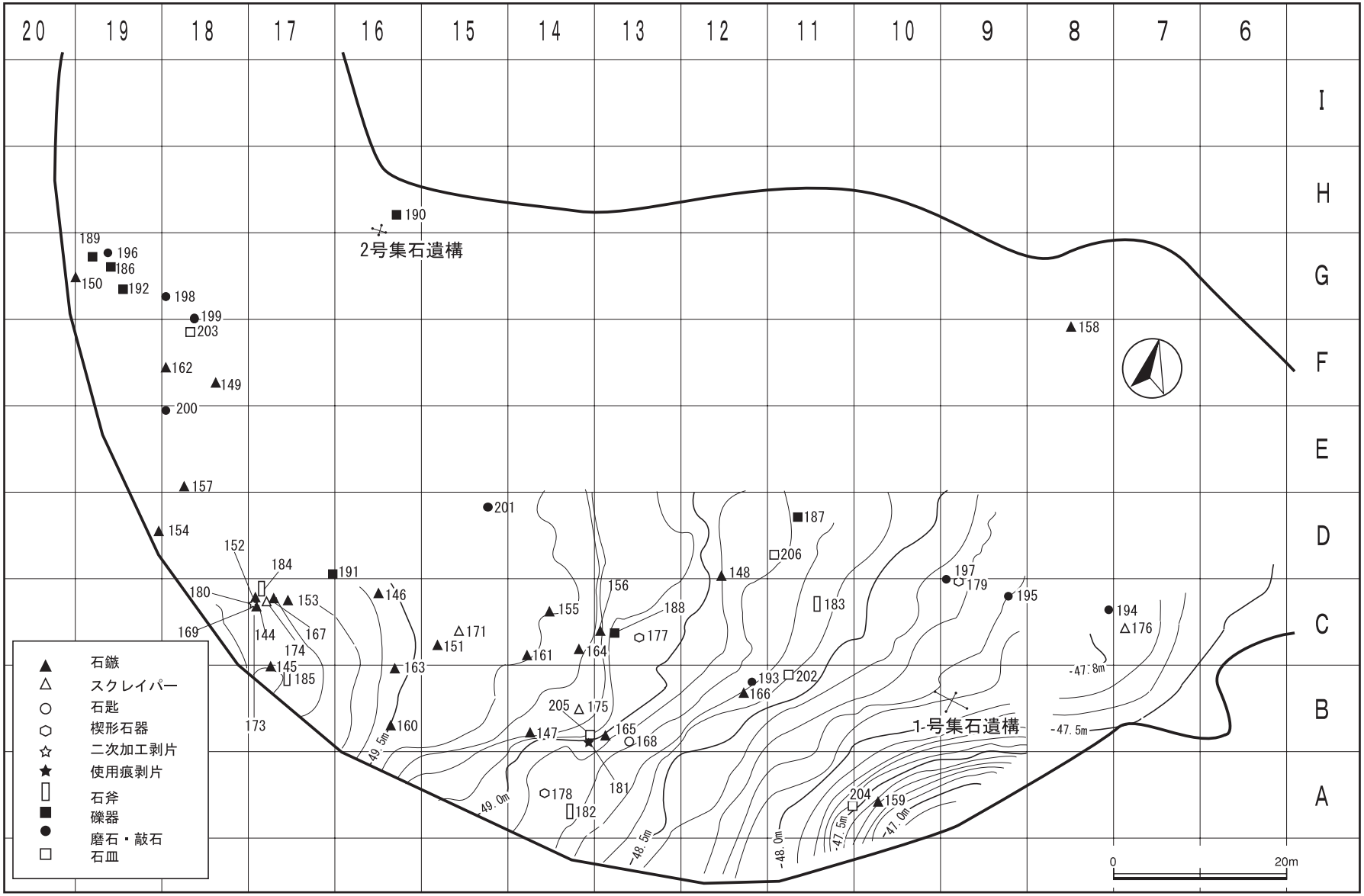
先端部が丸みをおびたものである。長幅比が１～1.5であり，基部は浅い抉りである。

石匙（第50図　168）

168は頁岩の縦長剥片を素材とするもので，両側縁に二次加工を施し刃部を形成している。つまみ部分は粗い剥離により抉りを作り出している。

スクレイパー（第50図　169～174，第51図　175～176）

169，173は上牛鼻産黒曜石，170，174は西北九州産黒曜石，171は頁岩，172はサヌカイト，174は碧玉，176は鉄石英を素材とするもので，主要剥離面から二次加工を施し，刃部を形成している。169，170，173は右側縁に細かな剥離が施されている。171は左側縁から下部にかけて二次加工が施され丸く刃部が作り出されている。172は横長剥片を使用し，下部に両面から二次加工が丁寧に施され鋭い刃部を形成している。176は，剥片の末端に急角度の二次加工が施されている。



第47図　縄文時代晩期の石器出土分布